

「ハ」

「俺の命令が分つたか？」

大佐は痾癩聲で奴鳴つた。

「わかりました。併し」とブレイキー大尉が丁寧と言ふと。

「ぢや、すぐやれ！」

ブレイキーは大佐に敬禮して、

「畏りました。……リトル君、僕と一緒に來給へ」

彼は「廻れ右」をして、急いで、建物の角を廻つて見えなくなつた。そのあとからリトル少尉が當惑顔をしてついて行つた。

大佐の姿が見えなくなると、ブレイキーは立ち止まつて、そこらの柱に寄りかゝつて煙草に火をつけた。

「オイ、リトル君、あれをどう思ふかい？」

リトルは「けしからん爺ですなえ」と、いつた。

「全くだよ。……しかし、リトル君、僕は鐵兜——實戦者の連中をうまく手に入れる方法を教へようか。勿論あの老人の言ふやうにやると、炊事兵、信號兵、機關銃兵の引率で七十頭の馬を送り、あべ

こべに馬丁と馭者を自轉車や、機關銃や、炊具と一緒に行かせるのだよ。そんな馬鹿なことが出来るかい。しかし、僕は理窟は別として安全律に従つたがいよ。鐵兜の爺が實行不可能な命令を下したら立派に敬禮して、廻れ右をして、隅へ行つて五分間待つてゐるのさ。その内には見張の爺もゐなくなるだらうから實行にとりかゝるさ。サア來給へ、もうゐないやうだ。二つの部隊を取り換へんといかんぞ」

こんな爺に出會することもさうたくさんではない。大抵は腕のある丁寧な人である。

「君、そんな書類はどうでもいよ。君の名前と人数だけ聞かせてくれ、ウム／＼それでいよ。よし一二時間内に片付けてくれ給へ。温かい茶が出てあるか見て來ませう。君の列車は今夜七時十五分イヤ、フランスでは十九時十五分といふのだよ——に立ちますから、それより一時間前に停車場へ來てゐなくてはいけませんよ。案内人をつけませう。君の部隊はなか／＼立派な若者揃ひですな。長い間このブラットホームでみてゐたうちの一番立派な隊です。サア僕と一緒にこつちへ十分ばかり來給へ。一寸朝めしにかじりつきませう」

これが鐵兜のジーキルで立派な將校にして立派な紳士だ。この戦役に、澤山のジーキルがあるといふことは英國陸軍永遠の名譽だ。

ジーキル君の頭の良さを加減を話さう。主部隊は一つの道を進み、騎兵その他の部隊は他の道を取つ

た。主部隊は時間通り上陸して集合地たるこのフランスの某鐵道交叉點に運ばれた。こゝで他の部隊を載せた列車の着くのを待つてゐた。他の部隊は數時間早く英國を離れ、違つた港で乗船し、それ以來どうしたか見たことも聞いたこともなかつたが、交叉點で十分待つとチャンとやつて來た。

2 國際禮儀

フランスの鐵道で使はれる窓のない貨車に次のやうな不可解な文字が書いてある。

人 四〇

馬 八

この人四〇の中の一人となることはどんな氣のするものかと思つたこともあるが、今やつとその日が來た。

彼等が上陸すると、五十臺の貨車よりなる列車へ詰め込まれた。そして一日一夜偉大な汽罐車でフランスの陸を引いて行かれた。約六時間毎に食事した。列車は待避線へ引き入れられ R.F.O. といふ附章のついた將校が彼等を迎へて、お茶をくれたり、湯沸所を教へてくれたりした。

兵隊は二日分の糧食を持つてゐるから、大規模のピクニックのやうなものだ。

馬の貨車から、ズック製のバケツを持つた頑丈な人達が現はれた。

一時間二十哩の速度で走る汽車の中で、八頭の亂暴な手綱をゆるめた馬と一しよに密閉した室の中で一夜をすごしたり、汽罐に供給する鐵管から水を汲み出したりするのはかなり骨が折れる。

子供達が寄つて來て、「お土産」——ビスケット——をくれ〜といつた。兵隊は惜しげもなくやつた。少しでも子供からねだられると、氣前のいゝ兵隊は彼等の神聖な「非常糧食」をこれ等貪慾な子供達に喜んでドシ〜くくれてやつた。

食事がすんで停車場の見物にいつた。注目の中心は給水タンクを監視するフランス兵であつた。見よ、この歩哨は「偶然出會つた聯合軍の人達と、最も親密な交際を結ぶ機會を逸する勿れ」といふ訓示を守るに熱心なマックルウエーム卒に襲はれてゐるのを。

マックルウエームとその歩哨（同じ訓示を受けてゐるに違ひない）とはお互ひに恥しさうな微笑で近寄つた。丁度子守によつて紹介された二人の子供のやうに。

歩哨は靈感のやうに、彼の劍を新しい人形のやうに見てもらひたさうに差し出した。マックルウエームは嚴肅にお辭儀をして、その刃にさはつてみた。それから自分の劍を出した。そして二人の劍を比べてみた。——緊張した沈黙の裡に、——それからマックルウエームは襲めるやう

に、「非常に結構ですねえ」と英語でいつたが、自分ではフランス語でいつてゐるやうな心持であつた。歩哨は「あなたのも結構です」と國際的禮儀で負けないつもりで答へた。不幸にもこの協商をこれ以上鞏固にすることは、笛の音でメチャ／＼になつた。マックルウエーム等は汽車の中へ飛び込んだ。

R.T.Oは祝禱の手を振つた。

聯隊は、しんのやうに詰めこまれ、歌を唄ひながら陽氣に彼等の行くべき方へ進んだ。

3 第一線近し

こゝへ來てからもう一週間に成る。

まだ敵には會はないが、彼等はむだに時間をつぶしてはゐない。今までの教育の不備を補つてゐるのでかなり忙がしい。勿論事柄によつては習ふ要のないものもある。荒仕事と、不規則な食事には慣れてゐる。今熟練せねばならぬことは「應急處置」だけだ。一つの宿營地にゐたと思ふと、半時間そこを引上げの出來るやうに荷造りが出來るのは彼等の能率上偉大な進歩である。

この農園に進んで來る小隊を見給へ。彼等はひどく疲勞してゐるので、藁のつばいある納屋は彼

等に贅澤な褥だ。彼等はどこへでも寝ころんで、瞬間に眠つてしまふ。

一二時間後に眼をさます——いやゆる起されると、彼はつまらなさうな顔をする。彼等は體がこはばつて痛む。そして足がツキ／＼する。中には水道の口へ集まつたり、或はこの國を細かく區分する無数の溝の一つに彼等の擦りむいた足尖を入れるのもある。もつと冒險的の者は人家の入口へ行つてお神さんを捜す、(兵隊が「旦那さん」を求めて歩いたこともとうの昔になつてしまつた。この農園——否このフランスの全面積のどの農園にももう「旦那さん」はゐない。父も子も獨逸の奴等を動物界へ引き戻すため出かけてゐる。とき／＼會ふ病人や不具者を除いては、この地方へ來て以來、軍服をつけない青年や中年の男を見たことがない)

やがて、お神さんは微笑みながら、入口に現はれて來る。彼女は今では微笑むだけの餘裕が出來た。それは以前そのお客が獨逸であつた時には笑顔どころの騒ぎでなかつた。

トッシ卒はかすれた聲のフランス語で「お早う」といつた。(ヤア素敵といふところだが)そしてシャボンを手にくすつて手を突き出すと、水を盛つた洗面器を出してくれる。時としては、その水が湯であつたりする。同時に小隊切つての語學者のトッシ卒は二片を差し出して「分りましたか」といつた。彼は牛乳を一杯貰つた。これは彼より融通性の乏しい戦友が路傍の小川の青い泡のふいた水で喉を潤ほすのよりは遙かに勝つてゐる。

彼等は戦地の空気に大ぶ馴れて来た。小隊の中のある者といふだけでなく、すべてのものは寝る場所をさがし、毛布を車から下ろし、小銃と、體の手入れをして半時間で食事をすませるやうに味がついて来た。

彼等は今週になつて若干の道を進んだ。そして、別荘にも、尼寺にも、農家にも、青天井の下にも眠つた。

別荘は大いカラだ。年とつた家来だけが家を護つてゐる。「伯爵様は巴里に、御子息様はフランスにおいでになつてゐます。末の坊ちゃんも入院中です。奥さんとお嬢様は看護においでになつていらつしやいます」といつたやうに。

別荘の塵だらけの寄木細工の床の上に寝具をさらけ出した。

二人の将校は藁蒲團を床板の上へ引つぱり出し、他の二人はベッドの上に寝た。

別荘は高尚な意匠によつて建てられ、いろんな種類の家具によつて飾られてゐる。

おなじ特徴は尼寺にも應用出来る。排水溝のないことも別荘によく似てゐる。たゞ家具がないばかりだ。

天氣のいゝ時、最も贅澤なホテルは青天井の下だ。こゝではこがね蟲の翅に扇がれ、蛙の合奏になぐさめられつゝ安らかに眠ることが出来る。

ワデル少尉はある晩、敷布と毛布を青草の生えた牧場の小川のほとりへ廣げた。小説的冥想的な人にとつては詩的安息所であつた。併し、「自分の氣に入つた場所を秘密にしておくといふ譯には行かないぞ」これが大きな川鼠の意見であつた。ワデルが夕食から歸つて來ると、彼の空氣枕の上に坐つてゐる川鼠を見た。フランスの川鼠ではあつたが友達にならうといふ氣立ては少しもなく、嘲笑的な態度で、ビスケット一個を携へて逃げて行つた。

農家と來たら、「亂雜」の一語で盡きてしまふ。ある日將校十二人兵卒二百人が割り當てられた。この農園は他の佛國農園と全く同じで、ガラン洞の四角な建物——住宅と物置と、豚小舎と、厩と、ひろい肥料の堆積とが大部分を占めて、周圍に狭い通路と、中央に無數の雞と豚のための極樂境とがある。

兵卒は物置で眠つた。古參將校は石床の婦人室で眠つた。下級將校はどこでも眠つた。

難儀な一日の行軍の疲勞と藁束とが結び合つて心地よい催眠薬を作つた。

たつた一二哩のところで大砲が鳴るので家がユラユラする。あすは將校の選抜隊が第一線の塹壕訪問にと出かける。その後兵隊共の全群が正式に行くことに極まつてゐる。

「戦争」がたうとう兵隊と一しよになつた。

けさ早く飛行船が地平線上高く揚がつて、砲彈がそのあとを追撃した。やがて、飛行船は降りてし

まつた。英軍防禦線内だといふ噂だ。

今では「噂」がたゞ一つの戦時通信だ。新聞がこゝより澤山ある郷里の方が戦況がよくわかるに違ひない。

併し戦争の無残な實相は兵隊共の眼の前に犇々と迫つて來た。

この農園の外に大きな樹がある。幾月も経たぬ以前に一隊の獨逸兵が一人の負傷した英國の俘虜を連れて來て、はりつけにしたさうだ。そして彼が息を引き取るまで、そのまはりに立つて見物してゐたさうだ。

彼は死に切るのにずるぶん時間がかゝつたさうだ。

かういふ話が兵隊共の耳に入つた。今まで獨逸兵の噂を聞かなかつた者が、將來の引き合ひのために、當時の状況を根掘り葉掘りして聞いた。

4 塹壕小屋

この町は絶えず砲火を浴びてゐる。

それが毎日々々、數ヶ月もつゞいた。

時にはたつた一發だけ來た。時には五六發も來た。時には全砲兵陣地の彈が一どに町へ注がれた。

故國で生活する人々は間歇的の砲火を浴びてゐる市街の生活はどんなものか考へもつくまい。ほんたうに想像もつくまい。

遠方でドーンといふと頭の上でバーンと來る。泣き聲が聞える。女子供の——その内彼等は爆發の場所を見ようと狂氣じみて駆け廻る。

そして、砲彈の一片を拾ひ上げようと騒ぐ、時には一同に行き渡るほど十分にお土産のないことがある。

兵隊共には一刻の休息もない。あるものは恐怖ばかりだ。

道の上を歩いてゐる兵隊はときどき、かやうな彌次馬にもまれて突き飛ばされる。ついこのごろも一人の大佐が狭い路次の真中へ出來た新しい孔のまはりを跳ね廻つてゐる子供達をさけなければならなかつたため、とんだ遠廻りをしたことがある。

カフェーや居酒屋へ入ると、見知らぬ人が寄つて來て、テーブルの上へ砲彈の破片を持ち出してもしこの砲彈が破裂したところに居合はしたら殺されたらうなどと興奮してゐる。

「中らなくて幸ひでした。……併し、平和を求めて他所へ行つても平和は得られませんかよ」といつたりする。

破裂力の恐ろしい砲弾でも馴れると馬鹿にしてかゝるのは妙なものだ。

市街は塹壕のすぐ後にあるので、終日大砲が鳴つてゐる。明け方近くになると、町の人は砲弾の旋風で目をさまされる。機関銃はキャラコを裂くやうな音を立て、週期的に見舞つて来る。

砲弾が頭の上で破裂する。(近代の砲兵では、地圖とコンパスさえあれば一發のソツもなしに射撃が出来る)

獨逸兵はかう言つてゐるらしい。「けふはお天氣がいい、塹壕には仕事もなにもない。俺達には弾は山ほどある。町へ少し注ぎ込んでやらうか……」

併し、その砲弾も機関銃もさう氣にかけてゐない折に死傷者は出る。路に孔が明いたり、家の壁が抜かれたりする。

住民の大かたは寧ろ面白がつてゐる。ひどくなれば遁げ込む穴倉がある。家の欄干には一つばい土嚢を積み上げてある。

隣との地界標が急に移動するといふ可能性もある。屋敷が廣がるかも知れない。舍營地で朝飯を食つてゐた一人の將校は、オートミルの手をやめ、窓を見上げていつた。

「そりや不發彈！ ウム、こいつはいゝぞ、その調子く、ビル(獨帝ウ・リアムの略名)しつかりやれ！」

花火のやうに景氣よく破裂しても、あたらなけりやア、神經質で眞面目な獨逸兵はガツカリするだらう。

司令部から特派された一行と塹壕巡視の旅に上ほつた。

街の外れのボブラの竝木路を行くと畑の中へ曲つて行く。見渡すかぎり平坦なことは英國のチェッ

シヤ州のやうに低い畝がつゞき池もある。案内の將校は注意した。「生牆にしつかり喰つついてゐた方がいゝですよ。あの向うの畝には敵の八十門の大砲がありますから、今は霞がかつてゐるが、このあたりへは一ヤードと違はぬやうに距離が測つてあります」

一行は生牆に寄り添うてゐた。

その内、一行は粘土の切通しのねばくした廣い途の上に入りかけた。すると、そこに小綺麗な告示板が出てゐる。

「ケント舊道」

道は下り坂だ。それがため、彼等は兩側に丈夫な粘土壁のある地平線より低いところをバタ／＼歩いた。

頭上には何物も蔽はれてない。あるものは青空と雲雀が戦争に關係なく啼いてゐるだけだつた。

「交通壕です」

案内者が説明した。

彼等は落くぼんだ道を一哩近くも進んだ。

道は非常に曲つてゐる。約百ヤード毎に土囊の出鼻がある。そこは四人竝んで通れるくらゐ廣い。

森蔭を通ると林檎の花が顔の上に落ちて來た。今果樹園の中を通つてゐるのだ。秋になつたら、赤

い實がここを通る兵隊を喜ばすだらう。それまで命のあるものは何人あるだらう？

林檎は一千萬人の武装した人間の掘り返した塹壕の鶯色の土の上に實を結び收穫されてゐる。

塹壕を直角に横切る小川を過ぎた。川には厚板が渡してある。橋の名はロンドン橋と命名されて

ある。

小川に沿うた横町は「ジャックの喜び」といふ名がついてゐる、そのいはれは「蘇國山地出身兵が

膝坊主を洗ふところだから」といふことださうだ。

ピカデリー・サーカスへ來た。これは地の中の泥の洞穴で、そこから五六本の路が岐れてゐる。

これ等の道はロンドンの地理にあてはまるやうには命名してない。ヘイマーケットもあれば、ピカ

デリーもある。併し、アーチレリレーンは何となくあるまじきところにある。クライテリオン座のあ

る位置に地下洞穴があつて、その中に三人高軒でぐつすり眠つてゐる。こゝには「自轉車休憩所」と

いふ看板が出てゐる。

シャッフベリ・アヴェニューと記された道へ曲つた。(間違つてゐるかも知れぬが)トラファルガ

ー・スクエア——縦六呎、横八呎の——を過ぎて砲兵塹壕へ達した。

こゝは思ひの外廣い。地中に幅二呎の割目を作るのに一冬を費やしたといふことだ。一行はこの

廣い往還に見とれてしまった。といふのは道の兩側に玩具のやうな家までついてゐる道だから。

玩具の家は、地をめぐり取つて作つたもので、板がはりつけてある。ペンキなどを塗つて一通りの

家具も整つてゐる。

こゝはいはゞ本建築の塹壕で、六ヶ月以上もこゝに占據してゐるのである。

左の方にある感じのいゝ住宅を見給へ。

小さい入口——高さほとんど六呎に近い——がある。ガラス窓もついてゐる。カーテンをかけて

ある。

中には長さ六呎の棚ベッドがあり、水兵用に似た輕便な折疊み式洗面臺も抽斗机もある。淡綠色

に彩られた壁にはゼ・スケッチ誌、ラ・ヴィパリジアン誌からの立派な「切り抜き」で飾られてゐる。

家の外側には別荘の名が繪具で書いてある。ウェールズ語で書いたアングルジーの有名な長い驛名、

三十三綴に達してゐるので、家の前面の果てから果てまで達してゐる。小さい貼札には物賣りや、手

風琴彈きの乞食や、街頭の呼賣を断つてある。

側に立つてゐた機關銃隊の將校が説明した。

「これは私の小舎です。これはウエールズの燧發銃兵が建て、くれましたが、其後前線へ進んで行き
ました。彼は多中こゝにゐました。洗面臺まで彼一人で造りました。大工の心得あるものでせう——
私はこゝに引きつゞきゐるのではありません。六日間は塹壕勤務で、六日間は外勤です。私はミッド
ランド・マッドクラッシュ中隊と交代にやつてゐます。お入りなさい。そしてお茶でもお上りなさい」
今は午前十時だ。濃い香氣の高い茶にコンデンス・ミルクを入れたのが、すぐに運ばれて來た。こ
れと一片の菓子とに元氣づいて一行はまた巡回をつづけた。

塹壕には人が一つぼいつまつてゐるが、大抵眠つてゐる。夜は眠られないから。

彼等は低い天井の蒲鉾形の洞穴の中に横はつてゐる。丁度大きな胡瓜の内側のやうに厚板で裏付ら
れ支柱で支へてある。洞穴は本當に瓜二つの相似形だ。工兵隊で作り、そのまゝそつくり塹壕へ持つ
て來て、孔の中へ嵌め込んだのだ。

洞穴は三人づゝ入れる。兵隊は小舎の中に三疋の犬のやうに竝んで横はつてゐる。

頭は外に向けて置く。それは「起し」の役をつとめる兵隊が、すぐに手がとゞくからだ。
炊事をしてゐる者も、銃をみがいてゐる者もある。

牝猫がそれを監視してゐる。割れた壁の中にチヨコナンと神棚の上にも坐つてゐるやうに。

氣のよささうな見習伍長が説明した。「この猫はいつも胸牆の天邊に坐ります。狙撃兵が近衛兵の
熊の皮の帽子と間違へて怪我をさせました。クリスマスベル！ 將校さんに背中を見せてごらん！」

一行は猫の創痕を検査して、又次の所へ進んで行つた。

背牆を廻つて、眞直に進むと、オグ卒とホグ卒の中へ飛び込んだ。

もう、司令部からの一行と一しよになる必要がなくなつた。次の半哩の塹壕は戦友のあるところ
なのだから。

「キッチナア軍第一聯隊と、獨逸兵の奴とはたうとう面と面と突き合はせた。僕等が塹壕の中で初め
てその悪魔に魅入られたところを見てくれ」

「サアこの廣々した塹壕の小舎の入口を開けよう（バンガローの窓は盆栽で飾られてある）『ポツダ
ム・ヴィフ』といふ家の名だ。さあ、テーブルの周りに腰をかけてくれ」

ケンプ少佐は、「君の兵隊は昨夜どんな工合だつたか？」とワグスタッフ大尉に聞いた。

「別に變りありませんが、古い塹壕者が私達を舊知の聯隊のやうにいつてくれました。全く人情味が
ありすぎますよ、ハハハ」

「古い聯隊の連中が？」

「さうです。夕飯の後、古い聯隊の連中が、私達の兵隊を抱へて繩梯子へ連れて行きましたよ」
ワグスタッフは六かしい顔をして言った。

「兵隊は暗闇の中でもつと頭を働かすといひのですが……」

ポビー・リトル少尉がケンブ少佐に言った。

ケンブ少佐はこれに答へて、「自分の頭や肩を胸墻より高い見張臺に置き、いつ機關銃に見舞はれるかも知れぬと思ひつゝ、一時間つゞけさまに立つことは馴れるまでは一仕事だよ」といった。

「リトル君、君はどういふ風に兵隊に教へたかい？」

「自分で胸墻の上へ登つて一寸の間坐つてゐました。兵隊はこれで安心したやうです」

「エリイング！ 君の方では何か變つたことはなかつたね。死傷者が二人あつたといふことぢやないか？」

「ありました。四人の斥候が塹壕の前へ偵察に出ました」

「誰々が？」

「私と兵が二人と、カーフレー軍曹と……」

「カーフレー」と、ワグスタッフが笑ひながら、「あの喧嘩好きで男が。僕はあいつをバーデベルグで覚えてゐる。獨逸の塹壕で見る奴さ。君達は生きて歸れて仕合せだつたよ。それから」

「出て行つて偵察してゐると……」

「どういふ風に？」

「僕は偵察の意味が十分にわからなかつたのだが、カーフレーは、あつさり敵の塹壕へ歩いて行つて中をのぞいて來るといつたよ」

「その通りだ！」

ワグスタッフは面白がつていつた。ケンブ少佐はクス／＼笑つた。

「そこで僕等ははられた鐵條網のそばに立つて偵察法を議論してゐると、俄かに敵の大馬鹿者奴がピカッと……」

「きつと、君達を目がけて打つたんだよ」

「イヤ、ひどい目に會つた、敵が大きな奴をブツ放したよ」

「ヒョー、君達はその彈の下に立つてゐたのか？」

「そのとほり」

「君はどうしてゐた？」

「僕はカーフレーと同じやうに、すぐうつ伏しになつて、兵に伏せ！ と呶鳴つたよ」

「兵はさうしたか？」

「イヤ、兵は塹壕の中へ逃げ歸らうとしたんだ。すると、六挺の敵の小銃が直ちに彼等めがけて一齊に打つたさ」

「やられたか？」

「大したことではなかつた。弾は高いところへ飛んで行つたやうだ。プレストンは肘をやられた。バークは帽子とバンドへ一發づゝやられた。二人は塹壕へ兎のやうにころがり込み、僕とカーフレーはそのあとから匍つて歸つたよ」

その時、小舎の入口に大男が立つた。キャンプ附の曹長だつた。

「一隊の獨逸兵が塹壕から這ひ出しました。射撃しませうか？」

「オイ、君達、一寸見て来てくれ給へ、僕はこの手紙を書き上げてしまひたいから」

ワグスタッフとポビー・リトルは塹壕に沿うて進み、マキシム別荘と記した、低い孔の口へ来て、半圓形の押入れの中へ這入つた。

押入れの床は土間で、その上に機關銃が据ゑてある。押入れの天井は鐵板張りで、その上に土嚢を載せて防いでゐる。それは機關銃陣地は屢々曲射砲の的となるから。

左右両方には覗き孔があるが、前方にはない。それはこの致命的武器は斜射又は縦射に適するからだ。前面へ向つての射撃は大した效目がない。

ワグスタッフ大尉は一つの覗き孔を蔽うてゐる袋を外した。

百五十ヤード離れた所に目のよく當つた原を横切つて約二十名の鼠色の人影が敵の塹壕のすぐ前で一見羊飼のやうに見えた。

「草を刈つてゐるのかな。刈らなけりや、こちらから刈つてやらう。あの手榴弾兵にこの原を匍ひ廻らせたくない。一つ坊主に刈つてやらうか、暇潰しに。リトル、塹壕に沿うて歩け、興奮し易い人に敵をめぐけて無暗に射撃すなといつてやれ」

リトル少尉はいはれるまゝにした。平和が寝むさうに塹壕の上を覆うてゐた。夏の靜寂を破るものは狙撃銃のバチ／＼といふ音だ。けふのやうな非常の日に、彼等に戰爭してゐるのだといふことを思ひ出させるものは狙撃銃しかない。

彼は特殊な巢の中に隠れて、望遠鏡付照門に絶えず眼をつけながら、敵の塹壕の凸凹した輪廓を見張つてゐる。頭又は頭に似たものが出ると彼は射撃した。彼がなかつたら、敵も味方もシャツだけになつて、胸墻の上に腰を掛けて、お互ひに好奇心な眼で眺めてゐるだらう。ところが、この銃の眼が走つてゐるだけに、勝手な眞似は出来ない。

不意に味方の後方遙から砲聲が一つまた一つ聞えた。ワグスタッフは歎息顔にいつた。

「なぜ、敵蛇なことをするんだ。今打たなけりやならんわけがあるのか？」

「師團砲兵が射撃演習をやつてゐるのだらう」

ブレイキー大尉はかういひながら、望遠鏡をのぞいた。

「彼は獨軍の第二線塹壕の後の農園を射撃してゐる。併し、きつと獨逸の兎貴の機嫌を損じたに違ひない。僕等は午後この時間には射撃しないのだから。草刈りの連中も歸りかけたぞ。半時もするとひどい騒ぎになるぞ。みんな塹壕へ這入るやうにいつてくれ」

この警告は早すぎなかつた。五分後には怒つた獨軍が午睡を妨げられた意趣返しに、銃弾を雨霰と塹壕の上へ送つて來た。榴霰弾は頭の上でボン／＼破裂した。曲射弾は胸墻のまはりへ雨のやうに落ちて來た。一發は塹壕の中へ落ちて破裂した。(ボビー・リトル少尉は後でその砲弾の頭を發見したので彼が實戦の最初のお目見得の記念として郷里へ送つた)

こちらの塹壕からは何の應戦もしなかつた。又その必要もなかつた。この敵の砲撃は何等大規模の攻撃の前兆ではなかつた。これは神經過敏な英國人をおぢけさせようといふ威嚇の表現にすぎなかつた。

こちらでは塹壕へ喰ひついて、臍茶をわかしてゐた。たゞ見張りの者だけが、潛望鏡とのぞき孔の後に坐つて、その場所を守つてゐただけであつた。

風は毒瓦斯に都合の悪いやうに吹いてゐる。この塹壕へは飛んで來ないが、マスクをかけた。A中

隊のヒヨウキン者マックリア卒は瓦斯マスクをかけながら茶を飲む眞似をした。

彼は、砲弾にも、毒瓦斯にもあまり驚かない漫然居士だ。

砲撃は突然止んだ。そしてもとの靜寂に還つたが、たゞ塹壕白砲——半時騒がしい樂隊を奏してゐた——が、獨りぼつちポトン／＼と打つてよこすだけであつた。

ポツダム・ヴァイフ(塹壕小屋の名)から現はれて來たブレイキー大尉は陽氣にいつた。

「あれはあれだけのものだ。獨軍の奴等は罪のない子供だ。ねむいのを起すとやかましい。サア家へ歸らう、三十分もすりや暗くなるよ。小隊長、兵隊に支度しろといへ！」

この時、彼等は六日間働きづめてゐたのではない。彼等はたゞ彼等より年長の古い戦友の付き添ひで、二十四時間教育の腕をためしに來ただけである。

ボビー・リトルは必要な命令を軍曹に與へてから、トラファルガー・スクエアへ進んだ。そこで彼の小隊の勢揃ひを待つのである。

擔架をかついだ二人を連れてゐる伍長が通つて行つた。擔架の上には敷布で覆はれたものが横はつてゐる。その一端には一足の軍用靴が眞直に突き出してゐた。

ボビー・リトルは息を殺した。死人に會ふのはこれがはじめてである。

「誰だ」

彼はオド／＼して聞いた。

伍長は敬禮しながらいつた。

「少尉殿、マックリア卒です。塹壕臼砲の最後の一發でやられました。横の方からやつて来ました。

マックリアは小屋の一番端に茶をのみながら坐つて居りました。擔架進め！」

行列は動いた。シャツフッベリ・アヴェニウの角で見えなくなつた。

かうした非番の日は終つた。

5 夜より朝へ

塹壕の第一回訪問の經驗に基いて、彼等の頭に各種の方法を考へながら、フランスの田舎の宿營地を棄て、まつしぐらに戦争の渦中に投ずるため旅裝嚴しく出發したのは先週のことであつた。

出征三週間で二つのことを覺えた。一つは瞬間的に落着くこと、身周りのものを極小の携帶品にまとめてしまふこと。

兵卒の身まはり品は悉くお上から給與される。軍裝品には銃と劍と百二十發の彈丸がある。體の脇に三合入の水筒を吊し、他の脇に鐘詰やビスケットを入れた雜囊をつるしてゐる。その食糧は將校

の命令がない限りはどんなことがあつても封を切つてはならぬ非常用の食糧である。そのそばに煙草の道具や、神祕不思議の旨いものを入れて置く。

背中には背負袋を背負ひ、中に外套、防水布、親らしく政府が渡した着物の着換へを入れて置く。またその中に手拭や針箱や刃物を入れる（とき／＼靴下の中へスプーンを入れる）胸のかくしには瓦斯マスクを入れる。これは東風と獨逸の毒瓦斯隊と二重の不幸が襲うて來た時かけるのである。また瓦斯マスクを浸す液體を一瓶携帶してゐる。上着の裾へは野外繃帶を縫ひつけて置く。

彼のうしろには塹壕掘りの道具がぶら下がつてゐる。

體の内側で明いてゐるところへは、「軍人らしくないもの」の外は何でも好きなものをつけていゝ。小さいフランスの國旗を縫ひつけるもよい。これは勇敢な聯合國に對する尊敬の表徴だが、スコットランドが昔フランスと聯盟してイングランドを苦しめた時のやうだからこれは一寸工合が悪い。

體へこれだけのものをつけてしまふと、重いには重いが不自由なものではない。行李に積んである毛布をのぞいては、彼は彼自身の工廠であり、筆筒であり、食料室であるから。

將校となると、何をつけていゝのか全く當惑する。彼は女性の犠牲にならなければならぬ。その女性には「出征軍人用」といふマークをつけて（爪みがき一式といったものでも賣れない品を處分する山師商人の犠牲になる）女性からいろ／＼なものを送つてくれるのには全く閉口する。すてるわけにも

行かず。

出征軍人用ズボンの皺のばし、といふのを見たか。

四月の終りにポビー・リトルが敵を粉砕することを早める目的で集めたものは左の通りである。

モーゼル自動ピストル弾丸二千發、

標準軍用ピストル、

ズックの輕便ベッド、

ズック製の輕便テーブル、

ズックの腰掛、

空氣蒲團（これは口で吹いて膨らす、リトルはその日の大部分、貴い息を膨らすために使

つた。肺が破れるのを恐れて、自轉車用のポンプを使つたら、蒲團の底が抜けて終つた）

枕、

携帶風呂、

携帶洗面器、

化粧品、

上等ストープ、

書類箱、

出征軍人用キプリング詩集（四十卷）

無數の靴下と、シャツ、

石鹼一箱、

マツチ箱五十、

藥品小筐、

一函のパイプと、無數の紙卷煙草（リトルの叔母さんは、葉巻は出征軍人には禁慾の趣旨にそぐはぬと思つた。その上たたくさんのむと病氣になると）

チョコレート一尺立方（各種取り交ぜ）

無數の壓搾食物及コンデンス飲料、

出征軍人用炊事器、

電燈及そのとりかへ、

雙眼鏡と望遠鏡、

菱形羅針盤、

サイフォン、
ラヂウム時計、
針金切り、

これ等の夥しい蒐集品を見せられたワグスタッフ大尉は「忘れものかも一つあるよ」といった。

「何ですか？」

「即賣店をさ」

「ハハハ、全くですね」

「將校は身につけた外にどれだけ手荷物を持ってい、かい？」

「三十五英斤です」

「さうだ」

「三十五英斤ならかなり多いでせう」

「さうたくさんでないと思ふがね」

「一英斤くらゐのところは何ともいはないでせう」

ワグスタッフは兵隊の群がる小屋をぐるつと指しながらいった。

「僕等が出懸けてしまふとこの軍事博物館を入れたカバンは主計に渡される。主計は杓子定規な男で、何でも規則を文字通りに解釋する癖がある。もしこのよろづ取り揃へた半噸もあるカバンを三十五英斤の手荷物として認めてくれと頼むと、忽ちおつぱり出してしまはれるぞ」

ワグスタッフは又話しつづけた。

「僕は司令長官よりも主計の下にゐた方がい、と思ふことがあるよ。君、こんなものは残らず、うちへ送りかへし給へ。これは平時の演習には使ふことが出来るが……僕が車の心棒を折らない程度に積載品の表を作つてやらう」

ポビー・リトルはワグスタッフのいふことを書き取るために几帳面に手帳を出した。

「君はときどき、體を拭きたいだらう。ズツクのバケツと石炭酸石鹼とうんと大きなタオルを持つて行け。齒磨粉と楊子と、それから、君は鬚を剃るか？」

「一週に二度くらゐ」

リトルははにかんで答へた。

「結構なことだ。では安全剃刀を持つて行け、それで綺麗に剃れるよ。それから着物だが、着換へを一つだけ、靴下は澤山に、三枚のシャツは外套へ巻き込め、靴は二足に、それから睡眠の時は三枚の毛布の下へカバンを置き、君は君の同床者共焼バンのやうに温かくなる。手提のカバンと別になる時

もあらうから、敷布だけは背負袋の中へ入れ給へ。さうすればどこでも一瞬間の豫告で、食事と睡眠も出来る。旨いもの、考へなら、「兵隊さんの料理人」といふ本を持つて行くさ。その外のは水筒以外勝手道具は一さい見合すこと。朝めしぬきの時は、彈囊の中へ肉入菓子とチョコレートを入れ給へ、腹が減つては戦は出来んからねえ」

「ピストルはどうしませうか？」

リトルは小工廠を見せながら、少しく興奮していつた。

「もし獨逸兵がそのモーゼル・ピストルを取つたら、君を打つてしまふ。ウエブレイ・ピストルがい、だらう。いつでも軍用彈藥が使へるから。煙草は？　パイプと煙草入れを持つて行き給へ。刻煙草と紙巻はあちらで喫ふだけのものは手に入る。懐中電燈を持つて行け、勿論雙眼鏡も地圖入れも、針金切りも、手紙は通信紙を使ひ、君の磁石は大丈夫かい。一足のズック靴は樂だよ、空氣枕、蠟燭、ワセリン一罐、絲一卷、それで間に合ふだらう。もしまだ一英斤残つてゐたら、一二冊の書物を持つて行くさ」

ボビー・リトルはワグスタッフのいふとほりにした。文句屋の主計はリトルがカバンを出した時、ニヤ／＼笑つて、一通してやらう」といつた顔をした。同役の將校は荷物を調べ直すことを嚴重に申渡され、必要品と贅澤品とを狂氣じみて選りわけなければならなかつた。

兵隊共がみなそれ／＼の支度をして、先週塹壕へ向つて行つた時には立派な天竺浪人になりすましてゐた。二三日前彼等は英軍司令官サー・ジョージ・フレンチの檢閲を受けた。

6 哲學少尉

彼等の行軍はアルメン・チエレへ向けて行はれた。そこは間過的に砲撃されてゐる。彼等は夜行軍で朝飯時そこに着いた。その日の晩、二中隊と機關銃の一分隊とが鶴嘴とシャベルを持つて整列を命ぜられた。一時間後に彼等は塹壕直後の一寸さきも見えぬ道を進みつゝあつた。

大砲は沈黙してゐたが、狙撃砲は敵味方兩方から打つてゐた。獨軍の探照燈は大空を梳ぐるやうに光りを投げてゐる。光彈が連續に大地を照した。

「大尉殿！ 私達は今夜どうすることになつてゐますか？」

ボビー・リトルは、モーゼル彈がしきりに頭の上を飛ぶので頭をすくめたいのを雄々しく我慢しながらブレイキー大尉にたづねた。

「僕等はこの塹壕の後へ角面堡を掘ることになつてゐる。僕はこの邊で工兵將校に出會ふ豫定だ。そして彼が僕等に最惡な方法を教へてくれるだらう。随分こゝは敵に近い角面堡だ。兵卒は道の片側に

身をよせて出来るだけかぐんで歩くやうにいつてくれ。オーそこに我が冒険家がある。今晚は！」
冒険家それは工兵隊の少尉で闇の中からヌツと現はれた。
彼は口から巻煙草を外して丁寧に敬禮した。

彼はブレイキーに言つた。

「大尉殿！ 今晚は！ どうぞ、こちらへ私が掘る所を白いテープで印をつけておきました。ですから、掘るのに六かしくありません。機關銃隊の將校をお連れになりましたか？」

機關銃將校エイリングが呼び出された。

工兵少尉は、その將校に説明した。

「銃座を入れる四角な臺場を掘るつもりです。四挺の機關銃を載せたいのです。私は機關銃のことはよく知りませんが……私と一しよに歩いたらあなたは、銃座の選定が出来ませう」

「承知しました」

「それでは歩兵の方から先きに働いてもらひませう、どうぞこちらへ」

路は林の中の四角な空地へ下りた。「この林は大體角面堡の輪廓に沿うて居ます」と工兵少尉はいつた。

「塹壕はもう半分出来てゐます。昨夜はシーフォース隊から一部に働いてもらひました。あなたの部

下は彼等がやめたところからつゞけて貰ひたいのです。主に土嚢を胸牆の上へ置くのです」

工兵少尉は森の中のボンヤリした堆積を指していつた。

「あすこに五萬袋あります。要らない時はそのまゝにして置いて下さい」

ブレイキーがたづねた。

「土嚢へ入れる土はどこから持つて来るのか、塹壕からか、角面堡の中からか……」

「どこからでも結構です。たゞ兵隊に餘り深く掘りすぎないやうに注意して下さい」

暗い中でかうした話をして、工兵少尉はエイリングを連れて銃座の位置検分に行つた。

「先づ道路に沿うて御案内ませう。それから角面堡の隅から原の中へ這入ります。すると外側からあたりの地形を見ることが出来ます」

エイリングは禮をいひ、高い所へ歩いて行つた。

小銃弾が彼の足許に落ちた。

「死傷者は少ないやうです。獨軍の狙撃兵は終夜ポツ／＼撃つて居ますが中ることは滅多に有りません。敵はこの方面で機關銃を盛んに打ちますが、大抵一晚隔きです。几帳面な奴です」

工兵少尉がしゃべりつゞけた。

「ゆうべ打ちましたか？」

「いゝ、え今晩打つ晩です。あなたは銃座の位置を見ましたか？」
「見ました」

「では、次の角へ出ませう。そこは立派に打てると思ひます」

「さうですか？」

第二の地點も檢分された。餘興に光弾が頭の眞上で破裂した。

「一寸の間、寝てゐた方がいゝやうですね」

工兵少尉がいつた。

エイリングもさう思つてゐた時だったので、地面へ板のやうに喰つゝいた。

「夜の水晶宮のやうですねえ」

工兵少尉は白い光があたりにイルミネーションのやうに輝いた時からいつて賞めちぎつた。

「こんどはあなたの位置がハッキリ分りませう。この方面から側射が出来ます。もし塹壕が襲撃された時は縦射が出来ます」

「わかりました」

エイリングはかういひながら、銃座の位置を測つた。彼は自分に關係ある銃座を選ぶことを楽しむやうになつた。

九ヶ月間のくだらない生活から見れば一大變化だ。敵を前にして自分の陣地を選定するといふ心持はいひ知れぬ興味と感激が湧いた。

獨軍の光弾が燃え切つてしまつた時に彼等は道路を横切つて角面堡の後へ出た。そして二つの銃座を標識した。こんどは比較的安全に。

「こゝは何か缺點がありませんか？」とエイリングは第二の地點を測りながら言つた。

「射撃があゝ森の側の家で邪魔になります」

工兵少尉は小さい手帳をとり出した。そして光弾の餘光でこの中へ書きつゞけながら。

「よろしい明晩までにあの家をすつかり片づけてしまひませう。何か外に御註文がありますか？」
エイリングは自分の腕を現はす時が來たとそれを興がるやうになつた。

實戰的機關銃戰であつても、演習では個人の財産を傷けないことに極力苦心して來たが、破壊本能を十分満足せしめ得る現在と交つたことは贅澤なことだといへる。

「有難う、あの乾草の山も平らにして下さい」

彼等が戻つた時、ほかの人達は忙がしく仕事をやつてゐた。プレーキー大尉は角面堡の中に立つて指圖してゐた。

工兵少尉が彼のそばに坐つた時、大尉は澁い顔をしていつた。

「こゝは、大分死體をひつかき廻してゐはしないかと思ふよ。見給へ、小さい木の十字架が一ぱいにあるから」

「そりや獨逸兵ですよ」

アッサリ工兵少尉がいつた。

「君はこゝに何時からゐたのですか？」

「十月から」

「さう」

「十字架の下に死體があるとは極りませんよ。掘つてみて下さい。毛布にとゞくまで掘つて下さい。大抵一枚の毛布に二三人づゝ包んであります。そしてたやすく土で蔽うて下さい。そしてどこかほかの場所を掘つて下さい」

「永くこゝに居られましたか？」

路の向うからやつて来たポビー・リトルが聲をかけた。

「かなり暫くだ。併し引きつゞきみなこゝに勤務するのぢやない。僕等は二人で一組になつてゐても、一人の方は明日やるんだ」

大尉はかういひながら、立つて時計を見た。

「大尉殿、あなたは一時半までにこゝをお立ちにならないけません。その後は少し明るくなりますから。獨逸兵の奴が、彼の時計表ではキチット二時十五分に向うの十字路へ三發打ち落しますからね」

「御忠告有難う。今十一時半です。オイ、ポビー・リトル！ エイリングの奴はどんなふうか見に行かう」

来る時間も、来る時間も全く無言の仕事がつづいた。

話は出来なかつたが、長い時間の間には喫煙も許された。

週期的に頭上で光弾が破裂すると、働いてゐる者は、胸墻の後に沈むが、そのひまがなければヂツと木のやうに立つてゐる。そして狙撃兵の狙ひを外してやる。

かういふ時やつてならぬことは動くことだ。動いたら、スバツとやられてしまふ。

獨軍の狙撃が立派な技術を持つてゐるに拘らず、誰も打たれなかつたのは不思議なことだ。

光弾の光りが人の眼をくらすのか、それとも次の噂が本當であるのかも知れぬ。それは戦線のこの部分を守備するサキソン人は彼等に好意を持つてゐるので、トマス・アトキンス（英兵）の頭の上をかすめるやうに打つてくれるのかも知れぬ。

一時十五分に低い命令が塹壕へ行き渡つた。兵卒は開墾地の避難側へ集合した。鶴嘴やシャベルの

手をやめて、小銃を取り上げた。

部隊は音も立てずに十字路へコソくと去つた。

二時十五分のしるしに三發の砲彈が飛んで來た。

砲彈を送つてよこすとやがて、チウトン人らしく時間を嚴守して、宿舎や臥床へと向つて行つた。

曉は彼等の背後から明け、雲雀は頭上で唄ひ始め、獨軍墳墓の鼻についた臭ひは朝露で彼等の肺

から吐き出されてしまつた。

あの哲學者工兵少尉は紙巻煙草をくはへて坐り込み、交代の相手を待つてゐる。

7 爆彈長官

開戦後の一二ヶ月間は全く混亂状態であつた。

白耳義もこの佛蘭西も一つの大きなごみ箱のやうにメチャクチャな戦場で、敵味方さへ入り亂れて

あつた。恰も土曜日午後の公園のある場所のやうに亂調子のフットボールをやるやうなもので、敵も味方もゴツタ返して、ゴールの方角さへ不正確であつた。

ある村へ乗り込むところは蘇國山地の聯隊と、獨軍の騎兵とが占領してゐたり、夜の明け方肩を並

べて歩いてゐる軍隊をボンヤリ見ると、それが獨逸兵であつたりすることもある。

近寄ると急に塹壕を掘り出すから、獨軍かと思つて見ると、それは我旅團の一部であつたりする。前軍も

後軍もない。方角などは問題でない。前方部隊があまり進みすぎたか、又は後方部隊が退却しすぎたか中間に残された部隊がゴチャ／＼になつてゐた。散ばらになつた部隊は本隊に合しようとしてゐるし、傳騎は逍遙的師團司令部を搜索してゐる。狙撃兵は敵味方不公平なく打つ。まるでメチャクチャであつた。

塹壕戦に移ると、キッチンと兩軍を岐けてしまつた。塹壕は今や北海からフォスゲス山脈まで走り、長い不規則な、併し几帳面な地割れ線を作つてゐる。そして一人残らず周到に區分されてゐる。こちら側は人間で向う側は獨逸人だ。(動物園のやうだとワグスタッフ大尉がいつた) 何もものもこれ以上キッチンとしたものはない。「おまいそちら、わしやこちら、寄るによられぬ仲ぢやもの一だ。

その結果は戦争と平和の混線だ。今週は僕等の大隊が砲撃線の一帯に所から二三哩遠ざかつたので、休養といふほどでもないが、第一線の仕事を休んでゐた。(先週はかなり苦しいことをやりつづけた) 朝は着物を洗つたり、二三のやさしい教練をやつたり、午後はふだん服を着て果樹園で晝寢をしたたり、夕方はフットボールをやつたり、運河で水泳をやつたり、草の上に仰向きになつて、獨軍の榴霰彈に追ひかけられて時へ翅をならして歸る味方の飛行機を數へたりした。

去年の秋にはこんなノンキなことは出来なかつた。今は塹壕戦の有難さ、一二哩離れたただけでア
ーガイルシアアの荒原や、ウエスト・ケンシントン同様の安全さだ。

併し、何事にもいゝことばかりはない。事實塹壕は人間の工夫したものの中で一番面白くないもの
のだ。住居としても満足出来ない、最も贅を盡した塹壕小屋でも、その最も藝術的な窓でも、これ等
はみな偏見的獨斷的なナイト・ブリッヂ（ロンドンのハイドパークの南の町の名）の貸住宅に比べて
も劣つてゐる。

敵の攻撃よりかなり免疫な所に身を置くといふ觀念は、敵も亦こちらの襲撃から平等に免疫だとい
ふことによつて割引されてしまふ。言語をかへていへば塹壕では「何の前進もない」といふことだ。
そして戦場で「早く片付けてしまひたい」といふ願望はこの戦争を早く光榮ある終局にして、郷里へ
歸つて、温かい風呂と規則正しい食事でありつきたいといふことだ。

ところで、二三日前、塹壕生活を斷然止めにして、本氣に前面の動物をダイ／＼押し潰してしまふ
といふ正式命令を聞かされてビックリした。

この決心は數ヶ月前になされた。たゞ實行が困難であつた。敵は多數にて味方は少數だつた。獨逸
では惡魔の鍛冶場は晝夜となく吼えてゐる。然るに大英國では勞働組合の役人が組合服をぬいで軍服
に着かへる前に、愛國心と役人個人としての面目の調節に努力してゐた。だから何でも英軍の進歩は

遅々としてゐた。マルヌ河よりエーヌ河へ追ひまくられて以來（故國の人が立ち遅れた時のうめ合せ
をしてゐる間に）持ちこたへ持ちこたへてゐる軍隊の責任を問ふのは間違つてゐる。その責はひとり
軍隊の負ふべきものでない。

いつかは戦争に勝つ、そして大部分の名譽は最終回の試合に勝つた人々のものだ。併し、名譽の審
判者は、緒戦に堂々として戦つた人々の名を忘れてはならぬ。

今日英佛海峡を渡つて行つた新しい軍隊がキット最後の勝利を得るに違ひない。その時に戦の初
め絶對の滅亡より救つた軍隊——十人に一人残るか残らぬ戦をした不撓不屈の軍隊の靈に對し極度
の敬意を表さなければならぬ。

今この正面を突破しても——突破出来ることは疑ひないが——その位置を保持することが困難だ。
なぜかなら、村落内の戦鬪を起すからだ。——こゝはケムブリッチシアアのやうに眞平らで、一坪ご
とに耕作されてゐる。そして農家が點在してゐる。十字路ごとに一群の百姓家やカフェーがある。英
軍の大侵略線が前進すると、これ等の建物は敵の據點となり、一軒のこらず占領されて、逆襲の踏臺
となるだらう。

英軍の攻撃は如何にして行はれたか。

軍事上の秘密でない時も今に來るが、今は口外出来ない。その謎はたゞ爆彈によつて解決される。

爆弾は攻撃の最後の喊聲である。小銃や剣は弓矢のやうなものだ。最新式のリーエン・フィールド銃、モーゼル銃は今まで發明された内で一番貴重な攻撃武器としてい、併し、これ等は相對する兩軍が適當な距離を隔て、直線に置かれた時の本格的紳士戦争に用ひられる。今日の戦争と名づくる人殺し術では小銃は早くも流行遅れとなりつゝある。長距離には機關銃を必要とし、短距離には爆弾と手榴弾を使う。入口へ小銃一發食はせただけで、農家を空にすることが出来るが、——劍で一突きやつただけで防禦された室にある二十名の獨逸兵を塵殺することも出来るが、——ダイナマイトと鐵屑とをジャム鏝へつめたもので以上の二つを一度に成し遂げられる。

そこで爆弾が必要なのだ。これと共に戦術上にも、編制上にも、大變化を齎した。

小隊教練が下手だから爆弾投げに廻されたといふ時代もあつたが、爆弾投げの輕視された時から見ると、急に眼のさめるやうな重要な位置へ祭り上げてしまつた。大根役者から一躍してスターになつた。彼は一人の成金——機關銃將校と優劣を争ふやうになつた。今では一爆弾手も聯隊長と腹心の友であり、旅團長とも交際が出来るやうになつた。

一爆弾手も鼻をうごめかして、一發の爆弾で大戦争の楔を打つもののやうな顔をしてゐる。併し彼の話といふと、やれ爆管だの、雷管だの、信管だのと殺風景なことばかりだ。彼を「無政府主義者」とからかひながら、兵隊共は彼の周りに集つて、彼の陰慘な講話を傾聽する。それは、將來は各人一

二個の爆弾を持つことになる筈だから。

この恐ろしい爆弾が自分のかくいに入れてゐる内に破裂しないやうにするには爆弾將校の機嫌を取るといふ屈辱的態度を取つても、その構造について詳細な知識を得て置くことが必要になつた。

爆弾の秘傳について知り得たところといふと、英國の兵隊共獨逸兵のために用意されてゐるものには四種あるらしい。

- 1 頭髮ブラシ型
- 2 クリケット球型
- 3 巡查の木刀型
- 4 ジャム鏝型

頭髮ブラシ型は頭をかくブラシと違ふところは、毛の代りに高速度爆發性の火薬が裝填してある。巡查の木刀型は、その尻つぼにテーブの賑やかな房がついてゐて、鼻の方が先に落ちることになつてゐる。

これ等の爆弾は衝突によつて爆發するものだから、投げる時には何物にも當つてはならぬ。たとへ

ば塹壕の後壁などに。

クリケット球型は、信管によつて時間爆発をやるもので、取扱方は至つて簡單である。ピンを抜いてバネをゆるめる。すると信管内の點火薬に發火し、五分間以内に爆発する。右手に爆弾を持ち、ピンを外して氣狂ひのやうに投げる。

ジャム罐型は、スポーツマンに氣に入りさうな恰好で、點火して十秒位で爆発するやうに仕掛けてある。

この二つの爆弾はあまり早く投げると、破裂しない一瞬間前に敵に投げかへされる恐れがある。長く持ちすぎては自分で自分を爆発することになる。信管の目もりは非常に細かく、微妙な時間に破裂するやうに仕掛けてある。

爆弾の出現によつて戦争機關の上にも多大の革命を來した。聯隊や中隊の編制に及ぼす影響についても莫大なものである。

ケンプ少佐のいふことを聞き給へ。

「僕は一二ヶ月前、二百五十名のよく訓練された軍人から成る中隊長であつた。今でも名義上はその中隊長なんだが、彼等は通信手だの、機關銃手だのといふ専門家の集まりになつてしまつた。若し僕が一將校にある仕事を命令すると、彼は私は爆彈専門家だとか、土囊教授だとか、裝甲拳闘家だとか、

か、手榴彈長官だとかいつて、小隊などといふちつぽけなものを相手にしないといふ風だ。兵卒でもニヤ／＼笑つて中隊の仕事なんかいやだといふやうな顔をしてゐる。いづれも専門家なので凡ての作業や中隊の勤務をやめてしまつた。エイリングは僕の一番い、部下十五名を引き抜いて、いやな機關銃手にしてしまつた。今は中隊も一種雑多な藝術家協會に退化してしまつた。僕が中隊一同に面會する唯一の機會は月給日だけなんだ」

8 戦線の戦線

靜かな命令が何の騒ぎもなく發表された。彼等は現在の宿營地を引き上げて明朝五時に出發する命令に接した。

たうとう總攻撃の時が來たのか。

二晝夜といふものは雷のやうな大砲の音を聞いてゐたがまだ攻撃の案内状は來ない。ポビー・リトルがじれつたさうにしてゐるのを見てブレーキー大尉がかういつた。

「まだ時間は澤山ある。我軍が敵の一部を分離するため、砲兵で四十八時間たゝきつけ、そして砲撃中止と共に、第一線が獨軍の塹壕へ突撃する。そして敵の第二線、第三線へ突入する。そして出来る

なら、彼等を捕虜にする。つまり歩兵は砲兵が作った穴から突撃して突撃に突撃、獨軍を蹴ちらし、踏みちらし、追撃又追撃遂に行くところまで行く」

今晚か明日命令が出れば都合よく状況が進展してゐるのだ。若しなれば、砲撃失敗なのだ。多分うまく行くだらうが、併しその取つた地點を保持することが不可能かも知れない。そして若者が逆襲によつてむざ／＼と虐殺されるかも知れない。

翌朝になつた。

彼等がもう出る用はなくなつたといふ知らせがあつた。

友軍方面の攻撃は豫定通りに行はれ、豫期以上の成功を収めたらしい。

獨軍の戦線は突破され、その間隙から四個師團が突入し、第二防禦線を奪ひ第三線を取り、敵の背後深く侵入したといふ通報もあつた。

その時、前面と側面とから敵の砲兵と機關銃が砲火を浴びせかけた。こちらは甚しく暴露されてゐた。「分離」射撃は十分に效を奏しなかつたと見える。

味方の災禍を破滅より救ひ、味方の計畫を失敗より救ひ得べき唯一の手段は砲撃と砲撃の外に道はない。

優勢な砲撃は敵の榴霰弾や、小銃弾の旋風を沈黙させ得たらう。そして我が陣地はビクともしな

つたらう。

併し、大砲は希望するとほり豊富でなかつた。

彼等は開戦してまだ十ヶ月ほか経たないが、故國の人々も形勢の必ずしも有利でないのに目を瞠つてゐる。出征地のこゝで彼等は軍需品を供給する系統を立てるに時間のかゝることを知つてゐる。總動員に當つて、平和論者の感情も害せず、また一日の休日や一杯のビールをも廢せず、又同じ産業殿堂に屬しない甲と乙の人達を一しよに並べて働かしても、正直な労働者を怒らせないやうに、且つ、如何なる政治家の議會に於ける地位を危くしないやうになれば、その内うまく大砲や軍需品が供給されるやうにならう。

二三日前、彼等は一つの塹壕を擔當した。

獨軍はこゝより僅か二百ヤード離れてゐるばかりだ。戦線の戦線にゐるわけだ。

キツチナアはこの戦争は三ヶ月か三年かといつたが、今はいつ果てるともわからぬ塹壕戦になげ入れられたことを知つてゐる。

彼等の塹壕戦は梯子の一番下からのぼり始めたやうなものだ。

塹壕の位置もわるい。造り方も成つてない。

脂ぎつた大きな青蠅がうよくゐる。蠅は暗い間——それも短い時間——塹壕小屋の天井にとまる

が、二十四時間の内二十時間は忙がしく飛び廻る。

こゝかしこに散在する死體——あたりに黒山のやうにゐる——と糧食とを覗つてやつて来る、五分間デッと坐つてゐると針差しの針のやうにたかつて来る。顔や手や膝が我慢出来なくなつて痙攣が起ると蠅は怒號しながら立ち上がるか、またすぐ、その犠牲者が靜かになるとやつて来る。砲彈の爆發でもあれば却つて人助けだ。

塹壕はアルメンチーンの塹壕のやうに田園都市ではない。

二週間も経たぬ前、爆彈と劍の力で獨兵から奪ひかへした佛國領土二百ヤードを確保するため、夜間俄かに掘つたのである（占領した塹壕は今や彼等の後方になつて彼等の第二線として役立つてゐる）塹壕は泥深く——三尺も足が沈む所がある——そして一側は凹んでゐるので縦射され易い。胸墻の數ヶ所は低過ぎるが、土嚢を高く積み上げたら敵に目標を與へるやうなものだ。塹壕を深くすると、水がたまつて川のやうになる。

脚の長い將校は背低くのリトルを羨みながら、四つん匍ひになつて、恐ろしい場所を苦しうに匍つて歩く。

それから敵のザッケイアス（セント・ヨハネの父——超人）がある。高い樹の上に棲んでゐるからかう呼んでゐる。百五十ヤード離れて戦線に並行して立つてゐる枝を刈り込んだ柳の樹の竝木があ

る。この樹の上にザッケイアスが棲んでゐる。

彼の姿を見たものはないが、たしかに凄んでゐる。

胸墻から頭を出して見たら、ボタンと彈が頭を貫通するから覗かれはしないが、たしかにゐることには間違ひない。

どの樹にゐるかわからぬ。

柳の樹は九株ある。毎朝機關銃で梳るのだが効果が無い。ザッケイアスは樹の後の玉蜀黍の畑の中へ匍ひ込んで、こちらの射撃の終るのを待つてゐる。

終ると樹へ戻つて来て、機關銃將校を射止めようと試みる。

まだその手にはかゝらぬが、ザッケイアスは頑強にかじりついてゐる。彼は復讐心に燃え、忍耐力に強い。

ウンテル・デル・リンデンといふのがある。この有名な大通りは舊い交通壕である。この壕は半ば壊れて、彼等の後にある舊獨軍の塹壕から彼等の今の塹壕を眞直に貫通して、現在の獨軍の塹壕に通じてゐる。

英佛海峡のトンネルと同様子供たましたものだが、兩端には敵味方が猜疑心をもやしなから、他端からの敵の計畫を偵知しようと努めてゐる。

敵味方の砲兵も應分の寄附をする。獨軍の塹壕遙か後方で、不愉快な唸りが聞えると、やがて頭上でキューキューとうなる。それから一哩も後方で大地を揺がす轟々たる響が聞える。振りかへると薄れ行く夕靄の光の中に夕日を背景にして、満々たる緑葉の大樹の影法師がくつきり浮き出す。その内にその姿はどこかへ漂ひ去る。

「黒煙彈が落ちました」とトッシ卒がいつた。

直ちに我砲兵が應戦した。そして塹壕兵共は砲兵の決闘を小さくなつて見物してゐる。敵の砲兵が我砲兵陣地の搜索に疲れて、塹壕の搜索にとりかゝると、塹壕では砲兵の見物どころでなく、小屋の中へ引つ込み彈の來ないやうに祈つてゐる。

しかし、敵の大砲はある一定の時間によらず、氣まぐれな世話やき婆さんのやうに思ひつき放題にやる。

英軍塹壕の兵隊達の主な興味の中心は、柳の樹の上のザッケイアスやウンテル・デル・リンデンである。

二三日前未明これ等の塹壕を占領した。普通の場合交代部隊は射線の後方半哩の豫備塹壕まで夜陰を利用して後退する、それから所命の地點へ歸つて行くのだが、併し、獨軍の砲兵が後方の舍營地へ黒煙彈を撒くから彼等の新しい住宅へは恐るゝ比較的安んずる路を通つて行き、地下道も取つて行

かねばならなかつた。

二時間以上もやつと一人の武裝兵が通れるくらゐな塹壕を通つて行つた。時には狙撃兵の射撃を避けるため腰を二重に折つたり、時にはねばくした泥の中を膝まで没して歩いたりした。

銃と七千發の彈丸の責任を持つてゐる機關銃隊長エイリングは汗のポッポッと出る額を拭き、その案内者に、「まだどのくらゐ行かねばならぬか」と聞いた。

「約二哩です」

若者は氣の毒さうに答へた。

案内に立つた若者はロンドン兒である。

彼はその態度から察して、安全な迂路で時間を浪費するよりも、眞直に目的地へ通ずる道——をたとひ彈が降らうと——を案内して行きたいのが山々であつた。

二哩と聞いて、重さ四十八英斤の機關銃の三脚臺を擔いでゐたエイリングの一番兵は悲しさうな聲を出して呻いた。

「私が行きたいと思ふ道を行つたらいいですのに」

案内者は自分の言葉が聽手に及ぼす効果について得意になつていつた。

「今ごろはもう向うへ着いてゐたのですのに……」

「もし貴様のいふ道を行つたら（エイリングは荒々しく若者の言葉を遮つて）今ごろはあの世へ行つたらう、オイ急げ！」

エイリングは不機嫌にあたりにある兵と同じやうに案内者のいふことが癪にさはつた。

ロンドン兒は非常に氣を悪くした風で、ブリ／＼しながら歩いた。そして陰氣な行列がつゞいた。十分も進むと何條かの道の出會點へブツつかつた。

「少尉殿！こゝが豫備塹壕の初まりです。私が行つたらと思ふ道を行つたら、樂に行けますのに」
「黙つて行け」

エイリングが叫んだ。汗ばんだ兵卒たちも半ば威嚇的につぶやいた。

案内者は彼の領分に來たので、最も泥深い所を選んで、そこへ飛び込んだ。二百ヤードくらゐは田舎の従弟に都見物をさすやうな態度で、澄まし込んで進んで行つた。

クネ／＼と曲つて行つた。一二度どちらへ行つていゝかわからぬやうに立ち止まつたりした。かなり歩いたのち、彼はビタと止まつた。そして塹壕から上へ登り始めた。

「何をやるのだ？」
エイリングが不審さうにたづねた。

「こゝで平地を横切らなくちや行けません。塹壕はこゝでおしまひですから、出来るだけ體をひくく

して下さい」

諦めたやうに喉をならしながら、疲れた巡禮者は自分の體と多くの荷物をネバ／＼した道に押し立て、長い草をかきわけながら、一列になつて案内者のあとにつゞいて行つた。

白んで來る空に對し、體が目立つてくるやうに感じた。

その内に、もう一つ塹壕を見付けて降りて行つた。——三脚臺を持つた兵も急いで塹壕へ降りてしまつた。そして陰氣な行進がつゞけられた。何か不吉な事でも起きさうに無言のまゝ進んだ。

案内者はもう一度決心がつかぬらしく立ち止まつた。

「オイ、コラ、貴様の今あるところを知つてゐるのか、こゝはどこなんだ」
エイリングが不平さうにたづねた。

「私が行つたらと思ふ道をお取りになつたら……」

案内者は躊躇しながら答へた。

エイリングは深い溜息をついた。恐ろしい敵があたことに氣がついてゐたが、上官らしい言葉を使はうとした時、丁度短袴をつけた姿が暗中にヌツクと立つた。

「オーイ、誰だ？」

エイリングが聲をかけた。

「これはカメロシス塹壕であります」

ウエスト・ハイランド兵の丁寧な答へがあつた。

「どこの塹壕をお探しになりますか？」

エイリングが彼に行先を話すと、意外な答へがあつた。

「それは少尉殿ズット後であります」

「後？」

「私は今少尉殿に申し上げようと思つてゐたところですよ」

案内者は自分の威信を償ふ努力をしながら言つた。

「馬鹿な！ 廻れ右！」

興奮したエイリングが號令をかけた。

友情あるカメロシスから道順を詳しく聞いたので、彼は塹壕を匍ひ出して、そして行列の先頭へ行つた。

哀願するやうな聲が少尉のうしろから聞えた。

「少尉殿！ 私はこんどはどこへ参りませうか？」

エイリングはハッキリ「ついて来い」と答へた。

案内者は部隊の後にふくれた顔をして隨いて行つた。

「私は何のためにゐるのかわからん」

「これを擔げ！」

機關銃の三脚架を擔いでゐた兵は振りかへつていつた。

「ソラ、これを擔いだ」

9 氣體の堤防

塹壕作業は前夜の九時ごろから始まつた。

すつかり暮れ切つてしまふと、いろくの部隊が胸牆から匍ひ出て「人なき地」 No man's land (兩軍の中間地帯) へこつそり入いて行く。

こゝでもすることは澤山ある。砲彈で切れてゐる鐵條網を修繕しなければならぬ。鐵條網の前へ暗中に匍つて来る奴を驅逐しなければならぬ。

穀物がところ／＼に射撃に都合の悪い高さに生長してゐるので、作業隊に刈るやうに命ぜられる。農業史の記録中最も奇妙な收穫である。

右の方では音をひそめて鶴嘴やシャベルで對壕が掘られてゐる。

凝り性もない「夜の鳥」なる工兵隊は機關銃のために陣地を造つてゐる。

工兵隊は時機の熟するを待つて、彼等の饒舌の武器をその前進の極點まで運んで、塹壕間の空虚な中間の方角へ「一聯か二聯ブツ放なす」やうにする。敵の塹壕からは近頃神秘な土を掘る音や、ゴソゴソいふ話聲が鐵條網の前面の傾聴柱のそばに坐つて、マイクロフォンの力を借りて大地の腹から秘密を引き出してゐる將校によつて發見された。

射撃塹壕の後方では、もつと偉大な活動が行はれる。砲彈でこはされた胸墻がドシ／＼修繕されてゐる。砲座も銃座も絶えず位置をかへる。交通壕は擴げられたり、もつとしつかりしたもの仕かへられる。

ある一部では作業隊が隊伍を組んで一哩も後方の森の蔭で、糧食や、水や、彈藥を車から卸してゐる。

豫備塹壕では傷ましいほど陽氣に辛抱がよく横はつてゐる負傷兵が救護隊に拾はれて收容されてゐる。彼等は恐らく二十四時間以内にはロンドンの病院へ送られて安臥するだらう。

夜の恵みの外套の下に戦死者を葬つてゐるものもある。

同時に、射撃線や豫備線の息のつまるやうな塹壕小屋の中で、のぼせ上がった中隊長等が戦線の報

告を口授したり、筆記さしたりしてゐる（今になつても、卓上ゲームのうるさい仕事は抜け切れてゐない）

死傷報告が来る。敵の情況報告が来る。友軍の狀況も通報して来る。風の方向などといふことから何から何まで。

ペラ／＼の通信紙の上へうす暗いかたい鉛筆で、彈藥や、土嚢や、コンクリートの材料等々の註文を書き入れなければならぬ——蠟のジ／＼と焼ける灯の下で。

總ての文書は午前一時まで、傳令で送るか、電話で話さなければならぬ。本部ではそれを整理して旅團へ轉送し、そこで前と同じやうな手續を経て、先きへ／＼と送り、概ね午前八時に五哩離れた師團司令部の朝食の卓上——師團長や幕僚がうまさうに温かい食事を取つてゐる所へ運ばれて行く。給仕の運ぶ御馳走と一しよに。

すべての夜業は眞くら闇の中で行はれるものとは限らない。實際反對なのだ。

イルミネーションでお互ひに輝し合ふ。光彈もマグネシウム燈も、探照燈の目の光りには兜を抜ぐ。お互にキラ／＼光らし合ひながら挨拶を交換する眞たゞ中にあつて、射撃塹壕の前後で夜業を行ふのである。——親切？ 友人があかりを供給してくれるのでこちらの仕事場を樂にしてくれる。

こちらからも、厚く返禮してゐるが。

この作業の間最も不思議で不可解なのは、砲撃が全然行はれないことである。この短かい時刻内には生きようといふ主義から略式の休戦が成立してゐるのだ。鐵條網に近く作業する部隊を機關銃で撃殺にするのは容易なことだ。敵の塹壕後の道路が糧食や飲用水車で群がつてゐることを知つてはゐるが、之を砲撃して血腥い荒野にするにはあまり兒戯に類してゐる。

雙方共純粹に守勢的療養的仕事に限定してゐる間は、干渉は少しも、いや一寸もしない。ひとりあのザッケイアスばかりがこつくと働いてゐるだけだ。そしてとき／＼偵察兵があまり大膽なことをやると、機關銃から一寸ばかりおこぼれを施してやる。

塹壕は全體からいつて静かだ。

若し、敵が糧食車を塹壕近く引き込んでゐるのを邪魔立すれば、敵の對策は至つて簡單で、こちらが糧食車を引き込んでゐるのを敵が邪魔するだけのことである。

さうなると兩方とも空腹で戦ふことになり、兩軍共戰術上策の施しやうがなくなる。つまり優劣なしといつていゝ。

ある入念な攻撃計畫が實行されてゐる時の外は夜の早い内は比較的平和である。俄かに第一塹壕に不意に騒ぎが起きた。それはなんたらう？ 英軍の小銃が一發二發三發と打たれ

た。それに引きずられて、果てから果てまで全線興奮した一齊射撃となつたのである。

忽ち道をへだて、不眠の一隊がこれに應戦し、三分ばかり暴風があれ狂うた。

前方で作業をしてゐた部隊は顔を地に伏せて我慢しながら小言を連發させた。

不意に暴風が止んで、完全な静けさがあたりを支配した。

この騒ぎは何であつたか。哨兵の間違つた警報であつたのだ。夜風のさゝやきにたまされたのか、神経過敏になつて、まぼろしの大軍が闇の中を進軍するのを見たのか、これに向つて發砲したのであつた。

塹壕作業に不慣れた軍隊にはよくあり勝つことである。

聯隊が塹壕でお互ひに交代するのもこの時刻である。

出て行く聯隊は、はひつて来る聯隊が完全に引きついでくれるまでは、その位置を離れることはならぬのだ。

その結果として、短時間だが、一千人を容れる塹壕内に二千人の部隊がギシ／＼つめ込まれる。健康な兵でも氣が遠くなるほどだ。ラグビーやフットボールをやつた者は小ぜり合ひの術を心得てあることを有難く思ふに違ひない。

どんなにうまく組み込まれてゐても、こゝかここで押し合ひ、へし合ひするのは、仕方がない。彼

等が闇の中でゴタ／＼と混み合つて身動きもならぬやうになつてゐる間は、向うの獨軍の戦線でも狭い交通壕の内へ浮ばれぬやうに詰め込まれたザクセン兵とプロシヤ兵とは、我がマックルウェーム卒と彼の交代に來た相手の兵とが、皺枯れた聲でのゝしり合つてゐるのと同様に聲を落してわめいてゐると思ふと、お互ひを永遠の滅亡に渡してゐることが幾分か慰藉にもなる。

こんな交代は四五日目ごとに行はれる。この隊が疲勞したからではなく、交代聯隊が來たから交代したといふ時代もあつた。

こんな短時日に交代することはさう古いことではない。彼等の大隊が一つの塹壕に止まること、實に五週間と三日もあつて、ヤット交代されたこともある。

その間、彼等は獨兵から非常に急迫した待遇を受け、御馳走に預かつたが、遂に一ヤードの塹壕をも失はなかつた。

本部からの情報によると、彼等を交代するために、一聯隊を割くと、他の重要な部分が手薄になるといふことである。一日でも多く現場で我慢してくれれば、軍司令官は、「感謝措く能はず」といふさうだ。

だから、何でも辛抱した。今にウントお褒美があるに違ひないから。遂に彼等は塹壕を出て舍營地へよろめき還つた。自然彼等の舊舍營は長い間他の軍隊に使はれてゐ

た。そこをもと通りにするには大抵の苦勞でなかつた。

大隊長が交代報告に行つた時、彼を取り持つた一參謀將校に大隊長が「僕等を何週間塹壕に留め置かうと構はぬ。寢具を失くしてもどこへでも眠れる。併し、僕等の舍營を引き繼いだ馬鹿野郎に、僕の紙巻煙草の最後の一箱を攫はれたのはたゞ異議がある」といつた。

參謀は大隊長に、「それは氣の毒でした、マア許しておやりなさい」といつたので大隊長は笑つてすました。

大隊長は、幾日も／＼十分の休みも取られない氣のつまるやうな警戒をして來たので、今晚こそはゴロツと毛布の中へもぐり込んで深いねむりに落ちた。

間もなく不吉な聲によつて眼をさまさされた。

「司令部よりの傳令が大隊長に面會に來ました」

大隊長は嚴格に床から重い體を下して傳令に入れといつた。

傳令は室へ入つた。持つてゐるものは司令部の公文書でなく、一つの包みで、それを敬禮して差し出した。

「司令官がよろしく申されました」

その包みは一箱の葉巻であつた。

夜はそろ／＼更けて行つた。今は一時半で塹壕の方でもソロ／＼仕事を止めるころだ。

糧食受取りや、對壕掘りから戻つた兵隊は立ち所に身を横へて死んだやうに眠つてしまふ。歩哨だけが肘を胸壁にかけて、不眠の見張りをつゞける。

敵線の後方より底力あるドシンといふ音が一發また一發耳に響いて來た。

大砲がまた眼をさましたと見える。我が軍の空糧食車があわて、歸つて行つた。そして又その日の砲撃開始となつた。

彼等が我が戦線を頻繁に砲撃したり、短時間の貴い睡眠を妨げさへしなければ、勝手に砲撃してもいゝのだが。

砲撃中でも糧食隊は十分世話をしてくれるが……。

「あのイチゴ・ジャムのピンセットには榴散弾は何の害もしないと見える」
トッシ卒は塹壕小屋にころげ込みながら苦々しげに言つた。

ピンセットといふのは炊事係のことをかういつてゐる。

桃と林檎と莓を交ぜたジャムを、幾日も／＼つゞけて食はされたので、塹壕の兵隊は心中私かに野戰糧食班の分配係の心事を疑ふやうになつた。

もう明け方に近い。いつもの「さゝやき」命令が駟聲雷の如き塹壕内に傳はつた。

「銃を執れ！」

胸壁は直ちに武装兵で裏付けられた。夜露を防ぐ防水布は機關銃より外された。そして、彼等は白み行く暗黒中へ眼を見張つた。

攻撃には最も、時刻だ。いつ何時、大砲が我が胸壁を砲撃したり、鼠色の軍服をつけた人垣が百ヤードとは離れぬ麥畑から現はれて頭の上に落ちかゝつて來ないとも限らぬ。

どちらでも覺悟してゐる。

一寸この状況を信號するしるしに小銃のバラ／＼射撃と機關銃を五六發、麥の中へ打ち込んだ。併し、今朝は明かに何もゐない。日はだん／＼明るくなつたが獨軍の方では何の行動も起さない。

敵の塹壕を蔽うてゐる淡い霧は何だらう。それは薄いベールのやうにさはつても手に感じないほどのものだが、こちらへ漂々としてやつて來るらしい。

何だらう？

次の瞬間に、兵隊は急いでガス・マスクを頭からスッポリ被つた。

その間、ワデル少尉はこの目的に用意された狂氣じみた警鐘をたゝいた。——塹壕の後壁に挿し込んである劍に吊した十八斤の砲彈殻を警鐘にしてゐた。その音は塹壕の全線に互つて繰り返された。

二分間の後には各兵はその位置につき、宗教審判所の役人のやうに、異教徒を火あぶりに處するやうな態度で、黒い頭巾を冠り、雲母眼鏡を通して近寄り来る氣體の堤防を爛々と見つめた。氣體の堤防は極めて静かに近づくだけで、事實デッとしてゐるのも同様だ。やがて、朝日がピンク色の地平線を振り切つて空へ上がったところ、堤防は消え始めた。

半時間後にはもう何も残つてゐなかつた。兵隊共はマスクを脱いで朝の空気を半信半疑で吸うた。併し、彼等に匂ふたものは、もと通りの混合臭氣——屍と石灰の鹽化物の混合した臭ひであつた。この事件はその日の日誌の中にケンブ少佐は次のやうに記録した。

「四月七日午前、瓦斯襲來の虚報あり、朝霧なるか、或は敵が軟風にて毒瓦斯不十分なりと見て計畫を中止したるによるか」

彼は黄と白の印度模様ハンカチーフで、禿げた頭を撫でながら、「鹽化物や臭化物の一吹き位は、こちらの塹壕には大したことになるかどうか、僕にはわからない。死體の臭氣を緩和し、恐ろしい蛆を一掃してくれるかも知れない。ワデル、僕は君に一志の銀貨を上げるから、君はそれを獨軍の塹壕へ持つて行つて、ガス・メートルの中へ入れるやうに言つてくれ給へ」

「私は英國の銀貨は獨逸のガス・メートルの穴に入るまいと思ひます、多分獨逸のマークが欲しいの

でせう。ところが私は佛貨のフランしか持ち合せがございません。……」

「外科手術を七時三十分」

ケンブ少佐はその時塹壕小屋へ這入つて來た軍醫にいつた。

「こゝにある僕の友人のために、……シドニー・スミスの方箋は？ 朝食はすんだか？」

10 ミニー女史

九時頃敵は「朝の挨拶」に大砲を打つてよこした。豫備塹壕に沿うて榴霰陣の前菜——髯剃り最中なので非常に不愉快な奴だ——から始めて、背後の森を盲さがしに打つ。敵の目指す獲物は機關銃の銃座であるが、それは賢くも數時間前そこを出てしまつた。それから科學的に第二線を打つて來た。こゝはくすぶる火の上で朝食を作つてゐたので、忽ちその位置と、射撃距離とを輕率に敵に廣告してしまつた。

それから、程遠くないところへ大きな六發の彈を落してから、その朝の挨拶に追加して、終りを結んだ。

その後は全く沈黙にかへつた。

彼等は暑いこげるやうな塹壕の中で雲なす青蠅に聲援されながら、その日の仕事をつづけた。仕事といへば土を掘ることだけだ。胸墻は少しも強くない。ある點のごときは三日つづけて打毀された。

交通壕は數も少なく狭い。塹壕小屋も十分でない。

きのふ三人負傷した。場所によつては擔架を擔つて通れぬほど狭いので、彼等は數布に包んで送らなければならなかつた。それでさへ、壕の突角にブツつかつたり、鋭い角を急に曲つたり、時にはどうしても體が敵の眼につくやうになる。

兵隊共は一生懸命に働く。二三時間といはず、一分の後、自分が自分の恩人になるかも知れぬことを承知してゐる。彼等は夜のやうに體を暴露しないで、蝸牛の角のやうな砲臺鏡の例に倣ひ、光學法則を利用して（といへば六かしいが）劍の尖端へバネ仕掛に鏡が取りつけてゐる。

十二時半には晝飯が来る。罐詰牛肉とビスケットとジャムと。

その後に疲れたものは皆塹壕の中で、體を曲げたり腹匍ひになつたりして、深いねむりに落ちる。

午後二時から五時までには、二十四時間の内一番無事な平穩な時刻である。その時刻を睡りそこねた時間の埋合せとするのである。

けふは午後でも至つて平和なやうだ。

三時半ごろたのしい夢を涼しい木蔭で結んでゐたポビー・リトル少尉——戀人と甘い物語でもしてゐたリトルは、不意に「……ウップ」といふ音によつて夢が破られた。

つゞいて彼の塹壕小屋の屋根の上へ重い土や小石が夕立のやうにドサクと落ちて來た。

「エーイ！ 汚ない」

彼は時計を見ながら小屋から頭を出した。

「ピツタリ寢て居れ！ まだやつて來るぞ。死傷者はないか？」

リトルが兵隊に言ひかける途端に、第二の榴霰彈が破裂した。

胸墻の二三ヤードの近くに破裂して霰彈や破片が時雨のやうに塹壕の上へ落ちた。

つゞいて第三、第四發が破裂した。

擔架卒を呼ぶ聲が聞えた。

かうして不意に恐ろしい場面が演じ出された。

五分後には、負傷兵を繃帶所へ送つた後、ポビー・リトルは大急ぎでブレイキー大尉の小屋へ行つた。

「負傷兵が出來ました」

「何人？」

「六名です。内二名は後方へ送りつけるまで持つまいと思ひます」
ブレイキー大尉は顔をしかめた。

「フム……」

「砲兵を呼んだ方がいゝと思ひます。どこから砲弾が飛んで来たのでせう？」

「左のあの森からだらう」

「あれは『Pit』だ。電話手そこにあるか？」

人の姿が入口に現はれた。

「何か御用ですか？」

「ギャヴァ少佐を呼び出して H21 は Pit に砲撃されてゐますと言へ。そして復讐射撃をと」

「ハイ承知しました」

電話手の姿は見えなくなつた。五分後に又出て来て、

「ギャヴァ少佐がよろしく申されました。塹壕から観測するため今自身でおいでになります」

「役に立たない奴だねえ、……さあボビー・リトル又少し射撃が見えるぞ！」

その内、ギャヴァ砲兵少佐が来た。隨行して来た傳令は電話線を繰り出しながらついて来た。

少佐は砲臺鏡を調節してゐる間に傳令は金屬棒を地中に挿して受話器を頭につけた。

眼鏡をのぞき込みながら、筒をつけて低く叫んだ。

「第一砲車、三千五百、(距離) 第四火薬！」

神秘的な言葉が自信ある低い聲でコックニー(ロンドン兒)傳令によつて電話へ復誦された。

「射撃用意が出来たら報告せよ！」

少佐がかういつた。

「射撃用意が出来たら、報告せよ！」

傳令がくりかへした。

「少佐殿！ 第一砲車用意終りッ！」

「打て！」

「打て……第一號砲車は打ちました」

少佐は眼鏡に硬くしがみついてゐる。

ボビー・リトルは砲撃がどうなつたか怪しんだ。彼は音響が一秒間に千呎以上傳はらないことと、

砲は一哩半後方にあることを忘れてゐた。

その内に遠く砲聲が聞えた。殆んど同時に榴弾がゴーと頭上をかすめた。

ボビー・リトルは眼鏡を持ち合せてゐなかつたので、砲弾の結果を見ることが出来なかつた。たゞ

神の攝理として胸墻の上に頭をあぶなくも出すところであつた。(ザッケイアスもさうだつたらう)
「第一砲車、二十一分割右へ、距離火薬、前のとほり！」

少佐が命令した。

傳令は又一とほり彼の儀式の次第をくりかへした。
すると、又一發頭の上を呻りながら通つて行つた。

少佐はその結果を目測した。

「連發！」

その結果砲彈が盛んに飛んで行つた。

「ヨシ、第一砲車に平行に、一順射撃二十秒間隔！」

號令は一々電話によつて傳へられた。

少佐は眼鏡をボビー・リトルに渡した。リトルは眼鏡に眼をつけるや否や、全放列線一齊に打ち出した。

一發、二發、三發、四發。

復讐する砲彈が二十秒の間隔で進んで行つた。

四つの草土と、四條の土や雑多なものが森の前で飛び上がった。

彼からは應戦しなかつた。

「打ち方止め！」放列線は愼み深く身をかゞめた。

「これで一旦打ち切らう。時にミニーが何かいたづらをしなかつたか？」

プレーキー大尉に少佐が言つた。

「きのふも、彼女からひどい目に逢はされました。朝の五時十五分から十時ごろまで、打ちつゞけました」

ミニー本名はミネルウェルフェルといつて獨逸の白砲である。ときどく思ひ出したやうにウンテル・デル・リンデンに住む。その最大着弾距離は二百ヤードだから、彼女のお世辭は我が第一線塹壕だけに限られる。彼女は大型圓筒形爆裂彈を空中へ弾き出すのである。爆裂彈は長さ十五吋、直徑八吋、鈍き拋物線を描き、途中で仰々しいとんぼ返りをして、最後に軽くドシーンと音を立て、塹壕の中へ落ちたり、胸墻へブツつかつたりする。

十秒の間隔でミニーの子供が破裂する。ミニーは約三十英斤のダイナマイトを持つてゐるから、どんな塹壕でも爆發してしまふ。小屋も胸墻もメチャクに。

「彼女はひどい損害を與へたか？」

少佐がたづねた。

「二名を斃し、一人を生埋めにしました。彼等は小屋の中にもないのでした」

「防楯を冠つてもミニーに對しては駄目かねえ……むしろ交通壕へ下つて彼女を避けてゐたがいゝやうだね」

「私達もさう思つてゐます。併し、彼等ははじめに人を瞞します。三度ばかりヒューバパンといふ支那の爆竹でもやるやうにやりました。小さい砲彈なのです。私達は防楯を冠つて低く寐てゐました。すると、そこへ女史は知らぬ間に贈物を送つて來ました。その汚ない奴は塹壕のすぐそばへ落ちて、私達が起き上らうとした時に破裂しました。そして胸墻を三四ヤード毀しました。そして今申上げた三人の若者の命を取つたのです」

「彼女の居所をつきとめましたか？」

「ました。ここから左方あの切株になつた柳の樹のうしろです。私はミニーにその役目を果さすために、あそこへ連れて來て、彈を打たし、それから危くないところへ連れてかへるのでないかと思ひます。彼女は二時の番です。午前の二時と午後の二時と」

「二時の番、フーン（少佐は考へ込んで）こちらが一時五十五分の番を唄つて半ダースのH・E彈をミニーの支度部屋へ送つたらどんなものだらう。よく僕も考へてみやう」

「どうぞ、（プレーキー大尉は丁寧につて）ミニーはカイゼルの一番わるい武器でせう。あれを使

はなけりやと思ひます。今日はどういふものか顔を見せません。これまでは五日の間毎朝現はれて、胸墻の同じところを打つて轟にしました」

「それはどこです？」

「少佐は塹壕の地圖を出して聞いた。」

「ミニーは非常な弱點です。ミニーは毎朝二時ごろこれを押し倒します。その結果私共はこの上へ終日歩哨を置かねば、いつそこから入つて來るともわかりません。私共は夜の内にすつかりもとの通りに作り直します。その時はミニーは大きく大人しく決して邪魔をしません。彼女が甘へたもの、言ひ方でもするのが聞えさうです。すると今申上げたやうに二時が來ると、——丁度作業部隊が小屋へ戻つて來ると、彼女は待つてゐたといはぬばかりにあの嫌な爆裂彈をすべらして寄越します。そして私達の同時間の仕事を元の木阿彌にします。初めは冗談半分にやりましたが今はもう飽きてしまひました。何しろ獨軍の憎らしい手です。捨て、置いてはいよく圖に乗つて手がつけれなくなりませう。凡ゆるこちらの手をプチ壊してしまひます。私はあなたの一時五十五分といふ御意見に賛成します。あいつをやつつけて下さい」

「どんなことになるかやつてみませう。……一番いゝ案は二時間ウンと威嚇してやることです。私の放列からあすの午後、多分お知らせしませう。明日はウンと低く打ちますから、この邊の塹壕からあ

なとも、一時退いてゐてもらはねばなりませんまい。では左様なら」

11 森の祈り

朝の六時だ。

平和な空気が塹壕を支配してゐる。

いつもは敵の飛行機を打つたり、敵が味方の飛行機を打つたりする時刻である。このごろは飛行機が真晝間飛び出すこともなくなつた。

今朝に限つて二臺空に上がつて敵の戦線上を物探しげにピン／＼唸つてゐる。併し、敵の煙幕弾をくゞつて敵機を追つかけるやうなことはなかつた。

獨軍戦線の遙か向うに一軒の人家が燃えてゐる。

「獨軍の奴今朝は少し弱つてゐるな」

ブレイキー大尉が茶をのみながらいつた。

「獨軍の奴きのふの午後はひどくやられたらしい。びつくりしたらしいよ。我師團砲兵は無疵だ」
ワグスタッフ大尉が相槌を打つた。

ポビー・リトルは満足したやうに息を吐いた。その日午後二時、半ば聾になるやうな思ひで坐つてゐた。その間六時砲弾が彼の頭上數呎の所で胸墻の上をかすめた。

砲兵少佐は約束を守つて正確に一時五十五分にミニーの二時の番の來ない五分前に見當をつけた彼女の住宅へ向つてうち込んだ。これはたしかに先手を打つたに違ひない。

どれだけの利目があつたか、誰も知らなかつたが、それ以來ミニー女史は聲を揚げようとしなくなつた。

その後の獨逸の塹壕は、果てから果てまで修繕されてしまつた。後方の塹壕は、徹底的に守備されてゐる。

獨軍砲兵も全力を擧げて應戦したが、塹壕へ通り抜けの砲弾を送るだけで、彼等が英軍砲兵に對する集中射撃の企ては不成功に終つたらしい。

「死傷は？」

ブレイキー大尉がたづねた。

「こゝには一人も。後の豫備塹壕にはいくらかあるか知れませんが」

ポビー・リトル少尉はかういつた。

「電話で聞いてくれ」

「今は駄目です。電話線がズタ／＼に切られてあります。今修繕最中です。私もすんでに怪我するところでした」

「どうして？」

「味方の砲弾の一發が私の頭に中るところでした。その時私は立つてみました。砲弾は不意打ちにきました……背墻をブチ毀し、小石を頸筋の中へ蹴込みました」

「大抵のものは遅かれ早かれ頸筋の所をやられるよ」

「プレーキー大尉が警句的にいつた。」

「殺されても何とも思ひませんが、生理めにされちやたまりません。だから私はミニーが嫌ひだといふのです」

リトルは急に立つて背のびした。そして喉を掘るやうにして言つた。

「イヨ、何といふさえ／＼した大空なんだ」

本當に平和な大氣だ。日曜らしい氣分だ。

「全くさうだ」

プレーキー大尉は靜かに口笛を吹いた。そして、「この前の日曜の今頃」を思ひ出した。

前の日曜日は非番であつた。雲のない夏らしい美しい日だつた。疲れた人はたゞ他愛もない眠りに

耽つた。あるものは着物を洗つた。ある者は田舎道を徘徊して、大砲のことも忘れてゐた。

砲彈で壞された別荘の屋敷内の森の隅で各宗派別に教會の集合が行はれた。

森は悲しい姿となり果てた。別荘の前の空地はテニスコートのすべ／＼した廣場だつたが、今は驟馬をつなぐ杭が打つてある。埃だらけになつて青葉一つ残つてゐない。泉水も壞はれて鏝やジャムの空罐で一杯になつてゐる。五重塔に似た四阿——佛蘭西式別荘の庭に異彩を放つてゐる——は主計の倉庫になつてゐる。森は半ば伐られて薪に使はれた。

それでも七月の太陽はその残りの樹の間から氣持よく姿を見せてゐる。そしてダビデの詩篇はこの森の下から心地よく浮び出て、故郷の教會の聖歌團長の机のあたりに起るものよりは美しい聲だつたらう。

塹壕は森の中を電光形に走り、鐵條網は森の下草と雜つてゐる。森の隅に俄作りの墓地がある。墓碑の文字はまだ三日経つたばかりのものもある。これ等の一二のものを讀んだだけでも想像を逞うさせ、血を湧かすに足りる。

こゝにはイングラランドのトンミーと、蘇蘭のジョックとが、加奈陀の親戚と相竝んで横はつてゐる。

少し離れたところにも墓がある。その墓碑には、白人に讀める人は極めて少ない文字で銘が書いて

ある。

彼等は相並んで——戦争は生命の浪費に違ひない。併し最後の眠りにつきながら英帝國の呼吸に對する活ける證據がこゝに横はつてゐる。偉大な器械の獨逸帝國は墓の上はどこにその精神が殘されてゐるか、軍人が死すれば彼はひとりぼつねんと無意味に横はるのみだ。

英國教會の禮拜は最後に行はれた。午後遅く若い赤い顔の軍隊附牧師が自轉車に乗つて來て、廣い檜の樹蔭で、彼の來るのを待ち受けてゐた將卒の一團の前へ現はれた。(彼等一團は僅かの人數しかない。「認識票」には大抵長老派とかローマ教とか書いてあるから)

「遅くなつてすみません。これでけふ六回目の禮拜です」

牧師はワグスタッフ大尉にかういつた。

牧師は元氣よく額を撫でた。そして袋から澤山の讚美歌を出して、その會衆を順序よく席につかせ氣持のいい抑揚のある聲で禮拜の言葉を讀んで聞かせた。

終つて謙讓にしかも男性的な短かい説教をした。その中にポビー・リトルも英佛海峽のこちらに在つて故郷を思ひ出すやうな光景の中へ入つて來た一人であつた。

説教の後で讚美歌が元氣よく歌はれた。

終つて牧師が言つた。

「あなた方は讚美歌がお好きのやうですから、解散する前にもう一度やりませう。何を望みますか？」

思ひもよらぬ人が、「日暮れて四方は暗く(九番)をやりませう」といつた。

讚美歌九番がしづかに歌はれた。

何となく涙ぐまれて來るのであつた。

最後に、牧師の「禱り」があり、銃のやうに硬く立つて、英國の國歌を謳つて、けふの集りがをはつた。

牧師は、「もし、どなたでも聖餐式に列する御希望がありますればお取り計ひいたします。この次といつてもその機會がないかも知れませんから。私はあの向う(小さい墓地から遠くない森の隅を指し)にあますから」といつた。

牧師は急造の淨められた場所へ退いた。

兵卒六人と將校全部とが彼に隨いて行つた。

糧食函を祭壇にした。

ワグスタッフ大尉はその日曜の一日を思ひ出した。

沈黙を破つて、大尉は、「いやな仕事だ、戦争なんてものは」と沈んでいつた。

「それを思ふと……オヤ彈があそこへ飛んで行つたぞ、さあ、リトル少尉！」
その日も又暮れてしまつた。
獨軍の塹壕からは薄い光る絲が暗い空の中へひそかに登り、ギラ／＼する鮮光となつて英軍の塹壕の上を照らした。

同時に飛び／＼の小銃の音が戦線の彼方でバリバリと騒いだ。
夜の仕事が始まつた。

12 少尉オセロー

二ヶ月餘りは彼等の塹壕は取られたり、取つたりして、感激のない平凡な月が流れて行つた。
けふも朝早く戦闘準備をしてムツリしながら胸墻の上から、夜の幕の開くのを眺めた。——灰色の草が縁に變つて行くのを。

狙撃兵の銃丸はシュツ、シュツと頭の上を掠めた。

午前は露に錆びた鐵砲や劍を磨き、執着いチュウトン人が投げ落した土囊を積み上げる。

午後はいつも見つからぬやうに地下の穴へもぐり込む。尊敬する砲兵はそれから、彼等のいふ「砲

兵試合」にとりかゝる。

試合といつても、お互ひに發砲し合ふのではない。向うから打つてよこすを見つけ次第に打ちかへすだけである。

丁度少年同志が仇討の名乗りを上げて、毎日午後出かけて来ては、幼ない子供に石をなげつけて、憎悪心を和らげ、名譽心を満足するやうなものである。

夜は歩哨に立つたり、偵察に出たり、作業隊に加はつて工事をしたり、糧食隊に入つて食糧の分配をやつたりする。

戦死負傷の損失は如何ともしがたい。併し、彼等がいくらでも前進出来るものなら不平もないが、何一つの行動も起さない。とき／＼塹壕がこゝでは突撃されたの、彼處では取りかへしたのと、差引勘定は將棋の「引分け」のやうだ。

彼等が臨んだ戦場では花々しい功名手柄をあらはす機會といふものはない。ナポレオンならどうするだらうかと思ふが、ナポレオンの第一得意の戦術といふのは、將棋盤を大きくゆすつてその分離に乗じて、各個にメチャ／＼にたゞきつけるのだ。併し、オスチンからアルプス山脈まで延びてゐる一軍に對陣してゐたら、どうしてソナ曲藝が出来やう。運動戦をやり得ない現状では如何なナポレオンでも何とも仕方がなからう。

成功の秘訣は奇襲である。古代不出世の英雄は強行軍によつて突然敵の一翼を包圍したり、或は巧妙な伏兵やわなを置いたりしたものだ。併し今日では翼の外、敵の側面をどうして圍むことが出来るか、飛行機や偵察隊や電話電信隊の完備した近代式情報部に對して、どうして、伏兵などを置くことが出来るか。五十萬といふ大軍を敵線上のある一點にどうして置くことが出来るか。立所に敵はすべての計畫を偵知して、すぐにその裏をかくことは見え切つたことだ。

毎朝敵も味方も司令部の朝食の卓上には、對向軍の運動の情況、鐵道輸送の方向まで、飛行機寫眞に取つたのが置かれてある。

對向軍の狀況は何もかも手に取るやうに分つてゐる。あらゆる科學の力の前に秘密も偶然もない。すべてが机の上へ揃へてある。

これではナポレオンも術の施しやうがあるまい。あの火山的誇大思想狂は頭痛の燃焼で自然に燃え切つてしまつたに違ひない。

「その日の仕事」がとも角も戦争の一役を持つたことになつてゐる。各人はそれ／＼特技があつて、そればかりで上達する。そして個人的に自惚れる。

最も仕合せな——少くとも最も忙がしい人は今では「専門家」といふものだ。中隊の普通の仕事に従事して居れば、歩哨に立つこと、塹壕の手入をすること、砲彈を避けることぐらゐの仕事である。

併し、若し専門家となると、その生活は多種多様になる。

塹壕小屋の入口のベンダの空箱に腰を掛けて、頭に繃帯を巻いてゐる若い將校を見たか。

彼はロッホ・ガイア少尉で、その内にもつとよく知れて來るだらうが、彼は大きな城の有名な族長である。が、出征地のこゝでは誰も獨立して父祖の威光を尊敬する者もなかつたが、彼は單に「オセロー」として知られてゐる。

會つてケンブ少佐が、その役（オセロー）を演ずるために、全身を眞黒にした熱心な若い傳統的の俳優に、彼を壁へたことがあるからだ。彼は非常に職務に熱心だつたからである。

昨夜オセローは自ら進んで、獨逸の塹壕から約五十ヤード離れた所へ、問題になつた地雷のありかを「聴き」に行つた。

彼は日が暮れると、水をビスケット罐へ入れて出かけて行つた。

本部の意見——この種の意見はオセロー以外のものは、誰も敬意を拂ふものはないが——がこの工夫を暗示した。

その原理は、液體は空氣よりも一層よく音を傳へるから、聴者がもし水を盛つた罐を地上に置き、その傍に横はつて一方の耳をその中へ浸して居れば、地中より秘密を引き出すことが出来る。オセローはそれによつて地雷の在所を發見することは出來たが、ビスケットの水の罐へ餘り長く耳をつけて

「あつたので、耳がひどく凍傷にかかった。」

併し、彼はそれにも屈せず、こんどは體を草色に染めて木に登り、そこで敵の配置を廣く偵察したいといふ計畫をめぐらしてゐる。

彼は機會さへあればきつと、青蛙のやうな藝當をやるだらう。

機關銃手も彼自身の頭で何か無聊を打ち消さうと工夫してゐる。同僚を驚かすやうな計畫に熱中してゐる。

エイリングは彼の膝の上に大きな地圖を廣げて、こんなことを言つてゐる。

「僕等はこの十字路を一寸つついてみようと思ふ。(コンバスの尖を獨軍の塹壕數ヤードの一點に置いて) 彼等は糧食分配時刻には澤山運搬車を持つて來るだらうぢやないか」

「面白い、それをやりませう」

彼の助手で血にはやる青二才のエインスリといふのがいつた。

「位置關係がわかりましたか？」

「ウム、わかつた。その半圓分度規を貸してくれ。七十一、十九(エイリングは暗算をやつて) ぢやうど……ウム、九時に二門で、あのかわいた溝の角へ出懸けるとしよう。そして打つてやらう。二千五百……」

「電光測定器は？」

エイリングの計畫に感心してゐるエインスリがさゝやいた。

「ゴム紐も入りませんか？ 手で出來ますから」

「ベルトを一つ二つ弛めて置け」

「委細承知！ 十字路、そこは一つのカフェーです。獨兵の奴が中に滿ちくしてゐるカフェーです。開いた窓から一分五百發づつ、私等の銃丸が飛びこんだら、あの勘定臺の下へ匂ひ込む混雜を考へるだけでも面白い。總參謀長フォン・クルックにバヴァリアのビールを杯から半リットルこぼさせるかも知れない。これによつて私等は十字勳章を頂戴出來るだらう」

空想的な青年がかういつた。

「間接射撃の缺點は？」

エインスリほど天才的でないエイリングが考へた。

「的に中つたか、中らぬかわからないのです。そこに中るべき的があるのかわからないのです。構ふことはない、プツつかつてみませう。もし獨兵の奴の砲兵が不意に眼をさまして、バーンとこちらの勝手の悪い方へ復讐し始めたなら、——私等が誰かをくすぐつてやつたことがわかる。のですからとにかく……九時でしたわね！」

夜陰に乗じてこつそり出かけようとする爆弾隊がある。

彼等はこのごろ大尉に昇進したシムソンの率ある隊で、助手は白髪の決闘家のカーフレー軍曹だ。

その部隊は皆で七名で、その内よく知られてゐるのはマックスネーブ見習伍長一名だけで、彼は少年團の出身である。

爆弾隊はポケットの澤山あるズックの帯を腰に巻いてゐる。そのポケットに一つづつ爆弾が入れてある。

爆弾隊は果樹園の角を廻つて、獨軍のすぐ近くまで来てゐる。獨軍もそのことあらんと、不氣味に思つてゐるに違ひない。この重大な要點を見逃がすものがあるが、獨軍の方ではこちらの行動を一層よく監視するため、果樹園塹壕に最も近い點へ對壕を掘つた。

シムソンは部下の爆弾手に話しかけた。

「一人二人敵があるだけかも知れん。併し澤山こゝへ集めて逆襲して来るかも知れん。あすこは砲弾で地上に大孔があいてゐるから、それを對壕の前頭部として用ひてゐるかも知れん。とに角行つてみ

よう。もし中に獨兵のある對壕を見つけたら、爆弾を投げつけて追ひ出し、出来るだけ對壕をこはして來い。前へ！ 俺のあとへついて來い」

彼等は靜かに歩き出した。

夜は靜かに口を噤んでゐる。若い無經驗な月は獨兵の塹壕の後に細長い顔を見せてゐる。

地の上は雑草で蔽はれてゐる。草は秣には不向きだが、音を立てずに進むためにはいくらか樂であつた。

爆弾手は對壕の前頭部を捜すため一列に擴がつて前進した。中央にあるシムソンはときどき立ち留つて耳を傾けた。そして彼の部下はそのたびにビタッと足を留めた。

カーフレー軍曹は左の方でフー／＼と口を鳴らしてゐた。右の方には若いマックスネーブが小さい鈴をならしてゐた。

彼等は今ヤット半途に達した。月は雲のうしろで足踏みをしてゐる。

不意にマックスネーブの耳へ何ものか聞えて來た。

彼の直前の地中から洞穴に響くやうな深い音、——洞穴の奥で人間の話し聲が私かに聞えて來た。

彼はヂッと立ち止まつた。彼の部下にも「止まれ」と、しづかに合圖した。そしてまた聽耳を立てた。彼には喉の音とチリン／＼と聞える。

對壕前頭部へ来たのだ。開掘が進みつゝあるのだ。

マックスネーブが調べて来るといつて飛び出した。彼は體をねぢつて前進すると、進路はいぢけた蔽で妨げられた。

彼はコソリ膝をついて、のび上がり中をのぞいてみた。

丁度この時、光弾が彼の眞上に破裂した。そしてシュー、シューとおせつかいに彼の背中へ落ちて来た。

彼は頭を犬のやうに蔽の中へひつこめたが、この時マグネシウムの蒼白い光が、彼がのぞきに来た。砲弾の噴火口をてらしてくれた。

この噴火口には獨兵が一ぱい居た。彼等はわなにかゝつた灰色の甲蟲のやうだ。そしてシャベルや鶴嘴を持つて、見たところ噴火口の手入れをして、彼等自身の射撃塹壕と連絡してゐるらしい。

彼等はそこへ歩哨を立て、は居らぬ。弘法にも筆のあやまりといふところだ。

マックスネーブは匍ひ戻つてシムソン大尉に報告した。

それから何回も研究した計畫によつて、爆弾隊は壕から二十ヤードの半徑を描いた圓弧を作つた。

(爆弾を投げる時自分自らの爆弾の破裂距離外にあることが必要だから)

各自腰のベルトへそつと手をやつた。次の瞬間にシムソンが第一爆弾を投げつけた。それが丁度噴

火口の眞中へ飛び込んだ。

六個の爆弾がそのあとをついて飛んだ。

岩でも裂くやうな音がした。煙の雲とドタバタする蹻音と、陰々たる呻聲と……同時に獨軍の塹壕

内に大騒動が持ち上がった。

一ダースの光陣が空に上がった。小銃の急射撃がおこつた。機關銃もどもるやうな呪ひの音を立

てた。

爆弾手は立ち止まつて、その骨折りの結果を見届けようといふやうな氣取つた量見を起さないで地面の皺に腹匍ひに横はり、彼等が完全に歸れる工合のいゝ時刻の来るまで待つことにした。

半時間後に彼等はひとりづつ、胸牆を越えて塹壕の中へ無事に轉がり込んだ。

怪我は輕少だつた。ニンモ卒は片脚の憤はぎに貫通銃創を受けた。カーフレー軍曹は餘り肥つてゐて、他のものほど平べたくなることが出来なかつたので、彼の短袴のへりを弾で破られた。

「みなゐるか？」

シムソン大尉がたづねた。

調べて見るとマックスネーブが戻つてゐないことがわかつた。

シムソンは心配さうに胸牆越しに向うを見た。月の光りは隅なく輝つてゐるが一二ヤード先きはは

つきり見わけるわけに行かなかつた。

光弾がまた破裂した。多くの頭は胸壁から沈んだ。敵の銃丸が「つビシッ」と鞭をならしたやうに頭上をすぎた。

沈黙と暗黒とがまた戻つて来た。

頭をソツと胸壁の上にあげた。

「もう五分待つて歸らなけりや、僕が捜しに行かう、オーイ」

シムソンが心配さうに言つた。

鐵條網の外の小さい藪が不意に立ち上がった。そして信ぜられぬほどの熟練で、鼠のやうに最も近い鐵條網の破れ口を抜け、全速力で胸壁へ突き進み、次の瞬間には、ボールのやうに塹壕内へ轉げ込んだ。

彼を救け起す兵隊共が彼も藪の封筒(樹の葉を全身に纏つてゐる)から引き出した。彼は藪の封筒に包まれてゐなくても多分歸つて來ることが出來たらう。少年團員を三日すると止められぬものだから——彼はシムソン大尉に報告した。

「大尉殿！ 私は噴火口の様子をのぞきに引きかへしました」

「フム、さうか、どうだつたか？」

「うまく爆發しました。對壕の一部分も破壊しました。私は捕虜を生捕しようかと思ひました。聯隊長が完全に生きてゐる獨逸兵をつかまへて來た者には五十フランの褒美をやるといはれましたから。併し、何もゐませんでした。負傷兵を連れて行つてしまつたのではないかと思ひます」

(シムソンは喉を掘るやうにして彼を賞めた)「軍曹！ あれを見ろ！ もうあの男等は眠つてゐる。いつもの通り二時半には準備しろ、俺はこれから報告をしてくるから、そしてお前達が立派にやつてのけたといつて置くよ」

師團の公報摘要(毎日發行されるが紋切型で、何等變化がない他のニュースに交へて次のやうな報告が引き立つてゐる)

「昨夜小部隊が(大梯尺の圖上にて砲彈の噴火口の位置を示し)對壕前頭部と思はるゝ地點に爆彈を投擲せり。高き呻聲聞えたれば爆彈は恐らく効果ありしならん」

その當座我が七勇士に捧ぐべきものはこの外になにもものなかつた。

14 仲間外れ

塹壕内の歩兵は屢々敵味方の砲兵が不當にやりすぎると思ふことがある。そこで、彼等は塹壕戦で

は敵の砲兵に對して、味方の砲兵よりの射撃を毎日各砲十二發といふことに制限したいといふ意見を
持つてゐた。但し「總攻撃の時は例外です」

總攻撃の時期がそのころ彼等の腦裏をかきませてゐた。兩軍ともあまりポカ／＼と必要以上の弾を
打つので。

ワグスタッフ大尉はボビー・リトルにかういつた。

「あのやうに打つからいけないのだ。大きな砲弾をふんだんに打たなかつたら、もつと僕等が満足す
るやうに協定出来るんだが……」

「巨砲をブツ放すのを非難も出来ないでせう。あれでなく／＼競争なんですから」

「高價な娛樂だに向うでも言つてるだらう。丁度君が嫌な人へ手紙を書いて腹を立てさせるやうなも
のさ。翌朝それを開ける時には君がそこにゐないのだからね。娛樂といや、觀測將校だ。……併しそ
れを楽しむだけ生き長らへもしないのだから」

ワグスタッフ大尉は悲觀的調子でいつた。

歩兵の苦情は砲兵が供給するばかりでなかつた。

機關銃も塹壕白砲もいつも歩兵を惱ました。

機關銃はこのごろいくらかうるさいものと思はれ出した。

戦線内に銃座を持ちながら、それを使つたことがない。そして要害の地を離れて勝手なところで、
塹壕兵の頭の上から一齊射撃をやる（これは禁止されてゐるのだが）或は胸牆の上へ据ゑつけて、そ
こからブツ放す。こんなことでいつも歩兵線に敵の火力を集める。

「一體なぜこゝへあんなものを持つて來て、敵の火を呼ぶのだ。あんな汚ない鐵瓶は鐵瓶を置く場所
へ持つて行つたらいい、ぢやないか」

コカールがいつたのも無理のないことだ。

丁度機關銃隊のエイリングとその一黨がイヤな武器を引つぱつて、定め場所へ歸るため塹壕内を
歩いてゐたので、今使つたばかりの鐵瓶の湯氣をたぎらせつゝ、かういつた。

「みな君達のためだ」

エイリングは肩をそびやかして説明的につづけた。

「本當の機關銃の位置を敵に知られてはとりかへしがつかんからね。若し知らせたら、獨逸兵はその
時は何とも言はないで、發射した場所を手帳へつけて置く。それから、いざといふ時に、各銃座の上
へ一發づつ超巨弾を落とす。そしたら君や君の小隊はその時どこへ飛んで行くか、その上敵は押し寄せ
て來るし、如何な僕等も何とも手の下しやうがなくなるよ。あばよ！」

塹壕内で一番不人氣なものは塹壕白砲だ。彼の装置は脚のついた雨樋の一部に似てゐる。その上向

きの口に爆弾が差し込まれる。丁度棒へ挿したブラム・ブッディング（乾葡萄入りの蒸菓子）のやうに。これを胸牆越しに敵の塹壕内へ射込むと、そこで爆發して極樂往生をさせる。それからまた他の方へ運んで行く。

臼砲をあまりたび／＼同一場所から射撃することは感心出来ないが、これをどこでも場所嫌はず發砲することもよくない。といふ塹壕者の意見だ。

夜の明け際に第十小隊の塹壕を、後壁に沿うてそつと匍つて行く臼砲將校は野良犬のやうだ。

今は丁度だれにも見られないのである。それはこの小隊は戦闘準備にとりかゝり兵卒共は胸牆に沿うて堵列し、背を臼砲隊の方へ向けて居るから。

適當な地點へつくと臼砲隊は出来るだけ、こつそりと装置に取りかゝる。併しすぐに見つかつてしまふ。

小隊附少尉が駈けつける。

「誠にお氣の毒ですが、こゝは……司令官からの特別命令で、こゝは臼砲陣地に使つてはならぬのです。獨軍の塹壕からたつた七十ヤードしか離れてゐませんから」

「分つてゐます。それでこゝへ來たのです。一番大切な場所ですから」

少尉は司令官の架空的命令をベラ／＼喋りながら。

「復讐的砲火をこゝへ引きつけてはならぬ。第一この部分の胸壁が押し付されたら、全旅團に取つて由々しき大事が起きるからといふ命令です。こゝから遮弾壁を十個越すと素敵な場所があります。そこからうまく射撃出來ます。御案内しませう」

臼砲將校を口車にのせて、比較的故障のすくない——この小隊に取つては——場所へずらせてやつた。

臼砲隊は漂然として立ち去つた。そして知らず識らず人だかりの所へ迷ひ込んだ。

そこで又人形芝居師のやうな厚かましい顔で、彼の不評判な餘興に取りかゝらうとした。

ところが彼が突き出された相手は、少尉とは違つてアッサリたゞきつめた。相手はケンプ少佐であつたから。

少佐は朝早くから上機嫌だつたことは滅多にない人だ。

野戰將校といふものは外交辭令などを用ふるものでない。

「不可ン、オイ／＼不可ン」

それだけであつた。臼砲將校は苦い顔をした。

ケンプ少佐はにく／＼しげに言葉を吐いた。

「あつちへ行け！ いやな肝臓色の太砲をあつちへ持つて行け、焼いてしまへ、土の中へ埋めてしま

へ、喰つてしまへ。とに角こ、はいかん、あつちへ引つばつて行け」
白砲隊はがつかりしてそこを立ち去つた。そしてこんどは伍長だけが擔當してゐる塹壕を見出したので、幾分地位のある將校がやつて來ない先きに、白砲將校はいち早く胸墻越しに三發を敵の塹壕内へ打ち込んだ。

そして傍若無人に彼の塹壕小屋へ引き揚げた。
何しろ、仲間外れの太砲方だ。

15 喜劇的野黨

樂しみは「眠ること」と「食ふこと」と「讀むこと」にある。

中にも睡眠が一番樂しい。併し、滅多に安眠が出來ぬ。一回一二時間以上眠りを取ることが極めて稀である。

どんな不良な境遇——濕つばい土地であらうと、狭苦しい所だらうと騒がしい中だらうと、數日間脱いだことのない着物や靴を穿いたまゝでも眠ることの出來るやうに馴れてゐる。

眠る時に時間を空費しないやうな貴い能力を獲るものだ。

食物についてとき／＼文句をいふのは、故郷の人がサヴィ・ホテルやロックハーツ・ホテルの食事を愚圖ると同じことだ。文句をいふのは英國人の癖だ。しかし、満腹の時には兵站部の手並みを賞め立てる。

獻立の變化は、交通壕が砲火より免かれてゐるや否や、現在の場所による炊事能力、背後の神祕な勢力によつて變つて來る。

焚火は許されない。煙はミニヤその親戚のものに正確な目標を與へる。でも、一二の木片の上で水筒の沸き方の早いこと、貴いトミー・クッカー（飯盒）は一フロリンを奮發する人のために出來てゐる。

時々コークスの割當にも預る。罐詰、ビスケット、チーズ、水（鹽化石灰を多分に含む）で生活してゐる。

水は揮發油罐——舊友シエル及びブラツツ會社の——の何百もの中へ入れて運ぶ。故郷の自動車持ちの人は揮發油罐の少ないので困つてゐるだらう。

ふだんは温かい濃い茶をたくさん貰へる。パンは確かに手に入る。鹽豚肉とジャムの配當も大抵間違ひない。

とき／＼糧食隊が眞夜中泥の中をへト／＼になつて到着する。そして破れかけた袋を放り出す時、

中から罐詰のバター、コンデンス・ミルク、乾葡萄、罐詰のシチウなどが現はれる。見るだけでも眼の正月だ。

マックルウェーム卒は自分の割前をかき集めて自分の寢床へ引つ込みウンとたべる。

第三には読むことの楽しみである。

手紙は食料品と一しよに夜の間につく。大隊の郵便だけでも毎日八袋か十袋にもなる。これだけでも野戦郵便局の骨折が想像される。手紙も小包も新聞もある。手紙はどうかするとなくなり易い。手紙は受信人以外何の感動も興味もないが、小包になると、個性が現はれる。小包には形も大きさもまちくである。大抵は包装が悪い。もとはメチャクの包みであつたが、今ではどうやらかうやら立派になつた。

母らしい節約と女らしい浪費の記念物としての禪色の包紙であるもの、中から靴下や、煙草や、チョコレートや石鹼や油揚菓子、など雑多なものを引き出さうとしてゐる短袴の遠流者を見るのはいたましき限りである。

それから新聞だが、彼等は論説から始めて廣告も飛ばさないで通讀する。一讀すると、また初めから讀みかへす。

新聞は三つの目的に使はれる。第一は戦争はどう進展してゐるか——戦地の兵隊共には何にもわか

らない——について知ることが出来る。

第二には時間潰しに持つて來いだ。

第三には話題の種になる。國內政治の趨勢をたどりつゝ議論する材料になる。そしてアキル・ベチボイス大尉に紹介することも出来る。

アキル・ベチボイスは彼の本名ではない。彼の所屬は佛蘭西軍中にも有名な聯隊で、彼は連絡將校として聯合軍間の重要な任務に服してゐる。従つて堪能な語學者である。

彼は英國の諸制度の熱心な研究者だが、その制度の複雑なことには屢々なやまされてゐる。

そこで、彼は己れの見聞を廣くするためワグスタッフ大尉のやうな人に近づくやうに努めてゐる。

A中隊の舍營地の賓客たるアキルがアルミニウムの茶碗から泡立つウイスキーを飲みながら、その日のニュースを議論してゐる。

「あなたは故國の人達が戦争のことを眞剣に憂へてゐると思ひますか？」

アキルがかうたづねた。(アキルは英國新聞はどれでも類別なく讀んでゐる)

「餘り眞剣に新聞を讀み過ぎるので、政府は彼等を元氣づけなけりやならぬと思つてゐるほどです。あまり戦況がわかりすぎるので」

「わけは？」（アキルが丁寧）

ワグスタッフは三日遅れのロンドンの新聞を取り上げた。そして議會だよりの抜萃を讀んだ。これには舉國一致内閣成立以來議會の反對黨連中の喜劇役者一座のやうな不眞面目さを仰々しく書いてある。

「國を危くする、それ等の暗殺者——それ等の阿呆な奴は一體誰なんですか？」

アキル・ベチボイスがたづねた。

「誰か知りません。彼等も神の子です。戦前は誰も彼等のことを話したこともない無名の人です。彼等は賣名の奴等です」

「彼を銃殺すべしです」

自由主義で育つた共和主義者ベチボイスがいつた。

「そりやいけない。そこに君につかめない英國政治家氣質のデリケートな點があるのです。反對黨の者でもすて、置くといふところに味があるのです。僕等の内閣はまだ蠅がたかるまでに腐つちやるません」

「蠅？」

「ウン蠅ですよ。閣員の活動が敏捷なので蠅のとまるひまがないのです。」

「あなた達の大臣は活動家ですねえ。（アキルはわかつたやうな顔をして）頭腦の上では彼等老紳士はダウニー——名うての集りだと思ひます」

アキルは大臣町（ダウニング）と名うて（ダウニーと音が似てゐたから）について霧のやうなことを吹きながら、うなづいた。

「彼等反對黨が内閣を組織すると三週間も後には全國で愚癡をこぼすに極まつてゐます」

「愚癡をこぼすグラウズですか？」

（愚癡のグラウズと、鳥のグラウズと似てゐるので）

「止せ！ ワッガア！（ブレッキー大尉が差出口をして）政府が若し戦争が勝味の方へ向はないと國民が舉國一致内閣を信任しなくなるよ」

アキルが微笑した。

「その先を話してくれ給へ、ワグスタッフ君」

ワグスタッフは言葉をつづけた。

「若し政府が反對黨に讓歩し、新しい塹壕（内閣）を堅固にする機會を半分でも見出したなら、彼等は異分子を追ひ出してもいゝと決心したのです」

「結構ですわね」

アキルが賛成した。居合すものはワグスタッフが政治上に見識を持つてゐるので、傾聴してゐる。「ところが、この際は反對黨が全國に悪い印象を興へるのを妨げるのが第一の急務であつて、國民に餘り戦争の實際を考へさせないやうにしよう、それがため、チャラッポコな喜劇的野黨を作らうと考へたのです。喜劇的野黨は國民を笑はせてゐればいゝのです。さうすれば、政府のことなんか考へるひまがない。戦争をつゞけて行くことが出来るといふので、ストランドの通りへ出懸けて寄席藝人の一座を残らず買収したといふわけです。つまり全國的に戦争の終局まで國民を戦争熱に浮かされたいやうに反對黨議員を買収しようといふわけです。政府はうまくその仕事を仕了るために随分金も入るでせう。そして喜劇的新聞の持主も買収して、一座の下で働かせます。この計畫はうまく中れば、非常な人氣を得るでせう」

「さういはれると私はもう何も言ふこともするともなくなります。ねえ。ワグスタッフ君」

「ハハハ」

「併しあなたのいふことはどうも信用出来ないやうです」

「僕だつて間違つてゐるかも知れないのです。併し、これが現状に對する僕の解釋です。とにかくアキル君、私の説は既知の事實に符合することがわかるでせう」

そこへブレッキー大尉が口を出した。

「若しランカッシュが獨軍によつて占領されたことが、今のリール地方の如くであつたら、政治的見解は全國的に平均して、喜劇野黨を照明するフット・ライトもいらなくなるよ」

16 いとしき妻よ

故郷から手紙を受け取る上に、兵隊共は故郷への手紙を書く。

書かれた手紙は神秘的な検閲係のもとへ連れて行かれる。

検閲係は大して神秘的な組織でもない。多數の他の高官のする如く、その仕事の大部分を出来るだけ下級の者に任せ、氣長な雑役婦たる中隊附將校に代理させてしまふ。

ポビー・リトルのあとに尾いて彼の塹壕小屋に、午後の三時と六時との間に這入つて見たまへ。彼の室（恰好から、臭いことから、犬小屋同様だ）の床には小隊軍曹が検閲を受けるために、預けて行つた手紙の一束が置かれてある。

これをリトルが讀まなくてはならぬ。（いやなことだが）それから、揃へなくてはならぬ（一層いやなことだ）封筒に將校がサインをしなくてはならぬ。そして本部へ廻送しなくてはならぬ。こゝでお馴染の赤三角のスタンプを捺して兵站地へ送られる。兵站地では本當の検閲部——この仕事のため

に月給をもらつてゐる人によつて細かに調査されることになつてゐる。それからやつと宛名の所へ發送せられる。

ボビー・リトルは流弾に中らぬやうに小屋の中に足を引き込んで、彼の仕事を始めた。

手紙の束は三つに區分してある。第一部は葉書で、これは祕密が誰にも見えるやうに書いてあるから手数がかゝらない。一通り目を通せば十分だ。その中には英國陸軍省發行のものも五六種あつてそれ等は無筆者のために工夫されてあるので、——こんなものを女にでも出したら女は何といふだらう——裏面に次の文句が印刷してある。

無事消光罷在候

入院致候

病氣に罹り申候

負傷致候

御書面

日附電報

小包

も經過順調に御座候
不日除隊致さるべく候

受取申候

取急ぎ御返事申上候

近頃

久しく

御便り無之候

感情ばかりあつて手の動かない人は、他人なり、又自分なりで、右の文句の中から虚偽とか、あまりおどかしすぎると思ふ文句を消して、自分の名を書いて出せばいゝのである。この葉書には他の文句を書き入れてはならぬことになつてゐる。ある男が小包受取の文句へ「存ぜず候」と鉛筆で書いてあつたので、リトルはわきへのけて發信者に返すことにした。

第二部はフランスの繪葉書である。その多くは兵隊の繪である。モデル式に立つ兵隊、國際的握手をしてゐる兵隊、胸もあらはに美裝せる女のまはりにあつまつて「我國は救はれん」と高唱せる兵隊など。

その女の繪葉書（女優かダンサーだらう）それにオグ卒はかう書いた。

「親愛なるリヂー様、この葉書が無事なる貴姉を見出すこと、恰も無事なる私の許を離れし如くならんことを祈ります。佛國繪葉書一葉御送り申上ます。佛文字は「佛國女皇萬歲

といふ意味です」

(佛蘭西にも女皇があると思つてゐる。繪葉書の女を女皇と思つてゐるらしい)

第三部は一定の緑色封筒から成つてゐる。(軍から支給される) これ等の手紙の發信人は紙片に印刷した證明書に自署してゐる。

「この封筒の内容は、個人的、家族的の事柄以外には何等言及することなきを證す」

購讀者百萬を突破する某ロンドン週刊雜誌主筆(個人的、家族的性質の手紙の受取人として妙に不適當な)宛の厚い手紙をわきのけリトルは「若し捕獲さるゝか、發表さるれば敵のために有利となる」材料の有無を發見する仕事に取りかゝつた。

他人の手紙をのぞき込むことは愉快な仕事ではないが、リトルは臆病ながら發信人の十分な諒解の下にしてゐるのだといふ意識で幾分安んじてゐる。書いてゐる人は書いてならないことは知つてゐる筈だ。

ボビー・リトルの部下の兵隊は彼の嚴格な檢分に對し、何等リトルに迷惑を及ぼすやうなことをしなかつた。兵隊の多くの者は戀物語を書く時にも、最も個人的のゴタ／＼に身を引き入れた場合にも極めて率直に書いた。

實際彼等は公式の讀者のあることを喜ぶやうに思はれた。

中には砲兵の所謂「間接射撃」によつて目上の人に忠言や非難を傳へるためこの機會を喜んで利用したのもある。

ダンシン卒はこんなことを書いた。

「私共は最近三週間少しも給料を受取り申さず候。併しその金錢の行方は如何になりしかを將校方は御存知あるや否やを氣遣ひ申候」

凡ての罰金と差引金とはこれを取り立てた將校の懐に入るものとキツチナア軍某聯隊のすべての兵隊は確信してゐる。

樂天家のホッダ卒はかう書いてゐる。

「將校のすべては僕達の手紙を一讀さるれば今後僕達の取扱上につきて能く理解さるゝことと存じ候」

兵隊共の特長は素敵に露骨なことだ。例へばコッシ卒の如き木石といふほどでもないが、至つて地

道な質で、外面上雑巾か何かのやうに不燃焼なものの如くに見せかけて、實はとてもすごい奴で、四つの並行的戀物語を所有してゐることがわかつた。

第一の女は彼の郷里コウトリッヂに住み、第二の女はサウス・ケンシントンに勤め、第三の女はケルビン・サイドに賣り子となり、第四の女はバンブシヤで冬營中にこの最も醜い蠟燭の火の中に飛び込んだのである。

コッシ卒は彼等の女に毎週一回否時には一回以上も熱心に手紙を書いた。

ボビー・リトルは彼が繰返しく寫眞を所望させることや、生涯かはらぬ愛情をささげると、感傷的に言ひ放つた文句を飽きくするほど讀まされて、思ひもよらぬ巧言多感の若者コッシが呪はしくなつた。

併し、コッシの手紙を見ることは彼に一縷のある樂しみを齎さぬでもなかつた。

「では是非お聞かせ下さい、クリシーさん」

コッシはサウス・ケンシントンの女に宛て、書いてゐる。

「牛乳配達人と結婚する約束が出来たつて？」

「有難い、助かる！ とリトルは敬虔的にさゝやいた」

「いや、クリシーさん、氣にしなくてもいいですよ。僕は何とも思つちやゐないから」

「嫌な奴だな、チェツ糞！ リトルは註釋をつけた」

「今までは友達として交際して來たのですもの、遠慮しないで結婚して下さい」

（諛つきめが）

ボビー・リトルは浮氣なクリシーがその郵便區から引き下がつたので、（コッシとの手紙の往復がなくなつたから）リトルの毎日の骨折が實質的に輕減したことを有難く思ひながら、手紙を一つ一つ調べて行つた。

大抵のものはお定期文句で始まつてゐる。

「寸楮呈上仕候、御機嫌如何に候哉」

どれもこれも鉛筆で書いてゐる。よく尖つてゐない鉛筆でボク／＼と。

×が至るところに書いてある。（キッスをしてといふ意味で）封筒の封じ目にA・W・A・Kといふ不思議な符號が書いてある。「キッスで封じた」といふ意味だが、これを封じたのは發信人でなく検閲官であることを思ひ合はせてみるとたよりないことだ。

大抵の手紙は小包を受取つたことの通知で戰況の大要を用心深く書いてゐる。

「私共は戰爭に關する報告を禁ぜられ居り候も、たゞ目下塹壕生活をなしつつあること

申上候。私共は壯健にて鉛毒一服用したるもの多からず候」

地名の記入を禁ぜられてゐることは彼等に心もとないことだらう。

許されたとすると、また面白い發音をしたにちがひない。彼等の發音は何等規則に寄つたものではない、我流のメチャ／＼の發音だ。アーマンテールをアルメンティアスといったやうに、すましたものだ。

筆者達が苦心をする點は、手紙の終りを上品に結ぶことであるらしい。

「もはや御通知申上べきこと無之候まゝこれにて擱筆致すべく候」

がおきまり文句である。

手練手管を使つたことの少いパーク卒は最も熱烈な戀文を結ぶに、

「さらばケートさん、これにて筆を擱きます。もう一人の女に手紙を書かなければなりませんから」
マックルウェーム卒にとつては作文は少しの困難でも面倒でもなかつた。
彼はキビ／＼した達意の文體でこんなことを書いたのもある。

「親愛なる妻よ。次回の郵便爲替を更に増額してくれ。爆彈(卵子)の一つも餘計に食はれるから……汝のいとしき良人ジャス・マックルウェーム、第七四〇七七號」

多種多様な手紙の特徴の中には何等微笑する氣持の少しも起らないものさへある。過ぎ去つた日になつかしむものもある。子供等の健康をやさしくたづねるものもある。心配してゐる妻や母に、近代戰爭の危険は有名無實だと斷言してやるものもある。

法螺吹きもなく、謙つきもなく、不平も少ない。だれもだれも心配を和げたいといふ希望が一つばいで、「僕等は丈夫です」「僕等は愉快です」「戦場も堂々たる生活です」といつたやうなことを繰り返してゐる。

マックスネーブ見習伍長の涙ぐましい言葉を聞き給へ。

「母上様、小包は確かに受け取りました。御心盡しは感謝に堪へません。戦場では最も喜ばれる品です。併し、母上様、もうお送り下さるな、郵税一志といふのを見たこともありません。これは母上の御手許で御都合出来かねることを御察しします……」

小包の郵税を調べる手数を吝まぬ將校が何人あらう？ マックスネープはあまり貧困であつた。詐らざる家庭的情愛が紙外に溢れそゞるに涙を誘ふ。

「それでは妻よ。これはあまり貧弱な手紙だが、けふはいつもの草色の官用封筒が一つも貰へなかつたから、この次ぎに貰つて又詳しくかいて出さう」

ポビー・リトルはもう以上細かい調査をしないで封をして署名してしまつた。

17 皇太子殿下

暗くジメ／＼した不快な朝のことである。

ブレイキー大尉は射撃塹壕の後壁に凭れながら、歩哨勤務を終へた隊の歸るのを待つてゐた。

兵隊共は二列を作つて眠むさうに、髪も梳かずに胸壁の入口を潜つて塹壕小屋に進んで休憩しようとしてゐた。

この列の最後の者はポビー・リトルで昨夜一晩中この隊を指揮してゐた。

我戦線は果樹園の隅で急に曲がつてゐる。そして安全な通路を作るため、塹壕はその後で切断されて、Aといふ字の横棒をなしてゐる。

Aの頂點は危険地帯である。獨逸兵は頂點から五十ヤードも離れてゐない。そして塹壕白砲はその胸壁を立派な射撃目標にしてゐる。

そこで、果樹園の塹壕はたゞ夜分だけ使ふことにしてゐる。そして比較的完全に造られてある代用通路がAの一方の腕から他の腕へ進みたい用心深い人達によつて用ひられてゐる。

この隊は夜間の前哨部隊でAの頂點を廻つて、ブレイキー大尉の監視を感謝しつゝ交代して來るのである。

ポビー・リトルは二條の塹壕の交叉點に立つて彼の中隊長に朝の挨拶をした。

「死傷者はなかつたか？」

「紋切型の問ひであつた。」

「ありませんでした。随分狙撃されましたが、好運でした」

「思へば可笑しな仕事だねえ」

「目覚め切らないやうな大尉は夢のやうにかういつた。」

「何がですか大尉殿！」

眠むさうだが行儀のい、リトルがたづねた。

「さやう」

大尉はパイプへ煙草をつめはじめた。そして言った。

「危険の約九割を占めて、そして實際陸軍での一番むづかしい仕事をする人は誰なんだ。……兵卒と下級將校ぢやないか。事實君と君の兵隊ぢやないか。こゝに僕が入營以來絶えず僕を苦しめてゐる問題がある。僕はこれで十九年服役してゐる。英國軍人を個人的危険より遠ざければ遠ざけるほど、その軍人に高い俸給を拂つてゐる。出征地で戦線の兵卒は一日僅か六ペンスだ。六ペンス（五十錢）のために彼は塹壕を掘り、對壕を掘り、行軍し、猛獸の如く戦つたりする。自動車運轉手さへ多分の給料をもらつて少しも危険はない。そして鬪鶏のやうな贅澤な暮しをしてゐる。陸軍糧食部隊は自動車で飛び廻つて、僕等の糧食の頭をはねたりして、それで王侯のやうな収入を得て居る。參謀將校は加俸をもらつて比較的安全的の地にある。そして論功行賞となると一番うまいことをやる。一體どうしたわけなんだ」

吐くやうに興奮して言つた。ボビー・リトルはふだんの大尉にも似ないと思ひながら、慰めるやうに、リトルはリトルらしくいつた。

「今に參謀將校も塹壕へ来て一しよになりますよ」

ブレッキーはパイプに火をつけた——もうすつかり夜があけた——大尉は馬鹿に考へ込んでゐる。「さうだ、參謀將校が塹壕へ殺倒して来るのを見たことはないが（彼等も来てもし、善なんだが）來ないからといつて文句も言へない。事實若しそんな立派なことをなさる人に會つたら、僕はいふよ、そこをお通りになる大人は軍人ですね、と、そして僕は彼に脱帽して敬禮するよ」

「用意！ 來た來た、注目！」

ボビー・リトルがいつた。

（彼等はまた塹壕の交叉點で立つてゐた）

見ると、二人の參謀將校が果樹園の塹壕に見えた。彼等はAの頂點から下りて來た。——崩れた土囊の間を指しつゝ、壊れた胸壁の裂目を避けるため低くかゞみながら——下りて來た。

太陽は丁度獨逸軍塹壕の後から上がつて來た。

一人の將校は肥つた中年の人だ。彼は反り身になつて歩いた。

彼の連れは瘦せ形の金髪で紛ふことなき若者であつた。何度か彼は肩越しに見て彼の年長者を勵ますやうに見て微笑んだ。

二人は入口から塹壕幹線の中へ消えて行つた。そしてホット息して背延びをした。

若い方の將校——中尉であつた——はブレッキー大尉を見て、眞面目に嚴格に敬禮して、踵を曲げ

て連れの方へ行つた。

プレーキ―大尉は約束のやうに脱帽しなかつた。その代り不意に棒のやうにキチンと不動の姿勢を取つて答禮した。瘦せた子供のやうな姿が遮壁の蔭に見えなくなるまで舉手をつゞけてゐた。それは英國皇太子殿下であつた。

18 蘇 國 萬 歲

この戦争が終つて論功行賞が相當な時機に行はれた時、塹壕の蒸暑いところから程近い後方にある蘇國風の名を與へた古い佛蘭西の町に對して特別の賞與を與へなくてはなるまい。

この都會も砲撃彈雨を浴びたことは、そのこはれた土塀や、メチャ／＼になつた窓が、證據立てゝある。

併し、店はどの店も戸を開いてゐる。その上この町はこの地方にある唯一の繁華な所であり、この附近の舍營地よりの註文を獨占してゐる。

店の主人達は物價を目立つほど値上げしたりしない。その勇氣と公平な商賣振りとで、兵隊共からひどく最眞にされた。

この町は地方的巡禮地メッカとなり。ひまな午後と、一二フランを持つ英軍の兵隊共は數哩の周圍からみなこの町へ集まつて來た。炊事主任は炊事係を送つた。その商賣は恐ろしく大きなものであつた。

遠き田舎の舍營に在つては食料調達は容易のことで、手に入るだけのものを取つて、あとは打つちやつて置けばいゝのである。

ボビー・リトルが、曾て見た田舎の舍營地の家に貼りつけてあつたビラは佛國田舎の商品を簡單に言ひ表はしたものであつた。

この處
喫烟所
ビール
葡萄酒(赤色)
コーヒー
あり
鶏卵
あり

併し町では買物もずつと範圍が廣くなる。

言葉にかけては決して困つたことのないロンドン兒の特質を具へてゐる生粹のコクニー(ロンドン

兒)のゴッファン軍曹が、將校食堂の飲料を買ふために食料品店に現はれた時の腕前を見給へ。

「お早よう、バンク・ハーストさん」

肥つたお神さんに愉快さうに話しかけた。おしやべりの佛蘭西の女に對して、彼はいつも自國の女權擴張論者バンク・ハーストの名を奉つてゐる。

佛蘭西にはバンク・ハーストの多きことよ。

「お早うございます。伍長さん何御入用？」

お神さんは軍曹の前にニコくした顔を見せた。

軍曹は伍長に一段階級を下げられたことを不問にした。

彼はうまく佛蘭西語が聞きとれない。自分では流暢？ に話すが、相手に通ずるかは疑問である。

「い、夢でもごらんになつて？ オヤけふはとてもはれ々しいお顔よ。うれしいおたよりでもあつて？ ……」

軍曹は手を上げていつた。

「お神さんストップ！ 一寸の間ガス・メートルの上から手を離して下さい。さうしやべられちや買物は出来ませんや。一寸そのひまに物を一言言はせて下さい、エート私の欲しいものは？」

「何です？ さあサッサ〜とおつしやい。ホ、」

「エート(不完全な佛蘭西語で)白葡萄酒一本、赤葡萄酒二本、蠟燭六本、般若湯一本、判りますか？」
微笑してゐるお神さんには不思議にも軍曹のいふことがわかつたと見え、白葡萄酒、赤葡萄酒、蠟燭、ベネディクト・リクイストとを出した。(軍曹は葡萄酒の名前をいつもレットルの一番大きな字で呼んでゐる)

「合はせて？」

お神さんは佛蘭西の数を組み立て、あると見え、短かいSやSKの發音がついた。それが軍曹の耳にはソソソソと響くので、軍曹は二十フランの紙幣を出して臺の上へ置いた。

「これでとつて下さい！」

軍曹は鷹揚にいつた。

彼は剩錢を受け取つて大いにわかつたやうな顔をしてかぞへた。

お神さんは早々にほかの商品をすゝめた。

「これはいかゞです。綺麗でせう、お買ひ下さい、水々してゐるぢやありませんか……」

それが丁度、「若し悪人、その爲せる悪を離れて律法と公義を行はゞ、その靈魂を生かしむるを得ん」といふ朝の祈禱文を口ずさむことに馴れてゐる副牧師のやうにいつた。

ゴッファンが高く手を擧げて叫んだ。

「もう澤山！ 左様なら」

彼はドシンと踏み出して食堂用馬車に飛び乗った。

このあひだに二三軒離れた家に一群の將校がカフェー「地球」の椅子に腰を下ろしてゐた。

この土地にはカフェーが苺のやうに多いことは佛蘭西の他の地方と變りない。そしてとても酔ふことの出来ぬビールを勇ましく飲んでゐる英軍の兵隊でいつも一つばいにあふれてゐる。

併しカフェー「地球」の主人は利巧者で「將校の外お断り」といふ札を彼の家にブラ下げ、選擇した人だけのお得意で、その利益が十倍にもなつた。

出征軍の各方面のものがこの大理石を貼つたテーブルのまはりに集まつた。この邊は英國軍隊でぎつしりつまつて居り、まだくこれからもつと集まつて来る見込であつた。

驚共はこゝ——戰鬪線の尖端に集まつて来るので噂が次から次へと忙しい。

總攻撃がいつあるか、といふことは彼等の頭の中を強く支配してゐた。

前線十萬の代表者がこのカフェーに集まつてゐる。それは全蘇國軍隊がみなこの近くにゐるから。

蘇國風のダレンガ軍帽の外に、無数の扁平な中折帽もある。正規歩兵聯隊（第一、第二といふ番號のついた）や郷土軍や、砲兵や工兵も集まつてゐる。

軍糧食部隊が大勢でやつて來た。自動車で田舎道を駆けずり廻つたので枯渴した體力を回復するた

めに。

軍衛生隊は食料品の純不純を検査するために。

參謀將校すら、骨の折れる仕事？ からしばし離れて、このカフェーに來てゐることは赤い參謀徽

章が證明してゐる。

テーブルの仲間入りをした者の中にケンブ少佐もブレイキー大尉もある。彼等はエイリングやポビ

ト・リトルやワデルを連れて來てゐる。

この大隊はきのふ塹壕より出て來て初めてこの町の舍營地へ入つたのである。

乾草棚や洗濯場はボンヤリ過去の舍營の日の思ひ出となつた。

彼等は今ほんたうの家に住み、ほんたうのベッドに入り、中には立派なシーツのかゝつたベッドに寝てゐる。

この群の中へ突然入つて來たのは休暇から歸つて來たワグスタッフ大尉であつた。

「やあ、ワグスタッフ大尉が叫んだのか？」

ブレイキー大尉が叫んだ。

「ヤア！ 僕はきのふの午食——ところもあらうにサヴォイ・ホテルの大食堂で呼戻しの電報を貰つたよ。歸省中の者はみな呼び返されたのだ。そこで僕達は鯛のやうに連絡船につめ込まれて歸つて來

たのさ。オイ、ボーイ、黒ビールをくれ！」

「ロンドンの様子はどんなでしたか、みんなに話して下さい」

エイリングがなつかしさにたづねた。

彼等がこゝへ来てからもう五ヶ月たつぶりになる。賜暇歸省が非常な好評の裡に開かれたのは、たつた二週間前のことであつた。ところが一二日前に中止されてしまつた。ワグスタッフはその祝福された門をすべり出た仕合せな少数者の一人であつたのだ。

彼はビールをなめながら、こんな話をした。

「ロンドンは大したかはりはないよ。獨逸の飛行船が飛んで來たりするので少しざわついてゐるだけだ。市民は街燈を消したりしたが別に何ともなかつた。飛行船はおどかしにブー／＼いつてゐるだけだよ。いくらか爆弾も落しはしたがね。田舎の方は軍隊で一杯さ。將校は皆大佐か中佐でウヨ／＼してゐる。内地の方がこちらより進級が早いやうだよ」

「コップの中へ顔を埋めるやうに飲み干した。」

「一般に國民の態度はどうです」

「ワデルがたづねた。」

「何がかい」

「戦争に對する國民の覺悟です」

「さうさなあ、出征軍人の身内はふさぎ込んでゐるよ。そりや當然でもあるがね。大抵死んだのだから。どうも僕等の損害はどうやら戦地よりも國內の方が目立つて見えるやうだ。僕が戦地は無事平穩だの、軍隊はありすぎるほどあるの、喜劇的代議士に出張してもらつて僕等を鼓舞してもらふ必要はない、だのと話したら國元の者共はビックリしてゐたよ。どうも國許の人達は新聞を讀みすぎるよ。現在ロンドンの新聞は端的にいへばにぎやかに戦地の状況を書きすぎるよ。尤もその背後には下劣な政治上の詐術もあらうとは思ふがね。お蔭でベルリンの人達には全體の様子がハッキリ判るやうだ。立派な御馳走をベルリンの人にたべさせてゐるやうなものさ」

「何か厄介な問題でも起きてゐたかい」

「ケンブ少佐は少佐らしい間を出した。」

「厄介なことといへば、多分徴兵問題でせう。私等はなぜ彼等がそんな小さいことに頭を悩ましてゐるかと思ひます。キツチナアがやりたいと思つたらやらせたらいいでせう。やりたくなければやらなだけでのことです。賛成派、不賛成派どちらもどちらです。偉大な英國人の首をとつつかまへて、ガラクタの中へ突つ込んでゐるやうなものです。若し徴兵賛成者が尋常に勝負したら、誰でも自然に味方になるでせうが、彼等はその豫備行爲として政府を顛覆するために、自分が總辭職をするかも知れ

ません。彼等は西部戦場の英軍は一二小隊に減つたの、一日一發の砲弾しか打てないのと公言して、徴兵問題を支持してゐるやうです。これが私の聞き込んだことです」

「反對側は何といつてゐるのかい」

「彼等はたゞ單純な筋の議論です。もし英國の勞働者の神聖な個人的自由——勞働者といつてもわれわれのことではない。我々は威風凛々たる軍人寡頭政治家であつて、勞働者といふのはストライキをする人をいふのだ——軍人寡頭政治家によつて干渉されるなら革命となるだらう。といつてゐるのです。それだけです。彼等はめちやをいつてゐるのです。ことに新聞が……」

「併し」

熱心な求智者のワデルがたづねた。

「この議論に對する一般の態度はどうです？」

ワグスタッフは苦笑しながら、それに答へた。

「愛すべきは國民だ。いつもの通りで何の變哲もない。徴兵制度にも出征軍人にも氣をもんぢやゐないよ。現在の話題といへばチャアリー・チャップリンだよ」

「チャアリー・チャップリン！」

五六人のものが一樣に叫んだ。

「チャアリー・チャップリンで誰だい！ ワッガア君！」

「僕もチャアリー・チャップリンなるものを見たことないのだ。僕が知つてゐるといふのはロンドンのどこへ行つてもキット彼の肖像にブツつかると、話といふと結局そこへ落ちるからだ。寄席で彼の名が出る、見物は百雷の一時に落ちたやうな賞讃の辭を呈する。僕の行つたある寄席ではチャップリンの服装した二十名の若者が同時に舞臺へ現はれ、ベコくの山高帽、胸の迫つた上衣、ダブくのツボン、チョコナンと鼻の下へ小さい髻をつけ、竹の鞭を握つて道化たことをやつたよ」

「一體何者だ」

「僕にも何のことかわからないのさ。この本人を捜さうと随分やつてみたが、僕がその間ひを人々に向けると、ビククリして今時チャップリンを知らん奴があるかといつた顔をするのだ。僕はきまり悪い思ひをしたよ。僕は、彼は砲弾か何かを作るために政府が任命した、恐ろしい親分肌の人でないかと、ボンヤリ考へてゐるのさ。兎に角大英國は徴兵制度なんてケチなことゝ氣をもむよりもズット多くチャアリー・チャップリンに心を奪はれてゐる。彼は何者なんか僕も知りたいのだ。が人にも聞かれない始末さ。それを聞けばあまり非國民的で國のことなんぞ忘れてゐるやうにいふから」

「それは……」

ボビー・リトルが口を出した。

「それは活動のスターです。私の従卒は彼の大の崇拜家です。屋根から轉がり落ちたり、自動車に轢かれながら逃げたりする……」

「消火栓で警官をこまらしたりする……ウム／＼判つた。どういふ型の人間といふことが……」
ワグスタッフが言つた。

ケンブ少佐は、かるく溜息をした。コップを机に置き腰を上げながら「僕等は大國民だなあ」と満足氣に言つた。そして又いひ足した。

「僕は國の事情について少しく心配してゐたが、今ではクヨ／＼するに及ばないことがわかつた。戦争をよそにして活動役者で夢中になつてゐるやうぢや、戦争は立派に勝つよ。サア僕等は食堂へ歸らう。又いづれあとで」

一同の者が落ちついたところでワグスタッフはたづねた。

「時にこちらでせつばつまつた問題といふのは何だ。僕はまだ副官に會はないのだが……」

「間もなく副官も来るさ」

プレーキーはかういつた。

彼は肩越しにカルタをしてゐる四人の男を見やつた。彼等はたしかに中産階級のもので、愛國心に満ちた男らしい。併し憲兵隊長が署名した揭示が壁にかけてあるとほり、カフェーへ來て何もかもあ

けすけに言ふのは危険だ。スパイといふものもあるから。

「散歩に行かう」

とプレーキーがいつた。

この内二人の大尉は郊外へ通ずる木蔭の散歩路を歩いてゐた。

釣瓶落ちに暗くなつて來た。間もなく眞暗になる。

灯は發火線の附近では、大禁物だから暗い中をノソ／＼と歩かなければならなかつた。

「僕等の鐵條網の前の新塹壕は出來上がつたかい？」

ワグスタッフがたづねた。

「出來た。あれは造つた内で一番いゝものだ。師團でもひどく満足してゐたやうだ」

プレーキーは塹壕について詳しく説明した。

現在の線の直前二百ヤード前方に新塹壕を造れといふ命令が出された。そこで日が暮れると二百人の無心の勇者が下級將校に率ゐられて來て、白いテープ（宵の内に泰然自若居士——工兵隊の甲乙中尉によつて引かれた）に沿うて列を爲して、躊躇りながら、塹壕を掘りつゞけた。

彼等の前方三十ヤードのところは無数の獨逸兵の奴の好奇心に燃えた眼に面して伏姿の散兵が竝んで突撃を撃退する用意をしてゐる。

時々刻々仕事は進んだ。無言のうちに手際よく。

かういふ時にはどんなことが起きるか保證が出来ぬ。敵はこちらにも澤山あることを知つてゐるしハッキリ見ること出来る。

併し敵にも爲すべき夜業がある。そして若し彼が邪魔立をすれば、こちらの機關銃が、彼等の仕事を邪魔する。

そこでもし、こちらで、これ見よがしな事をするとか、敵を馬鹿にしたやうな事をするとか、――饒舌つたり、口笛を吹いたり、煙草を吸つたりしなければ、敵もこちらのするまゝにして、置く。

この特別な仕事も損害なしには仕上がらなかつた。この仕事はあまり重荷だつた。五六回も獨軍の機關銃が火を吹き出し、その度毎に擔架隊を呼びよせなければならなかつた。

仕事は弛みなくつゞけられてたうとうこの前進塹壕が出来上がった。兵隊は殆んど専門揃ひで、彼等は子供の時から鶴嘴やシャベルを使ひ馴れてゐた。この防禦線も多

分同じ程度に一所懸命働くだらうが、仕上げまでには二倍の日子がかゝつたらう。頑固な蘇國男兒は巨人！ 訓練された巨人のやうに立ち働いた。四晩でこの塹壕は遮弾壁と前進塹

壕と併せて出来上がつてしまつた。これを作り上げた兵隊は塹壕小屋に戻り、それから舍營地の方へ引き退がつて來た。そこで貯へた

一二フラン！ 汗水にしてやつと手に入れた奴を馬鹿にうすいビールにかへてしまつた。

故郷では同業者なる五六千の石炭工が労働の權威と英國民の名聲を擧ぐるため、賃金増加を要求してストライキをやつた。この要求には意氣地のない政府が屈服することを彼等はよく知つてゐる。

これは世界の人が経験した一番不思議な對照で戦争の傍ストライキをやつてゐるといふことは滅多にあることぢやない。

併し、それはマックルウェーム卒がいつた言葉で盡きてゐる。「行儀のいい、若者がみな出征してゐるからだ」

「うまい仕事もあるものだねえ」ワグスタッフはブレイキーの話がすむとかういつた。

「して、その新塹壕は何のために使ふのか？」ブレイキーは新塹壕の目的について話した。ワグスタッフはそれが非常に興を引いたと見え、詳細

のことを聞かうとした。ブレイキーの談話の内容はこゝへは書かれない。その實質は今日ではたれも知つてゐることだが。

彼がいひ終つた時に、ワグスタッフは軽く口笛をならした。「ぢや明後日だね」

「さう順調に行けばいいが……」

もうすっかり暗くなつた。

地平線は大砲の閃光で、鮮かに明るくなつた。そして、砲聲が絶えず秋の闇を通じてゴー／＼と聞えた。

「もし、これがいよいよガタ／＼とやる時が來たら、それこそ今までにない大事件！ チャアリー・チャップリン以上の大事件だらう」

ワグスタッフがいつた。

「さうだ、もしも」

用心深いブレイキーがいつた。

「キツチナア第一聯隊に取つて驚くべき好機會だ。いよいよ我が聯隊の名聲を揚ぐる時が來た。僕等はこの機會に歴史を作らうね！ ブレイキー君」

「僕達の作るものは歴史であらうと、女の服であらうと、兎に角全力を盡さう。少くも第一中隊は……」

急にじみな蘇格蘭が二人の口からもれた。

「蘇格蘭萬歳！」

19 貧しき登場人物

「二時半です。寒い朝ですわねえ、少尉殿！」

ポビー・リトルの從卒は在來の塹壕に竝行して後に新たに作つた塹壕の中の青天井の下で不安に眠つてゐる少尉を呼び起した。

リトル少尉は起き上がり、眼を細くして夜光時計を不機嫌さうに見た。時計は從卒のいふとほりだつた。リトルは澁々「ウーム、さうか」とねむさうにいつた。

併し、從卒の次の言葉でリトルも元氣づいた。

「朝飯が出來て居ります」

總攻撃前の眞暗闇の中と、精神的緊張の中にあつて、食事はお茶と鹽豚肉一點張りで、あけても暮れてもお茶と鹽豚肉ばかりだ。

將校食堂の役をつとめる掩蓋のない塹壕へ集まつて來た、外套を着た尙僕のやうに曲んだ人達は、痙攣的な會話を取り交はし始めた。

ひつ切りなしにゴー／＼と響く砲聲によつて、一層神經的に——痙攣的になつた。

砲聲から判断すると、幾列も幾列もあるやうだ。

半哩前方の緩斜面に、砲が地上から絶えず吹き出る。そして暴風のやうに砲弾がヒュー／＼と飛んで来る。すると彼等のすぐ足許からも岩をわるやうな砲聲が響いて来る。

彼等の前面五十ヤードの生墻の中に隠してあつた砲兵隊も火蓋を切つた。

ずつと後には、もつと有力で遠距離を打つ重砲隊が——大口徑のものほど後に——竝んで、砲聲般と天地を揺がしてゐる。

砲弾は砲聲よりも早く塹壕の上を越して居る。

これ等の怪物は無限に彼方より飛來し、究極の此方に向つて飛び去る。

砲弾は今朝食を取つてゐる第一中隊の頭上を物憂さうに呻りながら飛んで行く。

マックルウエーム卒は水筒を口へ擧げながら言つた。

「あすこへウリー（巨弾）が散歩に出懸けたぞ」

彼等は今劃期的戦闘の前にあることを考へ合すと、憎らしいほど落つたものだ。

將校食卓での空氣は、戦争に對する憧れでもなく、戦死の怖れでもない。單に夙起きと、不快な環境から生じた、人に噛みつきたいやうなイラ／＼した氣分である。

「雨が降りさうだ」

ケンプ少佐がブツ／＼といつた。

丁度聯隊長が旅團からの命令を持つて來た。

「僕等は三時四十五分に出發する。噴水通りと、蘇國塹壕を登つて中央の鋸の齒の對壕（交通壕）に侵入し、そこで胸墻を越える。それから豫定のとほり半個中隊の横隊に展開してドーヴリン村を目標

としてホーヘンツォレン角面堡と八號壕とを左に見て敵に突撃するのだ」

八號壕といふのは、偉大な塵埃山で、グラスゴー、エジンバラ間の鐵道線路に沿ふ石炭山地方の到るところに見られるやうなものだ。

地圖の上ではかういつた高地を壕と呼んでゐる。石炭孔を掘つたために出來た丘だから、丘でなくて壕なんだ。工兵隊は埃棄場といつてゐる。命令にはかなくそ山といつてゐる。オッダやホググのやうなこの道の玄人は（この人達は他の人達以上當然知つてゐなくてならぬ。彼は坑夫だつたから）ピングと呼んでゐる。

こゝから二哩離れたところにはトースベリックの丘くらゐに見えるのがある。この邊にはこの丘が澤山散布してゐて、陸地測量部ではそれに一々番號をつけてゐる。フルルヤルースの方面にも澤山ある。

第八號壕は三週間前砲撃を開始して以來、我が砲兵隊の執拗な目標となつた。併し、今だに崩れも

せず、東の空に瘦せ細つた頭を敢然として聳らかしてゐる。

あの壕の上に、或は下に誰が生き長らへてゐるかどうかは別問題だ。この戦が濟まない内は第八號壕を記憶してゐる必要がある。

ホーヘンツォレン角面堡は最も眼立たぬものであるが、現在の情況からいふと最も重要な一點となつてゐる。

角面堡は獨軍の防禦線から我軍の方へ百ヤードも突出してゐる。——偉大な塹壕の岬をなして、機關銃の銃座や鐵條網の迷路が作つてあり、地面と水平か又は地下にあるので砲火で壞すことは容易でない。

角面堡は彼等に惱みの中心で、對壕地雷、爆彈隊の出發點である。この偉大な堡壘は建設者たるホーヘンツォレン聯隊の名がつけてある。

堡壘へは二條の交通壕で連絡をつけてある。英軍は最も尊敬する王朝ホーヘンツォレン家に對し、この二條の交通壕を大ウケリ小ウケリと命名した。

曉はやつと明けた。雨雲が低く垂れて來た。

聯隊は噴水通と呼ぶ塹壕の中で勢揃ひを始めた。そしてその塹壕に沿つて蛇形に前進して、一哩隔つた胸牆の上に現はれ、そこで横隊に開くのである。

前進命令が下つた。そこで蛇形隊はクネクと歩いた。

彼等の前方には師團の數個大隊が前進してゐた。(ボビー・リトルは個人的に侮辱と思つた)が彼等は望むだけの戦闘を残らず經驗し得ると保證された。前に行く隊があるからといつて悲觀するに當らぬ、侮辱と感ずるに及ばぬ、仕ただけ戦が出来るといはれ、ボビー・リトルは安心した。

目下の情況は、我軍の砲兵が猛烈に叩きつけてゐるので、攻撃軍は獨軍の第一線で反抗さるゝことは極めて尠ない、或は全く反抗されないらしく見えた。或は第二線に進んでも同様かも知れぬ。

ワグスタッフ大尉はリトル少尉に説明的にいひ聞かせた。

「本當の戦らしい戦が始まらない内に師團はある程の隊形で獨軍の第三防禦線へ達するだらう。だから出發順がこの行列の第一番であつても第五十番であつても、入り代り立ち替りして、どれが第一線へ出るかわからぬ」

ワグスタッフ大尉は豫言者のやうに言つた。

かくて彼等は前進した。ある地點では臼砲の砲座を通りぬけた。そこには頭髪をモヤ／＼させた男が親しさに手を振つた。他の地點では丁度この時仕事を始めてゐなかつたので、この行列に背中を向けてペーコンをフライにしてゐるものもあつた。忙しさに。

その内に歩調が次第に遅くなつた。そして遂に全く止まつてしまつた。

一つの大隊が彼等の前面を横切つたのである。彼等は暫らく待たねばならなかつた。指と指をすりながらイライラしい氣持になつた。丁度ピカデリーあたりの芝居見物客がパークレー街から溢れて来る馬車で、乗つて来たタキシード止められ、我慢し切れぬのであるやうに。

「幸と暮は五時五十分までは上がらないよー」

ワグスタッフがいつた。

その内又前進を始めた。そして事件の中心に近い鋸齒對壕へ来たことがわかつた。不意に彼等はホッと安心したやうな感じが、袴々と身に迫るのを覺えた。

我軍の砲兵は砲撃を止めた。そして三日三晩目に戦場が靜かになつた。

ワグスタッフ大尉は時計を見ながらかういつた。

「砲撃をやめたのは、第一線の歩兵が胸牆を越えてゐるからだ。そして砲手は照門と照星をあげて信管をのばすために砲撃を中止したのだ。リトル！ 僕等は三十分後には立派に敵の中へ這入れるぞ」併しそれは獨りぎめなのだから間違つてゐないともいへぬ。不思議に人の氣を狂はすやうな中止があるから、——交通壕の中ではそれが何であるかを發見することは六かしい。

恐ろしい傳言が後方から傳はつて来た。最初に出た質問は恐らくキャンプ少佐が、「なぜ行進が遅れ

てゐるのか、理由を知らせ」といつたやうなものだつたらう。それが兵隊の口から口へ傳へられ（やつと着いた瞬間でも）着いた時には「申送れ、グズグズ待つてゐないやうに」といふやうな形になつてしまふだらう。併し、だれも返事する者が無い。

行列の中央あたりにゐたキャンプ少佐は怒り出した。それは、負傷兵を載せた擔架がすし詰になつてゐる塹壕の中を通つて後送されて来たからだ。

「これは不思議だ。君達看護卒はこんな所を後送して行かうとしたら、この負傷兵を殺すことになるぞ。あの向うに繃帶所へ通ずる特別に造つた道がある。パーク通りといふ名だ。僕等は上り下りの交通がこんな滅茶苦茶にして置くことは許し難い。ワデル！ 聯隊長に言つて来てくれ。これ等の人をここを通らせるのは間違つた親切だ。聯隊長に彼等を送り戻すやうにいつてくれ」

ワデルは塹壕から這ひ上がり、傳言を持つて前進しようとしたが、少佐は「指揮官は離れちやいかんから、書き付けにしてどうなるか試しにやつてみよう」といつた。

ワデルはキャンプ少佐のいつたことを書付けにして持たせてやつた。

書付の返事が来た。それによると負傷兵は一人でも部隊の先頭から後へ送つてはいけないといつて来た。負傷兵はどこかの路傍によつて收容されねばならなかつた。少佐もどうしたらいいかに苦しんだ。併しどうすることも出来なかつた。

その内又新しい打撃が来た。

「今度は何だ……まだ負傷兵が来るのか？」

その返事は喜ばしげに列を傳はつて来た。

「捕虜です。少佐殿！七十名です」

少佐は愉快さうに敏捷にキツパリと命令した。

「捕虜か、不可ン。塹壕の中を通らしちやいかん。俺の命令を傳へる、全部ひつくるめて胸墻の上へ揚げろ。護衛兵も一所に。そして地の上を歩かせろ！」

この命令は傳はつて行つた。その内に景氣のい、光景を見て彼等の心は躍つた。塹壕の彎曲した野を横ぎつて一群の人達が、漫然たる榴霰弾や流弾に追はれながら足早にやつて来た。

彼等捕虜は灰緑色の軍服を着て、扁平な輕燒パンのやうな帽子を冠つてゐる。武器も器具も持つてゐない。中には負傷してゐるものもある。

この群の前を駆けて行くのは護衛兵である。砲弾に追はれながら先頭に立つて走つてゐる。彼等は十二名の瘦形の蘇格蘭山地兵で、完全に武装してゐる。

捕虜はこの形勢を利用して遁げようの隠れようのといふ慾望は少しも現はさない。彼等の戦友との間に出来るだけ廣い空間を作り、そして出来るなら捕へた人に追ひ付かうとするのであつた。

彼等の中には微苦笑を塹壕内の攻撃兵に投げたり、手を振る機會を見出した一人は、反感を抱いてゐるマックスラッタリに向つて「オイ兄弟」と呼んだりした。

もう一人の捕虜は「この戦争はもう僕には澤山だ」と詐らざる告白をして行くものもあつた。

その後になつて、彼等攻撃部隊の前進は速くなつた。彼等が第一線に近づくに従ひ敵の榴霰弾の破片は深い塹壕ですら十分な効果を収めた。

何度か彼等は負傷兵を通してやつた。應急手当を待つために胸壁へ上げてやつた。併し何度かその手当を受けない氣の毒な負傷兵を飛び越して進んだ。

五分の後ヤット胸墻に着いた。——磐石不動の壘壁の上から用心して塹壕鏡でのぞいた。そして頂上まで土囊の階段を攀ぢ登つた。彼等は彼等の鐵條網がすべて切り去られたことや、もう一個大隊が横隊に開いて彼等の前方五十ヤードのところを前進してゐることに氣づいた。

小銃弾は空を唸つて飛んでゐる。大砲の方はまだ沈黙してゐる。今は大砲と小銃とが位置をかへてゐる。

彼等の前の平地には點々として多くの短袴の姿が妙に靜かに氣味悪く横はつてゐる。

右の方に當つて約一哩のところ二個の塔——炭坑の塔が竝んでゐるのが見える。そこはルーズ村で、そこにはもう一個の蘇格蘭師團が攻撃してゐる。更にルーズ村の右に數哩の間はドンク進

んでゐる佛軍の波又波が、滅茶々々になつた獨軍の塹壕の上に暴風雨のやうに押し寄せてゐる。

その地點で總攻撃中の總攻撃が行はれてゐるのだと察した。

こちらは出来るなら前進しなければならぬが、何より先づ第一に獨軍の部隊と砲兵を出来るだけ牽制して置く必要がある。たとへ一週間以上戦闘し、僅に自分の防禦線を維持するに止まつても、彼等は要求された大部を爲し遂げたことになるのだ。併しそれ以上のことを爲したいのだ。

彼等の右にはホーヘンツォレン角面堡がある。彼は沈黙してゐる。

彼はもはや奪取したものと云ふことがわかつた。その先き左前方に第八號壕がボンヤリ見える。

滅茶々々に毀れた砲塔で蔽はれてゐる。

右のズツと向うの低い丘の上から教會の時計のついた尖塔がのぞき出してゐる。

これが彼の目標ドーウリン村だ。

次の瞬間彼等は展開してかなくそ山の戦場に於ける貧弱な登場人物たるべく足を踏み出した。

20 今夜再び

二十四時間の後には將校の小さい一團が、廣々とした塹壕小屋に坐つてゐた。

ケンブ少佐もそこにゐた。少佐は頭を厚い板のテーブルにもたせてグッスリ寝込んでゐる。

前日の朝から食はず眠らずにゐたポビー・リトル少尉はチョコレートを嚙つておこりにかゝつたやうに顫へてゐる。彼は一日中物凄い深刻な經驗をした。

ワデル少尉は彼の向ひ側に坐つて、鐘詰から牛肉を指で引き出して無神経に呑んでゐる。

エイリング少尉は床板に寝轉んで、機械的に、彼の食糧囊より取り出した機關銃の銃前をなほしてゐる。

ワグスタッフ大尉は飯盒でコ、アを作つてゐる。彼はほかの人ほど疲れてゐないらしい。

一同は泥まみれになり、體はグシヨ濡れになつてゐる。それは夜をとほして大部分ひどい雨だつたから。

彼等はすべて食物と睡眠の缺乏とでボンヤリしてゐる。

けふは日曜の朝である。

その内ワグスタッフは彼の手製のコ、アを作り上げてアルミニウムのコップへ注いだ。そしてケンブ少佐の肩をたゝきながら、

「これを少しおやりなさい」といつた。

ガッシリしたケンブ少佐は體を大儀さうに起し、出されたコップを受け取りながら「これは有難い」

といひながら口につけた。

ケンプ少佐はあたりを見廻しながら言った。

「やあ、エイリング、君は来てゐたか、列のどの邊にゐたか？」

「中央、鋸齒塹壕への前進中大隊から離れてしまひました」

「フム、それから」

「私が機關銃を胸牆の上へ引き上げた時までにもう誰一人ゐなくなりました。併し目標を知つてゐましたから教會の塔の方へ突撃しました」

「第八號壕を通る時は怖かつたかね」

「薬を一眼頂戴しました、機關銃の縦射を、ひどかつたです」

「そりや僕等も見えてゐた。あれでシンクレアが可哀さうにやられた。君はどうした？」

「私は兵隊を一時地に伏せさせ、私もさうしました。私はあの十五分間の時ほど人間が扁平に横はれるものだと思つたことはありません。併し駄目でした。機關銃は彈の餘程上に据ゑてあつたと見え、彼は見事に第八號壕の支配者として猛威を振つて居りました。彈は私達の頭髮を梳つてすぐ下の地中にもぐり込んで行くやうな氣がしました」

「その時の君の感じは？」

「眼に見えない人が私をクスグツてゐるやうな氣がしました」

エイリングははれ上つた眼をまた、きながらいつた。

「僕もそんな感じがしたよ、それから」

「私の部下が一名やられたのか、泣き出しさうな聲が耳に入りました。私は固定標的よりは移動標的の方が彈に中る公算が多いといふ結論を發見しまして、一列になつて前進するやうに列の先頭と後尾と兩方へ傳へました。行くうちに連絡不明な交通壕にブツつかつたので、その中へ這入つて行きました。それはあの石切場へつゞいてゐるのでした」

「僕等の線から全然離れて？」

「私はハルルの方面のどこかで戦闘してゐた旅團の豫備隊となつてゐた英聯隊所屬の二中隊から教はりましたので私はあまり右の方へ寄りすぎたと思ひました。私は石切場から出て半ば右向きに進んでたうとうズツと前方に大隊が東向きに戦闘してゐるのを發見したのです。そこは敵の第三線かと思つたところですよ」

「アレー壕だよ。地圖の上で知つてゐるだらう」

「さうでした、思ひ出しました。アレー壕でした。あの時私は機關銃二挺を持つて、大隊の右翼にゐました。キリック軍曹に二挺持たせて左翼へやりました。それからあとは、少佐殿が御存じのとほり

です」

「僕はハッキリ覚えてゐない。僕はあの血醒い塹壕であのとほりギッシリつめ込まれてゐたから動き廻ることが出来なかつた。だから自分の周りに起つたことだけしか見えなかつた。君は機關銃をウツと打つたかい」

「かなりやりました。(エイリングは職業的に満足しながら) 右前面からかなり射撃しました。眼に見えるあらゆる藪や人家の表は皆梳いてしまひました。その内射撃出来なくなつたのもあります。それは銃身へ銃丸がつまつたまゝ、銃が使へなくなつたからです。夜になると、あたりは静かでした。その内たうとう次の塹壕へ退がれといふ命令が來ました」

ケンプ少佐は厚板の机を拳固で殴つた。そして怒氣を含んで呶鳴つた。

「退却! 全くさうだつた。アレー壕を奪取して一晝夜守つてから退却しろといふんだ。單に左右翼に豫備隊がないほど前進したといふ理由で……」

沈黙の暗い幕が下りた。しばらくしてワグスタッフは、思ひ出したやうに言つた。

「僕は今朝二時頃催眠瓦斯で少しやられた。大したことはなかつたが……」

「瓦斯マスクをつけなかつたのか?」

ケンプ少佐がたづねた。

「ソレといふ時にマスクのつけ方を間違へたものですから」

「で、君はどうした?」

ワグスタッフはノンキ坊のやうに、

「私は胸牆へ攀ち登つて坐つてゐました。そこが一番毒のないところらしかつたのです。とにかくこの空氣はきれいでした。回復したので下りて來ました。時に第一中隊の方面はどんなだつた? リトル君。噂は聞いたんだがほんたうでなければいゝがと思つてるんだ」

リトルは躊躇した。

「どうだつたかい?」

リトルは落ちついて話し出した。

「第一中隊は奪取したアレー壕に頑強にかじりついてゐました。その内ズツと前方で半ば左向いた方角にある孤立した塹壕を蘇國山地旅團の一部隊が守つてゐたが、その隊は非常に難戦してゐました。それは敵の砲兵の着弾が正確で、それに對壕の前端は都合よく敵の爆弾兵をたやすく對壕の中に来さすやうに出來てゐたからです。この塹壕が調子づいた攻撃部隊を誘ふやうに造られてゐたことが間違つてゐたのです。どんな部隊でもその中に長くはゐられないので、第一中隊は前進して應援せねばならなかつたのです」

リトルは胸をつまらせながら次のやうな思出話をした。

その時ブレイキー大尉は用意の命令をしてリトル少尉にふり向いた。そして言った。

「僕はむつつり屋の頑固屋の蘇國男子だが、その形勢を見ちや僕はだまつちやあられない」

次の瞬間に彼は胸壁を越えた。あとから彼の中隊がつづいた。長い列の中には、マックルウエームも重苦しげに喘ぎつゝ、用心深く、彼の靈を神の攝理に任かせてゐた。オグとホグとは肩を並べてゐた。

マックオストリッチは六歩も先きへ非常に勇ましい讚美の詩を口ずさんでゐた。

彼の後からは、鐵節革命家マックスラッタリが来た。

敵はすぐに押し寄せて来た。そして榴霰彈の破片が旺んに飛んだ。

兵隊は足許を踏みしめ、追つて行つた。

マックオストリッチは第一に仆れた。最後まで、スポーツ氣分で、彼の體を飛び越えて行く戦友に弱り行く手を振つて激勵した。

「サア、塹壕があるぞ。突撃だ！」

兵隊はもうこれ以上命令さるゝ必要はなかつた。彼等はまつしぐらに進んだ——統一のない喊聲をあげて——

直に塹壕に達する筈だつたが不意に彼等はよろめいて立ち止まつた。

ブレイキー大尉はそのあとから喘ぎながらついて来た。そして忠實な少尉をふり返つて言った。

「僕等はやられた、リトル君。あれを見給へ、あの鐵條網を」

ブレイキー大尉のいふとほり、塹壕は彼等の友人で占領されてゐるが、第一敵に使はれるやうに造られたものだ。だから、英軍突撃の方面に對して嚴重に鐵條網が張られてあつた。

ブレイキー大尉はすべてがオルダーショット士官學校の演習の日でもあるかのやうに散歩ステッキで指揮しながら、中隊に伏せをする信號をした。

「リトル！ 君も命令があるまで、動いちやいかんぞ！」

彼は銃を持つた兵隊を連れて針金の林の中へ通路を切り開きはじめた。

この時、眼に見えぬ機關銃が射撃を開始した。そして非常に勇敢なる將校にして蘇國男子の典型たるブレイキーは名譽の戦死を遂げた。

半時間後に第一中隊は彼等の彈藥をすべて使ひ盡し、尺寸の地も得られないで、大隊の他の中隊に合してしまつた。

ボビー・リトルを入れても（彼は魔術的にいのちを護られてゐた）中隊は一個小隊の兵力しかなかつた。

牛肉を食つてしまつたワデルは、「この次には僕等に何をさせようといふのだらう」と獨言のやうにいつた。

「もし、彼等が相應に考へてくれる氣があるなら、一旦後へ戻して少しは休息させてくれるがいゝ。そしてほかの師團をかはりによこしてくれてもよささうなものだ。僕等がこんどの戦團の先陣を承つて彼等のためにいやな仕事をして將卒を澤山失つた。いゝ加減に僕たちのベッドを作つてくれてもよささうなものだ」

ケンプ少佐が興奮しながら言つた。

「私も同感です」

ワグスタッフが手をあげた。併し、彼はすぐに手を下ろして、「もし、僕等の損害の程度がもう少し多ければ」と小さな聲でいつた。

「さうだ、損害といふほどでもないからね……」

ケンプ少佐は温かいココアで心地よささうに言ひつづけた。

「僕等はホーヘンツォレン角面堡を完全に奪つた。そして少くとも敵の第一線と第八號壕とを取つた。右翼ではルース村を占領したといふ噂だ。初陣としては悪くない。酷い逆襲の來ることは間違ひないが、撃退してやらう。その後僕等は更に攻撃してもつと廣く占領しよう。少くとも獨軍の奴等に

應接の邊のないやうにしてやらう。それが今度の御馳走で、僕等にあてがはれた仕事だ。獨兵共をこづき廻せ。僕等が土地を得やうが、得まいがそんなことは構ふことない。彼の豫備兵を使ひ盡さしてしまふ。その間に右翼にある佛軍が地圖の上から敵を押しつけてしまふだらう。少くともこれが僕の説き。この戦團は一週間以上同一地でつゞくだらう。負傷者にとつては氣の毒だ。もし僕等が既に獲た地區を支持しえすれば、僕等の方が勝利だ。まあベッドにつかない内にアレー壕をしつかり固めて置きたいものだ」

この時聯隊長は副官をつれて、小屋の小さい口へかゞんで這入つて來た。

彼は朝の挨拶をしてからかう言つた。

「君達が部下の兵隊に食事をさせることが出來たのを見て自分は嬉しく思ふ。糧食車をゆうべこんな遠くまで來させたのは大成功だ」

「何か新しい情況がありますか？」

ケンプ少佐がたづねた。

「敵はアレー壕を撤退したらしい。その理由はわからないが、戦をするのがイヤになつたのだらう。第八號壕の我軍が敵の左後からアレー壕を見下してゐるので敵に戦意のなくなつたのも無理はない。だれでも第八號壕を支へるものはアレー壕を支へる。併し旅團は今夜再び前進してアレー壕をもう一

度占領するのだ」

ケンブ少佐は愉快さうに、併し、あきらめた顔に、

「よし、ベッドは無期延期だ」

21 退却のしんがり

同じ日曜日、真夜中、大隊は戦闘力の少くなつたまま、で約十呎の深さの人氣のない、お化けの出さうな敵の鋸齒對壕のそばで、星あかりの下に薄い隊を組んで、長時間奮闘したきのふの戦場へ再び這入つて行つた。

アレー壕はこれとは違つて壕の深さ四呎以上で大したことはなかつた。

白聖士の胸壁はどんなに空想を凝らしても銃丸除けには役立たない。

左方では、塹壕線は他の師團の部隊でつづけられてゐる。右のほうには、我が旅團内の一つの大隊がある。

「もし今度防禦線が本當に連續して居れば、僕等は人家のやうに安全だらう。あの對壕掘りの兵は立派な者だ。彼等は自分等の前面のすべてへ鐵條網を作つてくれたよ」

19 貧しき登場人物

「二時半です。寒い朝ですなあ、少尉殿！」

ポビー・リトルの從卒は在來の塹壕に並行して後に新たに作つた塹壕の中の青天井の下で不安に眠つてゐる少尉を呼び起した。

リトル少尉は起き上がり、眼を細くして夜光時計を不機嫌さうに見た。時計は從卒のいふとほりだつた。リトルは溢々「ウーム、さうか」とねむさうにいつた。

併し、從卒の次の言葉でリトルも元氣づいた。

「朝飯が出来て居ります」

總攻撃前の眞暗闇の中と、精神的緊張の中にあつて、食事はお茶と鹽豚肉一點張りで、あけても暮れてもお茶と鹽豚肉ばかりだ。

將校食堂の役をつとめる掩蓋のない塹壕へ集まつて來た、外套を着た尙僕のやうに曲んだ人達は、瘴氣的な會話を取り交はし始めた。

ひつ切りなしにゴークと響く砲聲によつて、一層神經的に——瘴氣的になつた。

砲聲から判断すると、幾列も幾列もあるやうだ。

半哩前方の緩斜面に砲が地上から絶えず吹き出る。そして暴風のやうに砲弾がヒュー／＼と飛んで来る。すると彼等のすぐ足許からも岩をわるやうな砲聲が響いて来る。

彼等の前面五十ヤードの生墻の中に隠してあつた砲兵隊も火蓋を切つた。

ずつと後には、もつと有力で遠距離を打つ重砲隊が——大口徑のものほど後に——竝んで、砲聲般般と天地を揺がしてゐる。

砲弾は砲聲よりも早く塹壕の上を越して居る。

これ等の怪物は無限に彼方より飛來し、究極の此方に向つて飛び去る。

砲弾は今朝食を取つてゐる第一中隊の頭上を物憂さうに呻りながら飛んで行く。

マックルウエーム卒は水筒を口へ擧げながら言つた。

「あすこへウリー（巨弾）が散歩に出懸けたぞ」

彼等は今劃期的戦闘の前にあることを考へ合すと、憎らしいほど落つたものだ。

將校食卓での空氣は、戦争に對する憧れでもなく、戦死の怖れでもない。單に夙起きと、不快な環境から生じた、人に嚙みつきたいやうなイライラ／＼した氣分である。

「雨が降りさうだ」

キャンプ少佐がブツ／＼といつた。

丁度聯隊長が旅團からの命令を持つて來た。

「僕等は三時四十五分に出發する。噴水通りと、蘇國塹壕を登つて中央の鋸の齒の對壕（交通壕）に侵入し、そこで胸墻を越える。それから豫定のとほり半個中隊の横隊に展開してドーヴリン村を目標

としてホーヘンツォレン角面堡と八號壕とを左に見て敵に突撃するのだ」

八號壕といふのは、偉大な塵埃山で、グラスゴー、エジンバラ間の鐵道線路に沿ふ石炭山地方の到るところに見られるやうなものだ。

地圖の上ではかういつた高地を壕と呼んでゐる。石炭孔を掘つたために出來た丘だから、丘でなくて壕なんだ。工兵隊は埃棄場といつてゐる。命令にはかなくそ山といつてゐる。オッグやホッグのやうなこの道の立人は（この人達は他の人達以上當然知つてゐなくてならぬ。彼は坑夫だつたから）ピングと呼んでゐる。

こゝから二哩離れたところにはトースベリックの丘くらゐに見えるのがある。この邊にはこの丘が澤山散布してゐて、陸地測量部ではそれに一々番號をつけてゐる。フルルやルースの方面にも澤山ある。

第八號壕は三週間前砲撃を開始して以來、我が砲兵隊の執拗な目標となつた。併し、今だに崩れも

せず、東の空に瘦せ細つた頭を敢然として聳らかしてゐる。

あの壕の上に、或は下に誰が生き長らへてゐるかどうかは別問題だ。この戦が濟まない内は第八號壕を記憶してゐる必要がある。

ホーヘンツォレン角面堡は最も眼立たぬものであるが、現在の情況からいふと最も重要な一點となつてゐる。

角面堡は獨軍の防禦線から我軍の方へ百ヤードも突出してゐる。——偉大な塹壕の岬をなして、機關銃の銃座や鐵條網の迷路が作つてあり、地面と水平か又は地下にあるので砲火で壞すことは容易でない。

角面堡は彼等に惱みの中心で、對壕地雷、爆彈隊の出發點である。この偉大な堡壘は建設者たるホーヘンツォレン聯隊の名がつけてある。

堡壘へは二條の交通壕で連絡をつけてある。英軍は最も尊敬する王朝ホーヘンツォレン家に對し、この二條の交通壕を大ウキリ小ウキリと命名した。

曉はやつと明けた。雨雲が低く垂れて來た。聯隊は噴水通と呼ぶ塹壕の中で勢揃ひを始めた。そしてその塹壕に沿うて蛇形に前進して、一哩隔つた胸牆の上に現はれ、そこで横隊に開くのである。

前進命令が下つた。そこで蛇形隊はクネくと歩いた。

彼等の前方には師團の數個大隊が前進してゐた。(ポビー・リトルは個人的に侮辱と思つた)が彼等は望むだけの戰鬥を殘らず經驗し得ると保證された。前に行く隊があるからといつて悲觀するに當らぬ、侮辱と感ずるに及ばぬ、仕ただけ戦が出来るといはれ、ポビー・リトルは安心した。

目下の情況は、我軍の砲兵が猛烈に叩きつけてゐるので、攻撃軍は獨軍の第一線で反抗さるゝことは極めて尠ない、或は全く反抗されないらしく見えた。或は第二線に進んでも同様かも知れぬ。

ワグスタッフ大尉はリトル少尉に説明的にいひ聞かせた。

「本當の戦らしい戦が始まらない内に師團はある種の隊形で獨軍の第三防禦線へ達するだらう。だから出發順がこの行列の第一番であつても第五十番であつても、入り代り立ち替りして、どれが第一線へ出るかわからぬ」

ワグスタッフ大尉は豫言者のやうに言つた。

かくて彼等は前進した。ある地點では臼砲の砲座を通りぬけた。そこには頭髮をモヤ／＼させた男が親しさうに手を振つた。他の地點では丁度この時仕事を始めてゐなかつたので、この行列に背中を向けてベーコンをフライにしてゐるものもあつた。忙しさうに。

その内に歩調が次第に遅くなつた。そして遂に全く止まつてしまつた。

一つの大隊が彼等の前面を横切つたのである。

彼等は暫らく待たねばならなかつた。指と指をすりながらイラ／＼しい氣持になつた。

丁度ピカデリーあたりの芝居見物客がパークレー街から溢れて来る馬車で、乗つて来たタキシードを止められ、我慢し切れぬのであるやうに。

「幸と暮は五時五十分までは上がらないよー

ワグスタッフがいつた。

その内又前進を始めた。そして事件の中心に近い鋸齒對壕へ来たことがわかつた。不意に彼等はホッと安心したやうな感じが犇々と身に迫るのを覺えた。

我軍の砲兵は砲撃を止めた。そして三日三晩目に戦場が靜かになつた。

ワグスタッフ大尉は時計を見ながらかういつた。

「砲撃をやめたのは、第一線の歩兵が胸墻を越えてゐるからだ。そして砲手は照門と照星をあげて信管をのぼすために砲撃を中止したのだ。リトル！ 僕等は三十分後には立派に敵の中へ這入れるぞ」

併しそれは獨りぎめなのだから間違つてゐないともいへぬ。不思議に人の氣を狂はすやうな中止があるから、——交通壕の中ではそれが何であるかを發見することは六かしい。

恐ろしい傳言が後方から傳はつて来た。最初に出た質問は恐らくキャンプ少佐が、「なぜ行進が遅れ

てゐるのか、理由を知らせ」といつたやうなものだつたらう。それが兵隊の口から口へ傳へられ（やつと着いた瞬間でも）着いた時には「申送れ、グ／＼待つてゐないやうに」といふやうな形になつてしまふだらう。併し、だれも返事する者が無い。

行列の中央あたりにゐたキャンプ少佐は怒り出した。それは、負傷兵を載せた擔架がすし詰になつてゐる塹壕の中を通つて後送されて来たからだ。

「これは不思議だ。君達看護卒はこんな所を後送して行かうとしたら、この負傷兵を殺すことになるぞ。あの向うに繃帶所へ通ずる特別に造つた道がある。パーク通りといふ名だ。僕等は上り下りの交通がこんなに滅茶苦茶にして置くことは許し難い。ワデル！ 聯隊長に言つて来てくれ。これ等の人をここを通らせるのは間違つた親切だ。聯隊長に彼等を送り戻すやうにいつてくれ」

ワデルは塹壕から這ひ上がり、傳言を持つて前進しようとしたが、少佐は「指揮官は離れちやいかんから、書き付けにしてどうなるか試しにやつてみよう」といつた。

ワデルはキャンプ少佐のいつたことを書付けにして持たせてやつた。

書付の返事が来た。それによると負傷兵は一人でも部隊の先頭から後へ送つてはいけないといつて来た。負傷兵はどこかの路傍によつて收容されねばならなかつた。少佐もどうしたらいいか、かに苦しんだ。併しどうすることも出来なかつた。

その内又新しい打撃が来た。

「今度は何だ……まだ負傷兵が来るのか？」

その返事は喜ばしげに列を傳はつて来た。

「捕虜です。少佐殿！七十名です」

少佐は愉快さうに敏捷にキツバリと命令した。

「捕虜か、不可ン。塹壕の中を通らしちやいかん。俺の命令を傳へる、全部ひつくるめて胸墻の上へ揚げる。護衛兵も一所に。そして地の上を歩かせろ！」

この命令は傳はつて行つた。その内に景氣のい、光景を見て彼等の心は躍つた。塹壕の彎曲した野を横ぎつて一群の人達が、漫然たる榴霰弾や流弾に追はれながら足早にやつて来た。

彼等捕虜は灰緑色の軍服を着て、扁平な輕燒パンのやうな帽子を冠つてゐる。武器も器具も持つてゐない。中には負傷してゐるものもある。

この群の前を駆けて行くのは護衛兵である。砲弾に追はれながら先頭に立つて走つてゐる。彼等は十二名の瘦形の蘇格蘭山地兵で、完全に武装してゐる。

捕虜はこの形勢を利用して遁げようの隠れようのといふ慾望は少しも現はさない。彼等の戦友との間に出来るだけ廣い空間を作り、そして出来るなら捕へた人に追ひ付かうとするのであつた。

彼等の中には微苦笑を塹壕内の攻撃兵に投げたり、手を振る機會を見出した一人は、反感を抱いてゐるマックスラッタリに向つて「オイ兄弟」と呼んだりした。

もう一人の捕虜は「この戦争はもう僕には澤山だ」と詐らざる告白をして行くものもあつた。

その後になつて、彼等攻撃部隊の前進は速くなつた。彼等が第一線に近づくに従ひ敵の榴霰弾の破片は深い塹壕ですら十分な効果を収めた。

何度か彼等は負傷兵を通してやつた。應急手當を待つために胸壁へ上げてやつた。併し何度かその手當を受けない氣の毒な負傷兵を飛び越して進んだ。

五分の後ヤット胸墻に着いた。——磐石不動の壘壁の上から用心して塹壕鏡でのぞいた。そして頂上まで土囊の階段を攀ぢ登つた。彼等は彼等の鐵條網がすべて切り去られたことや、もう一個大隊が構隊に開いて彼等の前方五十ヤードのところを前進してゐることに氣づいた。

小銃弾は空を唸つて飛んでゐる。大砲の方はまだ沈黙してゐる。今は大砲と小銃とが位置をかへてゐる。

彼等の前の平地には點々として多くの短袴の姿が妙に靜かに氣味悪く横はつてゐる。

右の方に當つて約一哩のところには二個の塔——炭坑の塔が並んでゐるのが見える。そこはルーズ村で、そこにはもう一個の蘇格蘭師團が攻撃してゐる。更にルーズ村の右に數哩の間はドン／＼進

んである佛軍の波又波が、滅茶々々になつた獨軍の塹壕の上に暴風雨のやうに押し寄せせてある。

その地點で總攻撃中の總攻撃が行はれてゐるのだと察した。

こちらは出来るなら前進しなければならぬが、何より先づ第一に獨軍の部隊と砲兵を出来るだけ牽制して置く必要がある。たとへ一週間以上戦闘し、僅に自分の防禦線を維持するに止まつても、彼等は要求された大部を爲し遂げたことになるのだ。併しそれ以上のことを爲したいのだ。

彼等の右にはホーヘンツォレン角面堡がある。彼は沈黙してゐる。

彼はもはや奪取したものと云ふことがわかつた。その先き左前方に第八號壕がボンヤリ見える。滅茶々々に毀れた砲塔で蔽はれてゐる。

右のズツと向うの低い丘の上から教會の時計のついた尖塔がのぞき出してゐる。

これが彼の目標ドーウリン村だ。

次の瞬間彼等は展開してかなく、その山の戰場に於ける貧弱な登場人物たるべく足を踏み出した。

20 今夜再び

二十四時間の後には將校の小さい一團が、廣々した塹壕小屋に坐つてゐた。

ケンブ少佐もそこにゐた。少佐は頭を厚い板のテーブルにもたせてグッスリ寝込んでゐる。

前日の朝から食はず眠らずにゐたポビー・リトル少尉はチョコレートを嚙つておこりにかゝつたやうに顫へてゐる。彼は一日中物凄い深刻な經驗をした。

ワデル少尉は彼の向ひ側に坐つて、鐘詰から牛肉を指で引き出して無神経に呑んでゐる。

エイリング少尉は床板に寝轉んで、機械的に、彼の食糧囊より取り出した機關銃の銃前をなほしてゐる。

ワグスタッフ大尉は飯盒でコ、アを作つてゐる。彼はほかの人ほど疲れてゐないらしい。

一同は泥まみれになり、體はグシヨ濡れになつてゐる。それは夜をとほして大部分ひどい雨だつたから。

彼等はすべて食物と睡眠の缺乏とでボンヤリしてゐる。

けふは日曜の朝である。

その内ワグスタッフは彼の手製のコ、アを作り上げてアルミニウムのコップへ注いだ。そしてケンブ少佐の肩をたゝきながら、

「これを少しおやりなさい」といつた。

ガッシリしたケンブ少佐は體を大儀さうに起し、出されたコップを受け取りながら「これは有難い」

といひながら口につけた。

ケンプ少佐はあたりを見廻しながら言った。

「やあ、エイリング、君は来てゐたか、列のどの邊にゐたか？」

「中央、鋸齒塹壕への前進中大隊から離れてしまひました」

「フム、それから」

「私が機關銃を胸墻の上へ引き上げた時までにもう誰一人ゐなくなりました。併し目標を知つてゐましたから教會の塔の方へ突撃しました」

「第八號壕を通る時は怖かつたかね」

「薬を一服頂戴しました、機關銃の縦射を、ひどかつたです」

「そりや僕等も見えてゐた。あれでシンクレアが可哀さうにやられた。君はどうした？」

「私は兵隊を一時地に伏せさせ、私もさうしました。私はあの十五分間の時ほど人間が扁平に横はれるものだと思つたことはありません。併し駄目でした。機關銃は彈の餘程上に据ゑてあつたと見え、彼は見事に第八號壕の支配者として猛威を振つて居りました。彈は私達の頭髪を梳つてすぐ下の地中にもぐり込んで行くやうな氣がしました」

「その時の君の感じは？」

「眼に見えない人が私をクスグツてゐるやうな氣がしました」

エイリングははれ上つた眼をまた、きながらいつた。

「僕もそんな感じがしたよ、それから」

「私の部下が一名やられたのか、泣き出しさうな聲が耳に入りました。私は固定標的よりは移動標的の方が彈に中る公算が多いといふ結論を發見しまして、一列になつて前進するやうに列の先頭と後尾と兩方へ傳へました。行くうちに連絡不明な交通壕にブツつかつたので、その中へ這入つて行きました。それはあの石切場へつゞいてゐるのでした」

「僕等の線から全然離れて？」

「私はハルルの方面のどこかで戦闘してゐた旅團の豫備隊となつてゐた英聯隊所屬の二中隊から教はりましたので私はあまり右の方へ寄りすぎたと思ひました。私は石切場から出て半ば右向きに進んでたうとうズツと前方に大隊が東向きに戦闘してゐるのを發見したのです。そこは敵の第三線かと思つたところです」

「アレー壕だよ。地圖の上で知つてゐるだらう」

「さうでした、思ひ出しました。アレー壕でした。あの時私は機關銃二挺を持つて、大隊の右翼にゐました。キリック軍曹に二挺持たせて左翼へやりました。それからあとは、少佐殿が御存じのとほり

です」

「僕はハッキリ覚えてゐない。僕はあの血醒い塹壕であのとほりギッシリつめ込まれてゐたから動き廻ることが出来なかつた。だから自分の周りに起つたことだけしか見えなかつた。君は機關銃をウツと打つたかい」

「かなりやりました。(エイリングは職業的に満足しながら)右前面からかなり射撃しました。眼に見えるあらゆる藪や人家の表は皆梳いてしまひました。その内射撃出来なくなつたのもあります。それは銃身へ銃丸がつまつたまゝ、銃が使へなくなつたからです。夜になると、あたりは静かでした。その内たうとう次の塹壕へ退がれといふ命令が來ました」

ケンプ少佐は厚板の机を拳固で毆つた。そして怒氣を含んで呶鳴つた。

「退却! 全くさうだつた。アレー壕を奪取して一晝夜守つてから退却しろといふんだ。單に左右翼に豫備隊がないほど前進したといふ理由で……」

沈黙の暗い幕が下りた。しばらくしてワグスタッフは、思ひ出したやうに言つた。

「僕は今朝二時頃催眠瓦斯で少しやられた。大したことはなかつたが……」

「瓦斯マスクをつけなかつたのか?」
ケンプ少佐がたづねた。

「ソレといふ時にマスクのつけ方を間違へたものですから」
「で、君はどうした?」

ワグスタッフはノンキ坊のやうに、

「私は胸牆へ攀ち登つて坐つてゐました。そこが一番毒のないところらしかつたのです。とにかくこの空氣はきれいでした。回復したので下りて來ました。時に第一中隊の方面はどんなだつた? リトル君。噂は聞いたんだがほんたうでなければいゝがと思つてるんだ」

リトルは躊躇した。

「どうだつたかい?」

リトルは落ちついて話し出した。

「第一中隊は奪取したアレー壕に頑強にかじりついてゐました。その内ズツと前方で半ば左向いた方角にある孤立した塹壕を蘇國山地旅團の一部隊が守つてゐたが、その隊は非常に難戦してゐました。それは敵の砲兵の着弾が正確で、それに對壕の前端は都合よく敵の爆弾兵をたやすく對壕の中來さすやうに出來てゐたからです。この塹壕が調子づいた攻撃部隊を誘ふやうに造られてゐたことが間違つてゐたのです。どんな部隊でもその中に長くはゐられないので、第一中隊は前進して應援せねばならなかつたのです」

リトルは胸をつまらせながら次のやうな思出話をした。

その時ブレイキー大尉は用意の命令をしてリトル少尉にふり向いた。そして言った。

「僕はむつつり屋の頑固屋の蘇國男子だが、その形勢を見ちや僕はだまつちやあられない」

次の瞬間に彼は胸壁を越えた。あとから彼の中隊がついて来た。長い列の中には、マックルウェームも重苦しげに喘ぎつゝ、用心深く、彼の靈を神の攝理に任かせてゐた。オグとホグとは肩を並べてゐた。

マックオストリッチは六歩も先きへ非常に勇ましい讚美の詩を口ずさんでゐた。

彼の後からは幾節革命家マックスラッタリが来た。

敵はすぐに押し寄せて来た。そして榴霰弾の破片が旺んに飛んだ。

兵隊は足許を踏みしめ、追つて行つた。

マックオストリッチは第一に仆れた。最後まで、スポーツ氣分で、彼の體を飛び越えて行く戦友に弱り行く手を振つて激励した。

「サア、塹壕があるぞ。突撃だ！」

兵隊はもうこれ以上命令さるゝ必要はなかつた。彼等はまつしぐらに進んだ——統一のない喊聲をあげて——

直に塹壕に達する筈だつたが不意に彼等はよろめいて立ち止まつた。

ブレイキー大尉はそのあとから喘ぎながらついて来た。そして忠實な少尉をふり返つて言った。

「僕等はやられた、リトル君。あれを見給へ、あの鐵條網を」

ブレイキー大尉のいふとおり、塹壕は彼等の友人で占領されてゐるが、第一敵に使はれるやうに造られたものだ。だから、英軍突撃の方面に對して嚴重に鐵條網が張られてあつた。

ブレイキー大尉はすべてがオルダーショット士官學校の演習の日でもあるかのやうに散歩ステッキで指揮しながら、中隊に伏せをする信號をした。

「リトル！ 君も命令があるまで、動いちやいかんぞ！」

彼は銃を持った兵隊を連れて針金の林の中へ通路を切り開きはじめた。

この時、眼に見えぬ機關銃が射撃を開始した。そして非常に勇敢なる將校にして蘇國男子の典型たるブレイキーは名譽の戦死を遂げた。

半時間後に第一中隊は彼等の彈藥をすべて使ひ盡し、尺寸の地も得られないで、大隊の他の中隊に合してしまつた。

ポビー・リトルを入れても（彼は魔術的にいのちを護られてゐた）中隊は一個小隊の兵力しかなかつた。

牛肉を食つてしまつたワデルは、「この次には僕等に何をさせようといふのだらう」と獨言のやうにいつた。

「もし、彼等が相應に考へてくれる氣があるなら、一旦後へ戻して少しは休息させてくれるがいゝ。そしてほかの師團をかはりによこしてくれてもよささうなものだ。僕等がこんどの戦鬪の先陣を承つて彼等のためにいやな仕事をして將卒を澤山失つた。いゝ加減に僕たちのベッドを作つてくれてもよささうなものだ」

ケンプ少佐が興奮しながら言つた。

「私も同感です」

ワグスタッフが手をあげた。併し、彼はすぐに手を下ろして、「もし、僕等の損害の程度がもう少し多ければ」と小さな聲でいつた。

「さうだ、損害といふほどでもないからね……」

ケンプ少佐は温かいココアで心地よささうに言ひつゞけた。

「僕等はホーヘンツォレン角面堡を完全に奪つた。そして少くとも敵の第一線と第八號壕とを取つた。右翼ではルース村を占領したといふ噂だ。初陣としては悪くない。酷い逆襲の來ることは間違ひないが、撃退してやらう。その後僕等は更に攻撃してもつと廣く占領しよう。少くとも獨軍の奴等に

應接の違のないやうにしてやらう。それが今度の御馳走で、僕等にあてがはれた仕事だ。獨兵共をこづき廻せ。僕等が土地を得やうが、得まいがそんなことは構ふことない。彼の豫備兵を使ひ盡さしてしまふ。その間に右翼にある佛軍が地圖の上から敵を押しつけてしまふだらう。少くともこれが僕の説き。この戦鬪は一週間以上同一地でつゞくだらう。負傷者にとつては氣の毒だがもし僕等が既に獲た地區を支持しさえすれば、僕等の方が勝利だ。まあベッドにつかない内にアレー壕をしつかり固めて置きたいものだ」

この時聯隊長は副官をつれて、小屋の小さい口へかゞんで這入つて來た。

彼は朝の挨拶をしてからかう言つた。

「君達が部下の兵隊に食事をさせることが出來たのを見て自分は嬉しく思ふ。糧食車をゆうべこんな遠くまで來させたのは大成功だ」

「何か新しい情況がありますか？」

ケンプ少佐がたづねた。

「敵はアレー壕を撤退したらしい。その理由はわからないが、戦をするのがイヤになつたのだらう。第八號壕の我軍が敵の左後からアレー壕を見下してあるので敵に戦意のなくなつたのも無理はない。だれでも第八號壕を支へるものはアレー壕を支へる。併し旅團は今夜再び前進してアレー壕をもう一

度占領するのだ」

ケンプ少佐は愉快さうに、併し、あきらめた顔に、

「よし、ベッドは無期延期だ」

21 退却のしんがり

同じ日曜日、真夜中、大隊は戦鬪力の少くなつたまま、で約十呎の深さの人氣のない、お化けの出さうな敵の鋸齒對壕のそばで、星あかりの下に薄い隊を組んで、長時間奮闘したきのふの戦場へ再び這入つて行つた。

アレー壕はこれとは違つて壕の深さ四呎以上で大したことはなかつた。

白堊土の胸壁はどんなに空想を凝らしても銃丸除けには役立たない。

左方では、塹壕線は他の師團の部隊でつゞけられてゐる。右のはうには、我が旅團内の一つの大隊がある。

「もし今度防禦線が本當に連續して居れば、僕等は人家のやうに安全だらう。あの對壕掘りの兵は立派な者だ。彼等は自分等の前面のすべてへ鐵條網を作つてくれたよ」

大佐はかういつた。

次の一二時間の内に、その時間内に出來さうならゆる防禦の準備が出來た。工兵として最も巧みに姿をまぎらしてゐた。

曉とともに去る金曜日以來、睡眠をあぢははなかつた彼等の眼は、白み行く光景を涙ぐましく見やつた。

前面は地面が二百ヤードばかり滑かに平に廣がつて、それからゆるやかに落ち窪み、くつきり浮き出した水平線を残してゐる。

地平線のさきには人家が聳へ、その屋根と上の窓とを見別けることが出来る。

「あれはヘスネ村かドーヴリン村かにちがひない。昨日よりはズツと左へよつてゐる。エーと、昨日だつたかね」

ケンプ少佐が言つた。

「一昨日です」

いつも氣の張つてゐるワデル少尉がいつた。

「何でもいゝさ、とにかく今日がその日だ。忙しい日になるぞ。僕等は二進も三進も行かなくなつた。あんまり旨く行きすぎたんだ。僕等は近所の部隊よりも、あまり前へ突き出したので、少し退い

でもないのだ。併し退却はしたくない。僕等は今や危急存亡の時だ。ワデル君、もし僕等がこの位置を持ちつづけることが出来、他の隊が僕等の左右でその後れを取り回へしてくれたらもうしめたものだ。佛國の國士をたつぶり二哩は取りかへすことが出来やう」

少佐は眼鏡を水平に振つた。

「コーツと、僕等の右手前面遙かに見えるのは多分ハルツ村だらう。ルース村は右の果て、僕等と同一線上にあるにちがひない。第八號壕は僕等の左後に突つ立つてゐる。僕等の眞左の地區はよく分らぬが、獨逸の鐵兜がそこに嚙りついてゐることは間違ひない。ワデル君、僕には左前面にあるあれ等の百姓家がどうも邪魔物だね。通視を妨げる。機關銃があるやうだ。あの赤瓦の屋根に一二の非常に意味深長な孔が見える。エイリングの注意を惹いて置いてくれ。少し豫備的射撃も毒になるまい」五分後に、エイリングの機關銃がしゃべり出した。そして瓦のなだれが、田舎家の屋根から落ちて來た。

ケンプ少佐は屍を嚙じる魔のやうな満足さで言ひ放つた。

「若し彼等があゝの柵の上に機關銃を据ゑてあつたら、僕等を擽ぐつたらう。……僕は獨軍の奴が攻撃しようとしてゐるのぢやないかと思ふ。さういふ氣になつてくれ、はい、なあ。僕の氣遣つてゐることが一つある。それは我軍に向つて、新に我兩翼に向つてある妙な對壕が通じてゐないかといふ

ことだ。若しさうだとすると、僕等は爆彈戰をやることになる。——これが最も非紳士的な戰鬪法だが、僕等は正々堂々の正面攻撃をして貰ひたいのだ」

併し、獨軍は先づ他の手で攻めて來た。不意にどこからともなく殆ど半時間もつゞいて電光の行列で動く砲彈がシュウ、シュウ、パン、パンと空中に廣がつた。

彈は大抵傷ついた第八號壕の顔になすりつけられた。

初まつた時と同じく、不意に止んだ時に、一つばいつまつてゐる塹壕内の死傷者はかなりの數に上つた。

負傷者をどうすることも出来なかつた。そのひまがなかつた。

全線に亘つて警報が傳はつた。

「前面を警戒しろ！」

なるほどたしかに二百ヤードの彼方に灰色の姿が現はれて來た。——大隊でなく試験的に二人三人づつ。

次の瞬間に急射撃の暴風がこちらの塹壕から起つた。

灰色の姿は廻れ右をして走り去つた。ある者は地平線で見えなくなつたり、ある者は平たくころげたり、ある者は體をキリ／＼廻しながら仆れて行つた。

三分間の後には射撃は止み再び静寂にかへつた。

「言はんこつちやない」

ワグスタッフ大尉は大隊の右にあるボビー・リトルに向いて言った。

「獨逸兵の奴は僕等がこゝにあることも、こゝへ三脚銃を持って来てゐることも知つてゐる。この次はもつと變つたことをやるだらう。今は一體何時なんかい。この前食事をしたのは何時だつたかね、リトル君」

「少しも覺えがありません」

リトルは眠むさうに答へた。

「ウン、もう朝飯ごろだ。チョコレートを少しやり給へ。僕の持つてゐるのはこれですつかりだ」

ワグスタッフも疲れた聲だ。

今は朝の八時で、完全な静けさがあたりを支配してゐる。

全線の兵隊は垢だらけになつて、彼等の體から饅頭肉とビスケットのきたない斷片を引き出してゐた。塹壕の汚ない土の上に踞まつて。

まだ雨が降つてゐる。

食欲のない、とき／＼途切れがちな食事が進んで行く。

「オーイ、右にあるのはあれは何だ！」

居眠りかけてゐたボビー・リトルは痙攣的に叫んだ。

「ことによると爆弾ぢやないかと思ふ」

ワグスタッフがからかひながらいつた。

「この塹壕の右手約百ヤードあたりのところだ。あそこへ行く對壕があるに違ひない。爆弾兵は慥かに地上から攻めて來ない。オイ、その心配面をしてゐる男は誰だ」

右手の大隊の士官が塹壕に沿うてやつて來た。

彼はワグスタッフに話しかけた。

「私は右のほうで、爆弾でひどくやられてゐます。大尉殿！ どうか都合のつくだけ爆弾を送つて下さい」

ワグスタッフは聞くと胸墻の上へ突つ立つた。

「よしすぐに聯隊長に逢つて言つて來よう」

彼は足を早めて出かけた。それは危ない。敵の鐵砲玉がよくあとから尾いて來るから。併し戰の端の大隊本部へ行くのに五分は十分儉約になつた。

やがて爆弾が手渡しに傳はつて到着し出した。

ワグスタッフはこんどは塹壕の中を歸つて来た。

「この戦闘は骨が折れるぞ。獨軍の爆弾兵は大ぶん上手だ。恐らく僕等よりも澤山爆弾を持つてゐるだらう。併し僕等の右にゐる子供達は共同の目的に於ける役割をつゞけられはするだらう」

「私等にも何か出来ることはないのですか？」

リトルが熱して言つた。

「何もない。敵がこゝのズツと右のはうでの戦ひに成功しない限りは。……そしたら大攻撃をうけるか、するかの番が来る。エイリングと彼の機關銃とが塹壕の工合のいゝところを見つけたら、そこで前方に注目して居りやいゝ。丁度いゝ時が来るまで」

三時間近くも爆弾戦が行はれた。何にも見えないが、右翼の果てで行はれてゐることはそのすさまじい音でよくわかつた。

爆弾は送りつゞけられた上にもなほ送りつゞけられた。

入り交りに無残に引き裂かれた兵隊は送りかへされた。

信號係軍曹が後の方どこからともなく現はれて原を横切つて駆足で来た。そして蜘蛛のやうに電線をたぐり出した。そして砲兵と連絡が取れましたといつて立ち去つた。

すぐそのあとで話のとほり、英軍榴霰弾の有難い音と姿とが、右翼の戦線の上に破裂するやうにな

つた。

「あれで今ある奴を殺してしまへもすまいが援兵の来るのを妨害出来るだらう。僕等は僕等の線を守つてゐよう、オイ、リトル君！ ……何だ軍曹！」

ワグスタッフが叫んだ。

「大尉殿！ 大隊長が、今來られまして、左翼の方を嚴重に警戒するやうにといひつけられました。敵は今度は英國聯隊の方へ爆弾を投げ出しました」

カーフレー軍曹がいつた。

「畜生！ こんどは左か、じれつたいつたらありやしない！」

ひどい破裂音が明かに左翼の方で聞えた。

「若し、彼等が背後に廻ることに成功したら……」

ワグスタッフは低い聲でリトルに言つた。

「僕等はすこし退つて他の隊と同一線にならう。たつた二三百ヤードだから。僕等は大損害を受けるから」

「まださうなつたわけぢやないでせう」

リトルは勇敢に言つた。

ワグスタッフ大尉の豫言は中つた。彼の眼と耳とは左の聯隊の位置が既に後から廻られたことを發見した。彼は口を利かなくなつた。

聯隊長の脊高い姿が塹壕に沿うて現はれた。

ユックリ歩きながら、そここゝで下土や兵卒に話しかけるため腰をかゞめた。

「左翼の聯隊は退却しなくてはならぬのだ。こちらはすつと踏み止まつて、彼等の退却を掩護するのだぞ！」

聯隊長らしい言葉を聞くと兵隊は、「畏りました」といつたやうな顔をした。

聯隊長は二人の將校の立つてゐるそばまで來た。

「やあ、ワグスタッフ大尉！ 間もなく、ウンと打つてよこすぞ。敵は百姓家の裏の左に集中してゐる。右翼方面の情況はどうかい？」

「右翼は陣地を固守してゐます」

「よし、一寸エイリングに機關銃を用意しろといつとけ。もう言ひつけてはあるだらうが。自分は左翼の方へ行かんといかんから」

危地を目ざして聯隊長は歸つて行つた。——眞直な、瘦形の、口數の少ない、顔を見ただけで、部下に信頼と活氣とを與へる人であつた。

「聯隊長殿、左翼の形勢は如何です？」

少佐は小さい聲で聞いた。

「あまり結構ぢやない。我軍の陣地は顛覆されてしまつた。僕等には増援隊が來る筈になつてゐるが間に合ふかどうか疑問だ。併し退却となればこの聯隊は殿だよ」

「勿論で御座います。聯隊長殿！」

22 百姓家の陰

「四百ヤード、斜左前進する敵、急ぎ打て！」

二十分がすぎた。

聯隊長は動かさずに立つてゐる。その左翼は全然暴露されてゐたが眼といふ眼、銃といふ銃はすべて一群の百姓家に向けられてゐる。

百姓家の家と家との隙間から獨逸歩兵の前進を見ることが出来る。——何隊も何隊も重なり合つて右翼の塹壕に向つて動いてゐる。

我が防禦線に接する地區は開潤してゐる。敵の部隊がこの地區を過ぎるたびに銃聲はとゞろき、エ

イリングの機關銃は楽しい呻り聲を放った。

それでも敵は前進を止めなかつた。敵の榴霰弾は頭上で破裂した。小銃弾はどこからともなく口笛をならしてゐる。

攻撃は今や真剣になつた。

彼等が見捨てた右翼の塹壕は百姓家の間を真直に走つてゐるので、彼等の眼界を妨げてゐる。敵の爆弾兵も眼に入らない。

彼等爆弾兵はその役目を果たすと、跡始末は人にさしてしまふ。

百姓家の蔭にかくれてゐる歩兵は安全な迂回をしてゐる。そして何か豫定外の事件が突發せぬかぎり、彼等の背後に出るに極つてゐる。

「瞬く内に敵は僕等の背後から射撃するやうにならう」

ケンプ少佐は我慢しきれなくて言つた。

「ロッホ・ガイア！ 君の小隊を廻れ右さして背牆越しに射撃する用意をしろ！」

若いロッホ・ガイアがこの命令を遂行したやり方は彼らしく徹底してゐた。彼は背牆の上に悠々と駆け上り、そこに立つて六呎三吋ゆたかな姿を見せつゝ、命令を下した。

「小隊、こちらへ向け。壕の直下、空塹壕の背後の一群の建物に注目しろ。間もなく標的が出て来る

ぞ。汝等は我中隊中で最も射撃の上手な小隊だといふことを忘れちやいかんぞ。そら、あすこへ出たぞ。(ステッキで指しながら) どつさり土塀の隙間から現はれて来たぞ。急ぎ打て！ うまいく、よーし！ よーし！」

彼は急にぐらくとひつくりかへつて塹壕の中へ落ちて来た。

ケンプ少佐は兩腕で彼を抱へ、白堊の臥床にゆるやかに寝かした。

もうこの上爲すべきことはなかつた。

若きロッホ・ガイアは彼の小隊に標的を示した。

小隊はロッホ・ガイアの示した標的の同じところを忠實に打ちつゞけてゐる。

ロッホ・ガイアは疲れた子供のやうに眼を閉ぢて喘いでゐる。

「つゞけて下さい少佐殿。私は大丈夫ですから」

彼は力なくさゝやいた。

オセローと命名した純な心の持主、勇氣なる熱誠家ロッホ・ガイア少尉はかくして天の一方へ旅立つて行つた。

全聯隊——とはいへ残つたものだけだが——は塹壕の背牆越しに射撃してゐる。ズルイ獨軍は左翼から包圍して来た。猛烈な小銃花火と、機關銃の不斷の唄ひを受けたので正面攻撃を断念した。そし

て百姓家の間から塹壕の裏へ裏へと雪崩れて来た。

多くの灰色の姿が第八號壕の表へ攀ち登った。

「僕等は退却をするやうになるとは思はない」

ワグスタッフがつぶやいた。

その内に壕の頂上から焼き盡すやうな砲火が開かれ、間もなく補充力の乏しい防禦線にドン／＼落ち始めた。

「聯隊長が負傷されました」

曹長があわてながらケンブ少佐に報告した。

「エッ！ 負傷！ 重傷か？」

「重傷のやうです」

ケンブ少佐はあたりを見廻した。そこにはもう聯隊が獨りぼつち残されてあつた。右翼にゐた勇敢な部隊はほとんど全滅してしまつたから。

「もはやこゝに踏み止まつても仕方ない。僕等は自分の小さい役目を果した。聯隊長を連れて歸るため兵を送れ、曹長！」

ケンブ少佐は溜息をつきながらかう言つた。そしてつゞいて命令した。

「蘇國山地兵！ 後の塹壕へ退れ、中隊毎に右より！」

23 十萬兵

「獨逸兵は紳士としては非難すべきことは多々あるとしても」ワグスタッフ大尉は退却する中隊の後から考へながら歩いた。「軍人としての勇敢さと、戦闘の熟練さとは否定するわけには行かない。慥かに天稟だ」

「あの壕から打つた奴で僕の短袴に穴を明けたよ。左へ行け、固まつちやいかんぞ。第二塹壕へ来たて。ポビー・リトルの奴怪我一つしないで轉げ込みやがつたな、ハハハ」

總攻撃に於ける彼等の受持は終つた。

短時日に起きた極めて些細なエピソードは澤山ある。もつと花々しい話もあらうが、これに與つた人達の性格をこれ以上巧みに描くことは六かしい。

あの灰色がかつた九月の朝に始まつた戦争は三週間つゞいた。そして傷ついた地上を押しつ押しされつしていつ果てるともわからない。

併し獨軍も着々と死傷者を大地の上へ積み重ねてゐる。(きのふも短時間の間に逆襲で敵は八千人

の戦死者を殺して行つた)

最後の前進が——當然来なければならぬとほり——来た時はそして我戦線がズッと前へ押し出した時には数條の塹壕——砲弾で滅茶々に壊された——を飛び越えてドン／＼行かねばならぬ。

それ等の塹壕の中や、その周りには、ジックスやジミースや、サンデースやアンデース——蘇國聯隊の軍服に包まれた兵隊達の死骸が轉がつてあるだらう。この無言の證人達の集團こそキッチナア第一軍の蘇國師團が第一日の戦闘の最初の一二時間に出來た光榮の塊だ。

この二三日間の記録として止むべきことは少ないが、一晚つゞけて敵の逆襲を追つ拂ひ、ホーヘンツォレン角面堡を確實に占領し、敵の交通壕ビッグウキリーから突き出して前線に必要な兵員を補充したりした。

大規模の戦闘では避け難いことだが全旅團が混淆して、思ひもよらぬ指揮官が戦死者の中に交つたりした。

多くの堅固な仕事が夜間占領した獨逸の塹壕内で短袴連や、鉦釘連や、自轉車連より成る混成團體によつていつの間にか爲されてゐるのであつた。

最後の日新手の部隊が來て攻撃をつゞけることになつたので、彼等の聯隊は引き抜かれて休息のため後送さるゝことゝなつた。

七十二時間の戦闘で滅茶々々になつた師團は、鐵道線路のうしろの塹壕の中で疲勞の絶頂に達して眠りこけた。

眼がさめたら軍團長から彼等の勇敢な行爲を賞讃されるだらう。

ケンプ少佐や、ワグスタッフ大尉や、エイリングや、ポビー・リトルがマックルウエーム伍長のやうな古つはものに助けられて、多數の補充兵と多くの士官とで聯隊を原形に復する時も來るだらう。

併し悲しいかな、彼等はもはや前線十萬ではない。

第三卷 續外征篇

1 來訪者

千九百十五年の秋も末となつた。樹も草も細り、冷たい風が吹くやうになつた。彼等の聯隊も又もや前進を始めた。快活に、得意に。

二ヶ月前、北フランスのベーションといふ町にたどり着いた時は、埃と汗とで顔は見る影もなくなり、瘦せ衰へて見えた。

誰ひとりこの一週間の間服を脱いだものはなかつた。靴下はズタ／＼に千切れ、膝下の一部を取つて靴底に敷いたりしたが、それもすり切れて、足に靴下らしいものが附いてゐなかつた。

泥まみれの毛脛が短袴の下に露出してゐる。頭のいゝ藝術的な男は古い土嚢を引きさいて、踝を包んでゐるのもある。

頭に蘇國帽を戴かせてゐるものは稀れで——それも徽章の落ちた——つぶれた瓦斯除け兜を冠つてゐるものはいゝ方で、大かたは毛絲のお椀帽を冠つてゐるだけであつた。

髯は生え放題で、ポ／＼としたところが如何にも好戦の士らしく見えた。

胃の腑の報告によると、この前食事らしい食事をしてから、もう數年も経つたやうな氣がする。だが困苦缺乏敢て意に介せずといふ元氣だ。

聯隊の喇叭手は彼等の中にあつて、表面きは元氣さうに面白さうに燥いだ音楽を奏してはゐるが、彼の後には三晝夜ブツ通しの劇戦の思出が絲を引いてゐる。

就中聯隊は敵の陣地に最も深く食ひ込んで行つた。そして、行きづまつてしまつたので一時休憩のために退却を命ぜられた。

その瞬間、戦線に於ける悲壯な光景も、身心に與へた課税も、第八號壕に残した無数の勇士の光景も、すべて食事、睡眠、洗濯が眼の前にちらついて來たと思ふと、スツカリ忘れてしまつた。

一休養して、ウンと食つて、ウンと眠つて、服の手入もすむと、キット又どこかへ引っぱり出されて、新たな編制の中へ差し込まれるにちがひない。兵隊の缺員を補ふ補充兵ももう根據地に來て待つてゐた。

やがてそのうち進級や任官の大洪水が見舞つて來た。

中隊には中隊長ひとりとはも／＼どほりだ。中少尉は生き残つたので間に合ふ。下士は下士で十把一束に作つた。

古い名前が陸軍名簿から削られて新しい者が代つて行くのもある。

兵站軍曹は新しい給與品——雑糞や、飯盒や、水筒などを分配する。

「マックサンブ二等卒！ 貴様は新品の給與品を吊してあるな。古いのはどこにあるんだ？」

「ハ、私の背中から吹き飛ばされました」

「脚絆も新しいね。古いのは？」

「脚から吹き飛ばされました」

「携帶食糧は？」

「雑糞から吹き飛ばされました」

「貴様の頭は？」

「吹き飛ば……これは間違ひました」

まはりの者が大口を開けて笑ひく口眞似をした。

一箇月の後には聯隊は再び全盛力を盛り返し、(休養もし、補充もされ、新しい給與品も支給されて)實戦で鍛へた戦歴と士氣を具備して、天晴キツチナア軍の前線として光輝ある位置を占めることにならう。

これはボビー・リトル少尉の考へてあることであつた。疲勞の絶頂にあるが、いつも樂觀的な少尉は、今に聯隊が立派なものに回復すると信じてゐた。

ワグスタッフ大尉にこの話をすると、「どうだかな」と苦勞人らしく言つた。

「一つの仕事を旨くやつてのけると、その報酬としてまた一つの仕事があてがはれる。罰則のやうだが、つまりその人に敬意を表するわけであり、信任の度が厚いといふことになるのだ。

彼等にはまる二日間の休暇が與へられた。

それがすむと、汽車に乗せられて新しい補充兵と共にベルギーの塹壕線の中でも特別にいやな方面へ送られた。

こゝで塹壕の修繕に日を送つた。航海中船の修繕でもするやうに、あちらこちらの土裏を積み直したり、胸牆に土を盛つたり……

彼等はベルギーへ來てからもう二た月になつた。それから、前いつたやうに活潑に歩き出したのである。

どちらを見ても新顔ばかりである。舊い方の顔も昔の通りではなく、輪廓が角張つて來て、丸ぼちやの顔などはどこにも見られなくなつた。併し風采は凛々として何となく重みがあつた。

三ヶ月前は少尉だつた者が今は中隊の指揮を取つたり、伍長だつた者が小隊の指揮を取るやうになつた。

ボビー・リトルもA中隊長となつた。若し彼がこの危ない地位を三十日間首尾克く勤めたら、——彼を退かすために代りの者を送つて來なければ——自動的に大尉に昇進する。二十歳の若造で……ケンプ少佐は大佐になり、大隊を指揮してゐる。ワグスタッフ大尉は少佐になつた。エイリングは中隊から出て行つた。噂によると彼は旅團司令部で數職を兼任してゐるさうだ。兵隊の仲間に缺伍の出來たのは傷しい。オッグも、ホッグもマックスラッタリもマックオストリッチもみなアメリカ印度人のいふ「樂しき未來の狩場」へ行つてしまつた。何でも手先の器用なダンシー卒は行方不明といふことに報告されてゐるが、彼の戦友は彼の身上には異變はないと信じ切つてゐる。ダンシーは轉んでも直ぐ立ち上がる男で、その術に長けてゐることは實に天下一品だ。今までの經驗からしても、ムザく死ぬるやうな男ぢやないと信じてゐる。……彼は必ずどこかに生きてゐる。

「奴は捕虜になつてゐるかも知れません」

忠實なマックルウェームが軍曹にいふと、軍曹は苦々しさうに斷言した。

「彼奴は捕虜になつてゐるだらう。彼奴のことだから、いゝ宿舎にありつかうと思つて、將校だなんて言つてゐるかも知れんよ」

中隊附曹長バンフーストンは今では大隊附になつた。マックルウェームが中隊へ入つた時は伍長

であつた。

トッシ卒も筋をふやしてやらうと内命があつたが斷わつた。それは酒飲友達のコッシ卒が昇進に漏れたからである。

その結果、この二人の老兵は表彰もされずじまひになつたが、彼等は最近入隊した者の崇拜の的となつた。

かくて彼等は元氣よく常態に復して戦争に従事し得るやうになつた。

彼等の望むところは國民をして平和の來る日まで極度に緊張の標準線を高めて置くことである。それが何よりのことだ。

彼等には勝味が十分にある。それは年の若いことだ。

一日ケンプ少佐は旅團長に、「閣下、私達將校の大多數は戦死するか負傷するか、或は他へ轉任しました。そして私のところへ新たに二十名の青年將校が來ました。私のやうな耄碌を差し引いてしまふと、大隊士官の平均年齢は中隊長まで込めて二十三歳にしかありません。併し、私はもうたれひとり取りかへたくはありません」と言つた。

ベルギーの塹壕生活はフランスの塹壕生活とは違つて、今ある田舎は、不愉快なことばかりがついてゐる。

ズット南方ヴェルメルの方面では塹壕が殆んど數哩も一直線につき、敵味方板のやうにベッタリ食つつき合つてゐるので、戦術も戦術も策の施しやうがない。

前面では歩兵が銃火を交へ、彼方では大砲が呻るといふだけで、曲のないこと夥しい。併しこゝでは塹壕線が小さい丘の曲線に沿つてゐるので、ある部分は線が盛り上がりつつある。これはふくれた丘の面に塹壕が廻つてゐるから敵の砲弾の的になり易い。

二三百ヤード北へ行つても、南へ行つても地面が下がつてゐるので、塹壕線が凹入して、前面の高地から瞰下ろされ易い。

塹壕線はところ／＼鐵道線路や運河で中斷される。鐵道には土囊を積んだり、運河には特殊な防禦手段を講じてある。

塹壕線の殆んどあらゆる點が、近くの丘の脊から見下ろされたり、近くの塹壕から縦射される。士官達が望遠鏡で前面の敵の塹壕を仔細に偵察してみると、彼のすぐ左にある丘の上を占領する獨軍からこちらの所作がすつかり見え、體も何も暴露してゐることを知つて驚いた。

塹壕線は凹線凸線の連鎖で、有名なベルギーの激戦場イブレー大要塞の一部を成してゐる。獨兵奴がこの要塞の内部を砲撃するのに、どんなに規則正しく落ち着いてやるかと思ひやられる。

夜間光弾を天空へ打ち上げて、あたりを見廻す。それが半月形どころか全圓形の中に自分を置いて見

るくらの要塞の内部をよく見てしまふ。

機關銃隊は敵も味方も一番忙しい役廻りだ。フランスの平野ではこの極悪無道な機關銃は前線にだけ使はれてゐた。それでも機關銃が第一線の頭を越して射撃したのちには、第一線から胸墻の後に出來た不吉な破れ口を指して盛んに小言をいつたものだ。

ところがベルギーのイブレー方面では機關銃隊は便利な山の背に陣取つて一哩さきの獨兵どもを射撃するので、味方の方からは小言が出ないかほりに、獨兵もこれに應戦して、第一線に關係なしに戦をつづけた。

獨軍には特別な大砲があつて、眠氣をさます工夫を考へてゐる。その砲は餘程遠距離にあると見え、地の底から起きるやうな般々たる砲聲を聞くのみだ。

併しその砲弾がこちらへ到着したら、極端な急角度で落ちて來る。そして塹壕の背後を掠めて、小舎の入口あたりへ落ちて、安全地帯をメチャ／＼に蜂の巢のやうに孔だらけにしてしまふ。

この夕立は毎日三時、六時、九時、十二時に十分間づつづつ規則正しいことは獨逸人氣質の可愛いところだ。夕立は小さいながらも、確實に墓の敷を殖やして行く。

近頃この方面を擔當したある聯隊が午後六時を戦死者の葬儀の時刻と定めた。すると、その結果は聯隊長や牧師や會葬者は大急ぎで塹壕の中へ遁げ込んで、被り物をかぶつた。その間葬儀の中心人物

は、獨逸兵がいくらおどかさうと一向無頓着で、草の上に横はつて雨霰と降る弾の中に泰然自若としてゐた。死んだ者が一番平和だ。

塹壕でもこれと極つた塹壕線といふものがない。イブレーの大要塞は過去十二ヶ月の戦場であつたが、永久的工事を施す時日も機会もなかつた。土囊の不規則な胸牆で縁取られた浅い塹壕——これがイブレーの牙城であるのだ。

休憩のためにも黙想のためにも、地上の一つの孔——その半ばは水ばかりになり、一枚のトタン板を屋根としてゐる。運河の土手の兎の穴に似た中は、近世詩人に言はせれば夏期には結構かも知れないが、孔の冬はともやり切れたものぢやない。

三日大雨が降つた後で、二日の大霜と来る。雨を吸つた地面は凍るには詭へ向きですぐカンクになつてしまふ。

その上、もう一日雨が降ると小舎の中は溶けたバタのやうに滑り出す。塹壕に水の漏らないやうに塞いでしまへば排水が出来なくなる。

射撃塹壕が山の前斜面にあれば、後の豫備塹壕の水が流れて来る。後斜面になれば豫備塹壕へ流れ込むといふ始末だ。

工兵隊のボックス君、マックス君の如き不屈の若者は阿修羅のやうに働きつゞけてゐる。併しクマ

レのやうな低地では、彼等がいくら働いても、結局この水を他の旅團の地區へ追ひやるに過ぎなかつた。たゞそれを巧妙になしたといふに過ぎない。

敵と戦ふ上に雨と戦はねばならなかつた。

總司令部のいろ／＼の役所からは特別の補助をしてくれた。例の「卓上ゲーム」部は足をマッサージしたり、脂を塗つたりする規定を出した。「母」はゴム長靴を支給した。毛皮の上衣を支給すると「姑」はすぐいやがらせをいつた。

毛皮の大部分は動物學者に知れてゐない動物の皮だ。

マックルウェム伍長は南露のアストラカンの前脚をつけたセントバーナード犬の風采に似てゐる。カーフレー軍曹は「ピーターパン」の物語にある、子供部屋の犬「ナナ」の皮のやうなものを着てゐる。

ニッダ卒は、豹の贗物みたやうな恰好だ。彼が歩くと、ふざけた男は豹の尻つぼの残つたのをひつぽる。

トッシ卒は彼の冬の花嫁姿を見ながら苦り切つて言つた。

「自分は兵隊になるために軍隊へ入つたのだが、山羊に仕立てるつもりなんかしら？」併し、この千態萬様の着物も兎も角も彼等の體を温めた。

尼の方はといふと、天氣のい、日でも水が蹠のところまで浸つてゐる。雨の日には膝までつかつてしまふ。ゴムの長靴は結構なものだが、馬鹿に冷たい。

向うの獨逸兵も辛い日を送つてゐるだらう。彼の塹壕はこちらのよりもつと悪るさうだ。ゆうべも情けない聲が聞えて來た。

「もしもし、そちらにウキスキーがないか。こちらには水が澤山あるが……」

獨逸兵がこんな冗談をいふくらゐぢやまだひどくはないのだらうと、こちらで極め込んでゐる男もある。

獨逸の參謀本部は戦争の將來についてどう考へてゐるのか知らぬが、兵隊は確かに戦争に飽きくしてゐるやうだ。

彼等は敵に對して社交的交際を求めてゐる。未明の頃、下士の眼がたるみ、將校が小舎へ這入つてゐると、敵は感傷的な提議をして來る。出て來て互ひに握手しようなどといふ。そして「此戦争はもう來月でもう十九ヶ月からになるぞ」(カイゼルに言はしたら何といふか知らぬが)といつたりする。先日も朝一人の獨逸兵が手に何か束ねたやうなものを持つて射撃塹壕から飛び出して來て、こちらへ近づいて來た。その距離は三十五呎に足らなかつた。併しだれも射撃するものはなかつた。

ところが不意に緊張せる沈黙中に、この外交使臣らしい勇氣が挫けたと見え、そそくさと退却する

あとから二三發の銃丸が追つかけた。

彼がどうして急に恐怖に襲はれたかわからぬ。マックルウェーム卒が俄かに胸墻の上に現はれたからだといふことに輿論が一致した。

「貴様をスコットランドの動物園から逃げ出して來たライオンと思つたのだらう」

マックルウェームの新しい外套姿を見てかういふものがあつた。

ある地點では戦線の接すること僅に七呎半といふところがある。

ある雨のふる陰氣な朝、大隊がこの面白い場所を向けてゐると、敵から俄かに小銃の急射撃を浴びせてよこした。これと殆んど同時に二人のボウくと頭髮を延ばした男が、息せき切つて胸墻を越えて、塹壕内へ轉がり込んで來た。

この二人の毛深い方が立ち上がると、いきなりバーノックバーン出身の立派な市民マックルウェームの頸にからみついて兩頬に強く／＼キスした。マックルウェームは極度に不快にまた恥しく思つた。この無禮者の今一人はニッダ卒に對しても同様なことをした。

二人の來訪者は「ロスキー、ロスキー」といつてはねまはつた。

彼等は逃亡して來た露國捕虜であつた。

彼等が本部へ連れ行かれた時、獨逸塹壕の後で作業をするため連れて來られてゐたが、機會を覗つ

て下草の中にもぐり込んでゐたと申立てた。

彼等は夜に乗じて射撃線のはうへ近づき、夜の明けぬうちに一と走りすると、丁度間に合つたのださうだ。

彼等が煙草やチョコレートやビスケットや牛鐘などを貰つて、我射撃場を意氣揚々と後方へ立ち去る姿が思ひやられた。

まだほかの來訪者もあつた。ある月の夜、獨軍飛行機が我が戦線の偵察に來た。これは白い飛行機で鳥のやうに美しいものであつた。

その搭乗者が秘密な要塞を撮影してゐる時に、この美術家の企ては英國機の現出によつて破れてしまつた。キラ／＼光る敵機と憤りに燃えた英國機とはこゝで一戦を交へた。

雙方が突進したり、廻轉したり、塹壕の眞上で立派な空中戦争が起きた。塹壕からは飛行機上の機關銃聲を聞いた。その聲は遠方にある新式の高射砲の砲聲に交つて一層高く響いた。

不意に敵機が傾斜した。又もとに直つたと思ふと、くる／＼と廻轉し始めた。そして戦線外へ出ようとなつた。

併し英機は敵の進路を突き切つた。次の瞬間敵機は又もやひどく傾斜した。やがて絶望的に「飛び

込みの」姿勢となつて英軍の塹壕内へ突進した。

獨機は我第二線の後方百呎ばかりの廣々した野の上へ落ちた。

こゝは一瞬間前にはたゞの荒野で人ツ子一人もなかつたが、忽ち破れた敵機の廻りに二百餘人も蟻集して來た。群集はこゝへ駆けつけて來た將校に嗚鳴られて、濫々後へ足を向けた。そこへ獨軍の砲弾が頭上で破裂したので俄かに蜘蛛の子を散らすやうに飛び散つた。

飛行將校も偵察將校も立派に死んでゐた。

勇敢な二人はこゝで立派に葬はれ、こゝの小さい墓地に嘗ては敵であつたが、今は平和な中立者である者の中に埋葬された。

2 廢 墟

ベルギーに於ける住宅難は豫想外にひどかつた。

イブレイ要塞ではフランスに於けるやうに軍隊を宿營させることは容易でない。バラック住ひ、テント住ひ、塹壕小屋住ひといろ／＼だ。

仕合せな男になると、乗合バスの中に住んで數哩離れたもつと文明的な住宅に飛ばして行くのも

ある。バスは嘗てはロンドンの街頭を辻車として往復してゐたものだ。

バスはそれ／＼平和時代にその運命を支配した車掌と運轉手によつて、今も支配されてゐる。彼等はカーキ服と羊皮の外套を着けて、將校には愛嬌たつぷりなお世辭を言ひ、お互ひ同志では昔の儘の原始的な冗談をいひ／＼走つてゐるので、お客さん達に馬鹿にうれしがられてゐる。

もう行先を表示した板や、廣告などは貼られてない。そして全部中立の綠色に塗りかへられた。併し車掌はロンドン時代のやうに行先によつて何番車といふことを喜んで教へてくれる。

「少尉殿！ わつちはあんたを何度もスローン街の外れで下しましたね。阿兄！（バスの運轉手に向いて）てめえはあのお巡りが旗を振つたら、すぐに速力をゆるめろ、彼奴はてめえを睨んでゐるぞ。このバスは第八號です。少尉殿、上り段の傷は砲彈でやられたんぢやねえんです。あの野郎がヴォーホール橋通りで雨降りの土曜日の晩、街燈へブツケやがつたんでげす。危ないところだ。ロンドンシはな」

彼等は勇ましく小さい都會をガタ／＼と過ぎイブレーへ入つた。こゝは商賣は上つたりだし、週期的に砲彈に見舞はれてゐるが、イブレーの町はヂツと持ちこたへてゐる。

軍人はウンとゐる。たれもかれも泥まみれだ。たゞ泥のあつさに厚薄があるばかりだ。泥の薄いのが今度塹壕へ行く番で、泥の厚いのが今塹壕から戻つて來たんだ。

土塹にはこゝかしこに鼠色のポスターが貼りつけてあつて、兵隊芝居が今週中毎晩あると廣告してある。そのポスターの下に大きな字で「大勝利萬歳」と書いてある。

この勇氣凛々たるポスターを一枚獨逸兵へ送つてやりたいやうだ。彼にはこの心持がわかるまいが、彼を非常に惱ますに違ひあるまい。

この町も車のあとになつてしまつた。そしておつ闊いた道路に出た。この道路は眞直な鋪裝道路で、その一側は嘗ては割栗石で固められた道であつたが、今では深さ一尺にも達する泥道となつてしまつた。

とき／＼「電線！」といふ警告が聞える。するとバスの二階にある乗客は腰を折つて前へ屈む。針金で喉を切り取られちや大變だから。電線は道を横切つて二本のポブラの樹に張り渡してある。

悪戯家の運轉手が低く枝を垂れた道を取ることがある。この道ではバスの二階が無慈悲にも枝で頭を薙ぎられるので、乗客は二階の床に鯛のやうに平べたくなつて、一齊に神を呪ひながら、怒聲罵聲を上げる。

「塹壕へ行く途中ぢや冗談いひツこなし。これが最後になるかも知れんから」
運轉手はかういつて言ひわけをしてゐる。

その内バスはゴト／＼した橋を渡つて、嘗ては美しい都會であつた町へ乗り込んだ。